
竜の目のクエスト 【少年漫画的王道ファンタジー小説】

猫田犬次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の目のクエスト 【少年漫画的王道ファンタジー小説】

【Nコード】

N0021N

【作者名】

猫田犬次郎

【あらすじ】

勇者の息子であり王子である少年は、旅に出て、恋をして 魔王になる。

ブログ 殺害（前書き）

旧題は「ドラゴスクエスト」というパチモンみたいなタイトルでしたが、ちゃんとしたタイトルに変えました。

ヒロインの名前を「リイラ」、主人公の姉の名前を「ベラ」に変えました。

アルカディアで読みたい人はこちら

<http://www.mai-net.net/bbs/sst/sst.php?act=dump&cat=original&all=21231∓n=0∓count=1>

縦書きで読みたい人はこちら

<http://pdfnovels.net/n0021n/main.pdf>

ピクシブで読みたい人はこちら

<http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=65145>

プロローグ 殺害

> i 1 1 5 2 1 — 1 6 3 6 <

プロローグ 殺害

闇夜。

そこは世界の果てだった。乾いた風が、何も無い荒野を駆ける。

……はぁ……はぁ……

早足で進む男がいた。

……はぁ……はぁ……

小高い丘に砂埃が立つ。

……はぁ……はぁ……

興奮、動揺、焦燥、不安、恐怖。それらが順繰りに男を追い回す。くそっ！ くそっ！ どうしてこんなことをする羽目に！ 王は本当に呪いを恐れているのか？ わからない。だがおれは恐ろしさ。こんな赤ん坊も殺せないんだから。くそっ！ 震えるんだよ手。このガキめ、今にも呪いをかけてきそうな目でおれを見やがる。まったく、ガキでもやっぱりあのライオス王の血だ。どんな力があるかわかりやしない。ああ忌々しい！

松明たいまつを持った男の腕の中には、まだ乳離ちばなれしたかどうかというほどの子供がいた。一歳過ぎといったところだろう。毛布に包まれて眠っている。

とある王の元に 予知の一族 の者がやって来たのが、全てのき

っかけだった。

「それは本当か」

煌びやかな王宮の一角で、ある男が座ったままで言った。訝しげな表情を浮かべるが、動揺する様子はない。

彼の白髪混じりの長髪は、金や銀の刺繍を多くあしらった華美な服装に品良く垂れていた。肩幅はあるものの、そのぶん長身で全体の印象としては細身の体つきである。しかしその気品ある容姿に反し、黒く光る目だけは異質だった。よくある鋭い目などではない。重いのだ。力を持って威圧するような目なのである。

彼こそが勇者王ライオス。若くして世界の国々を己の力によって統一した男である。もう十年近く戦いの場に出向いていないが、その目は今もお強さを物語る。

ライオス王と目が合い、予知の一族の者はすかさず顔を伏せた。王の目の重さに耐えられなかったのだ。この豪奢でいきすぎた装飾にも思える王宮でさえ、王の目にひれ伏しているかの如く大人しく感じる。彼は王の目を見ず、それでも震えてしまう声で告げた。「……間違いありません。王のご子息はいずれ王を……」

王の息子は王を殺す。

それが予知された未来であつた。

予知の報告自体は珍しくない。必ず当たるため、予知の一族の者は予知が成功する度に報告しに来ていたのだ。

ただ、予知する内容を恣意的に選ぶことは出来ない。それに、予知された未来を変えることも出来ない。どんなに対策をしようと、死ぬと言われた者は死に、来ると言われた嵐は必ず来てしまう。出来るのは予知された事故や災害、紛争などに最善の対応を取ることだけである。

しかし、それでも被害を最小限に出来るので王は予知の一族の力を非常に重宝し、要職でも貴族でもないが予知の一族の者なら誰であろうと、報告のための謁見が許されていた。

その予知が、今回は王の死を示したのだ。

「お前たちでも、それは絶対に変えられないのか？」

王の腹から出る低い声が、男に響き、顔を上げさせた。王の目の重圧が再びのしかかる。

「は、はい、申し訳ございません」

彼は額を床に付けて謝っていた。意識したことではなく、それは半ば本能が取らせたポーズだった。

「ならば変えよう……」

王は静かに言った。

「で、出来ません！」

彼は再び告げたが、王は意に介さずに続けた。

「お前たちではない……この私が！ 変えてみせようではないか！」
王宮全てが振動するが如く、力強い声が響いた。調度品の輝きすら、萎縮したように見えた。

「エディたちをここへ」

そう言って連れてこられたのは、栗色の髪に凜とした目つきの五歳ほどの少年だった。第一王子のエディである。

「エディ、お前はとてもいい子だ。お前が私を殺すなんて到底思えないよ……」

立ち上がった王はエディの頭に手を乗せ、優しくなでた。エディも微笑んだ。

「だが」

次の瞬間、王の手はエディを虫のように叩き潰した。王の王たるゆえんが、一瞬垣間見えた。エディの笑顔はもうそこにはなく、残ったのは残骸と血だまりだけだった。しかし王の手には血の一滴さえも付いていない。

「未来を変えるためには仕方ない。愛していた……愛していたが、必要な代償だ」

王は決断に少しも迷わなかったというのに、慈悲深い眼差しをしていた。

「さて、これで可能性は半分……」

そう言って王は乳母に抱かれた黒髪の第二王子のほうへ目をやった。

「お、お待ちください！」

叫んだのは乳母ではなく、臣下の一人だった。声はうわずり、怯えた様子であった。

「こ、ここで殺してしまつてはどんな呪いをかけられるかわかりません！ お、王のためにも遠くの地でやるべきでしょう！」

その進言はどう聞いても王の命ではなく、自分の命を呪いから守りたいがためであった。だが王はそれも一理あると思つたらしかった。

「確かに……ここで殺すとして、それでも予知が実現するとしたら呪いしかなさそうだな」

臣下の男はほつとした表情になった。しかし、王は間を置かずに言う。

「ならば王宮から最も遠い地で殺して来い……お前が」
途端に蒼白な顔になった臣下の男は力なく答えた。

「……はい」

呆然と立つ男に王は質量でもありそうな声を放った。

「今すぐだ！」

男は返事が叫びかわからない声を上げ、慌てて乳母から第二王子をひつたくって出て行った。

しばらくすると王は側近を呼び寄せた。

「あいつを監視しろ。遂行を確認したら殺せ」

齒切れの良い返事とともに側近の男も出て行った。

王は再び座ると、落着いた様子で言った。

「これで、未来を変えられたとは思わないか」

まるで声の重さが背中へのしかかるように感じた。予知の一族の者は何をしても予知を変えられないということを知っていたが、思つた。

この王なら変えてしまつかもしれない。

気付けばかすれた声で答えていた。

「……はい」

そうして今、最果ての荒野を臣下の男が歩いている。

男はそこで子供を殺すはずだった。しかし、出来なかった。胸に剣を突き立てようとした時、男は子供の目を見てしまったのだ。

射抜くような目。

男はそれだけで気圧された。その瞬間男はやはり呪いを恐れたのだ。呪いだけではない。王の目には程遠いが、圧倒的な力の差を見せ付けられたような気さえた。

男は自分で殺すことを諦め、最果ての崖から落とすことにした。これなら直接手を下さずに殺せる。それに、少しでも遠い方がいいじゃないか。そう自分に言い聞かせた。

……はあ……はあ……

馬を繋いでおける場所から崖まではしばらく歩かなければならなかった。

……はあ……はあ……

砂と岩ばかりの地面で歩きにくいが、男を疲れさせるのは精神的な圧迫であった。もう既に呪われているのではないか。そんな考えもよぎる。

最果ての崖に着くと、そこは暴風が吹きすさび、一面の砂嵐だった。常にごうごうと風が鳴り、崖の近くだと十歩前は見えない。ここが世界の果て……向こう側には何も無いのだろうか。

そう思っただけの崖の向こうに目を凝らして見ても、やはり闇と砂嵐の先には何も見えない。

崖の作る気流と荒野の砂によって、最果ての崖には常に砂嵐が舞っていると聞く。おそらく昼間でも見えないのだろう。

男は足元に転がる石を蹴飛ばした。が、いつまで経っても風の音しか聞こえなかった。崖の下は虚無で底なしだと言われるが、本当

なのかもしれない。

松明を地面に突き立てると、男は安らかに眠る子供の毛布をはいだ。何かに引つかかって助かってしまわぬように、子供は裸にされていた。

子供を抱えると男はすぐさま大きく前へ投げ出した。男には躊躇う余裕すらなかった。

崖を落ちてゆく子供と目が合った。起き抜けのぼんやりとした目が、段々ときつい光をたたえ始める。

悪寒が全身を駆け巡り、男は背を向けた。そのまましばらく息を潜めた。そして深呼吸をしてから再び崖の方を見ると、子供はもういない。

「……やった。やった！ なんともない！ やった！」

男はやり遂げたのを確信すると、すぐに松明を手に取り馬を繋いでおいた場所へ走っていった。

第一章 出会い 1（前書き）

ヒロインの名前を「リイラ」、主人公の姉の名前を「ベラ」に変えました。

第一章 出会い 1

第一章 始まり

1

荷馬車が立てた砂埃は風に消え、剣を佩いた冒険者たちがそぞろに通りを歩く。そこは宿場の村であり、中心部の大通りには宿屋が多く立ち並んでいた。

大通りから何本か外れた、冒険者より地元の者が多く歩く通りで、怒声が響いた。

「待ちやがれ！」

三十台半ばで痩せぎすの店主が怒って果物屋の店先に出ると、十四、五歳に見える少年がひらりと向かいの肉屋のひさしに乗った。黒髪に凜とした黒い瞳。紺色のシャツに黒いズボンの裾を膝下までたくし上げている。

「やなこった」

少年はリングを齧りながら不敵に笑うと、シャツの裾をひらつかせ、軽やかに飛び跳ねて次々と屋根を渡って消えていった。

「ったく、悪ガキめ……」

立ち尽くした店主は頭を掻いた。

「ど、どうしたんですか？」

店主へ声を掛けたのは、肩までの黒髪にブラウスを着た素朴そうな少女だった。年恰好は先ほどの少年とあまり変わらない。宿屋の娘、リイラである。

リイラは逃げていった少年の尋常じゃない身のこなしを目撃し、店主が何か深刻な被害を受けたのかと思った。そうしてリイラは少

し躊躇したものの、思い切って店主に話しかけたのだった。

「いや実はね、たった今ドラゴスの奴が来たんだが……」

そう言って振り向いた店主は驚いたような顔をして口ごもった。

この人も……

リイラと初めて接する者は皆そういった反応で、その度にリイラは悲しくなるのだった。

それでもか弱い少女でしかない彼女の姿を見て、大抵すぐに氣を使つてわざとらしいほど氣さくに話してくれる。

この店主もそうだった。先ほどの反応を誤魔化すように笑顔になった。

「ああ、君が噂のリイラちゃんか。よく来てくれた。さっきのはねえ、『ドラゴス』っていう悪ガキが来たんだ。したらこんなガラクタなんか置いてリングを何個も持つていつちまたんだよ」

店主の手には何やら金属製の筒が握られていた。

「『等価交換だ』なんて言いやがるが、こっちはこれが何なのかもわかりやしねえよ。そんで問い質してやろうとしたら、あつという間に逃げちまったのさ。きつとあいつも知らねえんだろう。ありやただのリング泥棒だよ、まったく」

店主は大袈裟に呆れかえってみせた。

そうやって演技してくれるのはまだ受け入れてもらえないことの裏返しであつたが、それでも好意から出た結果であるので、リイラは笑顔で返さなくてはと思った。

ところが店主には悪いが、深刻な事態かと心配したのに殊のほか滑稽な話だったせいで、意識的に笑おうとする前に自然と笑顔になつていた。些細な差だが、これには大きな意味があつた。

あの人ドラゴスさんっていうんだ……

リイラの胸に灯ったものは、火と呼ぶにはあまりにも優しく、温もりと呼ぶにはあまりにも熱かつた。

その瞬間から、何かが変わった。強い日差しは自分を勇気付けてくれているかのようで、乾いた風も背中を押してくれているような

気がした。リイラは初めて、自分がこの世界に立つ一人の人間なんだと感じることが出来た。

空を見上げれば、大きな鷹が旋回をしていた。今まではそれを見て怖がっていたはずなのに、今は違う。青い空に翼を広げ、悠々と舞う姿を気持ち良さそうだと思った。そして羨ましくも思った。

「今日はいいことあるかもっ」

リイラの足取りは軽かった。

鷹はリイラのいなくなった後も、ずっと大通りの上をぐるぐると旋回していた。

どれほどの時間が経ったかはわからない。鷹は飽きたのか、描いていた円から外れ、西のほうへ向かった。

しばらく飛ぶと、そこはもう村の外れだった。あたりは乾燥した砂と岩ばかりの平地で、ところどころに高さ数十メートルほどの長い岩山が立っている。

恐らく偶然であろうが、そういった岩山が密集した場所があった。大小さまざまな岩山が円形に集まり、ちょうど真ん中は何もなし砂地になっている。まるで円形闘技場のようであった。

その自然が作った円形闘技場では、何人もの子供が遊んでいた。

「我らクエスト団！」

「我らクエスト団！」

十歳を少し過ぎたくらいのやんちゃな少年たちが叫んだ。その鷹は小さな子供なら簡単に仕留めることが出来る。高い岩山に登っている子供なら多少大きくても突き落として殺すことだって可能だ。

狩りの欲望を抱いた鷹は闘技場の上を旋回し、獲物を物色し始めた。

すると、一番高い岩山の上に、リングを齧る少年がいた。しばらく前に大通りで見た少年だ。鷹は猛禽類特有の目で、少年に焦点を

合わせてズームしていった。かなり高い岩山なので落とせば殺せる
と思ったのだ。

少年はリンゴを食べ終わると寝転んだので、上空の鷹と目が合った。

狩られる！

そう思ったのは鷹のほうだった。鷹は少年の射抜くような目に気
圧され、その場から逃げていった。

「やっぱ射程距離が短いのが難点だよなあ。威嚇しか出来ねえや」
少年は寝転がったままつぶやいた。次のリンゴに手を出そうとし
てあたりを探るが、もう全て食べてしまっていた。

やがてむくりと起き上がると、鷹を追い払った彼の目は闘技場で
遊ぶ少年たちを見ていた。その凜とした目を見れば誰であろうと、
彼が少年たちのリーダーだとわかるに違いない。彼こそが 竜の目
のドラゴスの 異名を持つ少年であった。

ドラゴスがその黒い瞳で見下ろす地面では、主に彼と同じ十四、
五歳の少年たちが遊んでいた。無論ドラゴスと同じ悪ガキばかりで
あり、「遊ぶ」といつても、彼らがやっているのは格闘であった。
そして誰もが魔力を使って戦っている。

魔力は精神の筋力。

そう言われているように、魔力は筋力のようにごく当たり前のも
のである。鍛えれば強くなるし、元から魔力の強い者もいる。

ただ、筋力と違って特殊な働きをする。しかも個人によってその
働きが違う。ここでもある少年は体を強化し、ある少年は炎を操り、
ある少年は岩を浮かせたりしている。

こういった魔力の使い方に体系的なものはない。人々に個体差が
ありすぎて、同じ「炎を出す」という結果でもそこに至る過程は千
差万別だからだ。

その大きすぎる個体差を生んでいるのは何よりも種族の差である。
この闘技場でも竜人族や悪魔族など、様々な種族の子供がいる。

しかし、そのほとんどが混血であり、一種族の純粋な血を受け継ぐ者などは世界でも珍しいとされる。大抵は混血が進み種族の外見的特徴がほとんどなく、見た目はただの人間だ。そういう者は大雑把に「混血」と呼ばれる。外見的特徴を残す者は「種あり」と呼ばれるが、その特徴も角が生えていたり尻尾が生えていたりする程度である。逆に混血がかなり進み、もはや種族が特定出来ない者は「雑種」と呼ばれる。

人間族という他の種族とは別系統の少数種族も存在するが、「混血」や「雑種」と区別がつかないため、人々は人間族も他の種族たちも十把一絡げにこう呼ぶ。

魔族。

そしてこの世界は魔界と称す。

クエスト団と名乗る魔族の少年たちが戦う闘技場では今、「種あり」で角と尻尾が特徴的な竜人族の少年リムが炎の球を繰り出している。

人々の混血による均質化が進んでいるとはいえ、血の配分が少しでも違えば魔力を使う感覚は別物である。一般的に血が濃いほど魔力が強く、その代わり偏りが大きいとされている。

竜人族の血を多く持つリムも例外ではなかった。竜人族が得意とする炎は非常に強力であったが、それ一辺倒であった。

対する少年はクエスト団二番手、トルガであった。褐色の肌で、年の割に長身である。混血がかなり進んでいて、彼自身もはや自分のルーツとなる種族を知らない。典型的な「雑種」である。

トルガの魔力にも「雑種」らしい特徴が出ていた。混血が進むほど魔力の作用に偏りがなくなるので、様々なことが出来るようになる。トルガもリムが繰り出す炎の球を氷の壁を作って防いだり、水で消したり、風で吹き飛ばしたりして防御していた。雑種だけあつてかなり多様な技を持っているのだ。トルガも練習のためにあえていろいろな魔力の使い方を試しているようだった。

しかしその反面、強さが足りない。少し時間が経てばどうしても打ち破られてしまう。したがって彼が最終的に炎の球を防ぐのは拳である。

トルガが最も得意とするのは武術であつた。魔力を腕の筋肉に込めてパワーを増幅させ、拳にも魔力を込め強化する。そういった魔力の使い方を武術に組み込んで戦うのがトルガの戦闘スタイルであり、雑種がその力を最も発揮できる戦闘スタイルである。雑種は血の配分こそ混沌としているが、体の構造は均質化しているので、武術のような体系化された体の使い方がかなり有効となるのだ。

つまり練習用の多様な魔力による防御が打ち破られてからが、トルガの実力である。

トルガは向かってくる炎の球を次々と拳で殴り、かき消してゆく。みるみるうちに距離を詰め、リムの横っ腹に一撃を食らわした。もちろん手加減はしているように見えた。

「うう……」

リムは声を出さずに苦しみ、その場にへたり込んだ。

「こっちは避けないって制約なんだからもつと攻めて来いよ」

トルガは物足りなさそうだった。

「……無理……だって」

リムはしばらく出すような声で言った。

リムだって強いほうなのだが、トルガとでは実力に差がありすぎた。トルガは今日、全勝勝ち抜き中であつた。

「おいドラゴス！ 次はお前が来い！」

トルガは岩山を見上げて叫んだ。ドラゴスはかなり高いところにいたので、それをいいことに聞こえない振りをした。さりげなくあさつての方向を眺める。

「ティカムーやるー」

代わりにトルガの前へやって来たのはまだ十歳にもならないティカムーだった。手には棒切れを持っている。本人としては大真面目にやる気らしい。

この少年は皆に おチビのティカムー と呼ばれる通り、まだ幼すぎる。クエスト団には十歳過ぎの子も何人もいるが、さすがに十歳にもならない子を少々荒っばいクエスト団に入れることは出来ない。だがいつも勝手に付いて来てしまうので、結局クエスト団の誰かがお守りする羽目になっている。

「こらこら危ないから来ちゃ駄目だつて。おいロツカ！ ちゃんと見てろつて言つただろ！」

トルガにそう言われて振り向いたのは鳥人^{ちようじん}族の血を持つ おしゃべりロツカ。岩場で誰かと話し込んでいて、ティカムーが闘技場に降りていくのに気が付かなかったようだ。

「え？ なに？」

「だからティカムーだよ！」

「あれ、いつの間に！ へへ、わりいわいい」

さすが口と足がはやいと言われるロツカ。自慢の俊足で駆け巡り、ささつとティカムーを連れ戻した。

ロツカは鳥人族の血を引くが、それでも「混血」なので見た目は人間であつた。そういう風に自分のルーツとなる種族を知っているが姿はごく普通というのが魔族において最も一般的な「混血」というやつだ。「種あり」であるリムのように特徴的な者は少数派だ。

ただ、角だとか羽だとか尻尾だとかいう要素は間違いなくモテる。クエスト団の中では若干ヘタレであるリムも、村の少女たちには密かな人気がある。

「リム、もう一回やるか？」

「いや無理、おなか痛い」

リムは嫌そうな顔をして日陰に逃げていった。トルガはまだまだ物足りなさそうだった。最近のトルガは体の急成長もあつて格段に強くなっていたのだ。

トルガはロツカのほうに目を向けるが、おしゃべりに夢中で戦ってくれないようだ。そんなロツカではあるが、格闘においてはトルガに次ぐ実力を持つ。

ドラゴスは再び寝転がった。

「おい、ドラゴス！ 降りて来いよー！」

だがトルガの呼びかけはやみそうになく、仕方なくドラゴスは寝転がったまま手を挙げて答えた。そして起き上がるのも面倒なので岩山の淵で寝返りをうつと、体は宙に投げ出された。そのままどんどんと速度を上げて落下していったが、ドラゴスは空中で姿勢を少し整え、ふわりと着地した。黒髪が揺れただけで、何とも涼しい顔をしている。

「やるか」

「しつつかし、それどうやるんだ？」

トルガが疑問に思うのも無理もなかった。いくら魔力を込めて強度を増すことが出来るとはいえ、それでは高い所から着地しても地面に大穴を開けるだけである。

「だからいつも言っている通り、なんか体の周りにたくさん魔力を纏まとう感じだつてば」

「いやいやいつも説明があやふや過ぎるんだよ」

トルガにはまず魔力を「纏う」という感覚がわからないようであった。当然である。ごく一般的な感覚だと、魔力は「込める」ものなのだ。だからドラゴスが真面目に説明しても誰も理解してくれない。

ドラゴスは同年代と比べるとやや背が高いが、目の前に立つトルガと比べると明らかな体格差があった。トルガは実に強そうな見た目をしている。

伸びをして体をほぐし、ドラゴスは紺色のシャツを脱いだ。砂で汚さないようにするためだ。するとその背中にある彼の特徴が露わになった。

道具屋を営むドラゴスの家は竜人族であり、父親は立派な角と羽と尻尾を持つかなり濃い「種あり」であるが、ドラゴスにおいては何もない。しかし、ドラゴスには人に竜人族だと思わせる点が二つあるのだ。

一つはその背中である。彼の背中には大きな傷跡があった。それは左右に広がる翼の名残にも見え、いつか生えてきそうな雰囲気さえある。

そしてもう一つは目である。その射抜くような目は生粋の竜人族より竜のような目であったのだ。だからいつしか自然と 竜の目のドラゴス という二つ名が彼に付いて回った。

ドラゴスはまっすぐに立つと、その 竜の目 で見据えた。

「トルガ、魔力なしでやろうぜ」

「勝てると思ってるのか？」

「そのうちね」

ドラゴスは不敵に笑う。

魔力無しの格闘ではいつもトルガが勝っていた。やはり武術の適性はトルガに分があり、それ以上に体格差があった。ドラゴスの身体能力も高い方だったが、トルガに比べればパワーもスピードも劣ってしまうのだ。

勝負が始まってみると、しばらくは善戦するものの、やはり段々とトルガに押されていった。

ここだということと右の拳を繰り出す、トルガにかわされ、代わりに強烈な一撃を腹に食らってしまった。トルガの突き上げるような拳によって体が一瞬浮き、仰向けになって倒れた。

「くっそ、手加減しろよ……」

今日もトルガに負けてしまったのだ。

「だったら魔力使えって」

ドラゴスが魔力なしで戦いたがるのには理由があった。普通に魔力を使ったら勝負にならないのだ。魔力を使った戦いでは、ドラゴスは一度たりともトルガに負けたことがない。まぐれすら起こらないのだ。

「剣持てよ」

ドラゴスは起き上がって背中に付いた砂を払いながら、促した。
「よし来た」

トルガは嬉々として岩場に立て掛けてある自分の長剣を取つてきた。やはり格上の相手と戦うのは楽しいようだ。反対にドラゴスは少しつまらなく感じ、呟いた。

「勝てると思つてるのか？」

「ああ、そのうちな」

ドラゴスはティカムーの持つていた棒切れを借りた。ティカムーは自分の「愛剣」を取られて泣きそうになったが、適当に言いくくめて後はロツカに押し付けた。

それはちよつとした木の枝でしかなかったが、ドラゴスにとっては武器が何であろうとあまり関係はない。負けることはあり得ないのだ。

「さあ来いよ」

ドラゴスは構えた。トルガも中途半端じゃ太刀打ち出来ないのを重々承知していて、すかさず全力で斬りかかった。

トルガは剣に魔力を込めて強化している。おまけに腕力だって相当だ。したがってその一撃は凄まじい威力を持つているはずだった。ところがドラゴスはそれを難なく左手で受け止めた。

「くそ、これでも駄目か」

トルガは悔しがった。またしてもトルガの剣はドラゴスに届かないのだ。

届かない。

そう、届いていないのである。普通は魔力を込めて皮膚を強化するものだが、ドラゴスの場合は違う。魔力を纏つて魔力自体を硬くして防いでいるのだ。それにより、斬つても突いても剣がドラゴスの肌に触れることはない。

纏つた魔力を自在に操ることは、ドラゴスにとっては難しいことではない。いつも「イメージするだけ」と言っているが、やはり誰もわかってくれない。だがドラゴス自身も他に同じことが出来る者に出会つたことがないのでその魔力が何なのかよくわからず、それ以上の説明が出来ずにいる。

トルガの剣を左手で受けたドラゴスは、右手に持った棒切れで突いた。トルガは瞬時に下がり、紙一重で回避した。

たとえ棒切れでもドラゴスが持つともはや棒切れではない。普通は魔力でいくら棒切れを強化してもたかが知れているが、ドラゴスは棒切れを鋼のように強化した魔力で覆っている。だから覆う媒体が棒切れだろうと何だろうと関係ない。ドラゴスが持てば何だって鋼の剣になる。もしトルガが目には魔力を集中させれば、うつすらとドラゴスの纏う魔力が見えるだろう。

下がって距離をとったトルガに対し、ドラゴスは棒切れの先端を向け、炎の矢を放った。

ドラゴスの魔力は特殊であるが、かなり汎用性がある。纏った魔力を自由に变化させられるので、イメージしやすいことなら大体出来るのだ。したがって炎による攻撃は竜人族の家であるせいもあって得意だった。

トルガが次々と繰り出される炎の矢をくぐり抜けて前に出ようとした瞬間、ドラゴスは棒切れをその喉元に突きつけた。鋼のように硬い魔力がトルガの肌に触れていた。

炎の矢で動きを誘導したのだ。それに、身体的なスピードはトルガが上でも、魔力を使った瞬発力ではドラゴスが遙かに上回っていた。これも説明しても理解してもらえないが、筋力の強化に加え、一方で纏った魔力を瞬間的に膨張させ、その反対側で収縮させると瞬時に移動出来るのだ。さらに剣と相手を予め紐状の魔力で結んでおいて一気に収縮させると、その瞬間移動と同時に正確な攻撃が出来る。トルガは魔力のそんな器用な使い方なんて信じられないと言うが、ドラゴスからするとイメージ出来れば出来ることなのだ。

しかしドラゴスの魔力がいくら汎用性があるとはいえ、イメージしにくいことは出来ない。目に見えるような作用でないと、たとえばレベルなものでも出来ない。魔力を変化させるには、炎なら炎をイメージすればいいし、氷なら氷をイメージすればいい。しかし、他人を治癒する魔力なんていうのはイメージが出来ない。だから、

自分の傷を治すのは患部に魔力を込めて治癒力を強化すれば出来るが、他人の傷を治すのはトルガに何度教えてもらっても出来るようにはならなかった。普通、魔力の扱いに長けた者であれば少しくらいは出来るはずなのに、妙なことにドラゴスは全く出来ないのだ。「くそ、また負けた！　どうやって勝てるんだよ……あれ、血が出てる」

トルガの首筋からわずかだが血が垂れていた。

「おい、まさか刃を付けてたのかよ」

「しょうがないだろ、尖ってない剣なんて想像しにくいんだからさ」トルガは自分も刃の付いた剣を、しかも強化して使っていたことを考えてか、それ以上は文句を言わなかった。しかしその間にもトルガの首からは赤々とした血が流れ出た。

「よし待ってろ、今治してやるから」

そう言ってトルガの切り傷に手をかざしてみるものの、何も起こらなかった。むしろ集中するほど密度の高まった魔力が傷口をぐりぐりと押してしまう。

「痛い痛い！　自分でやるよ！」

「おつかしいなあ。どうすりゃいいんだよ」

「こっ、ぐうつと力入れる感じだよ」

「力入れたら魔力使えないだろ」

「いや力入れなきゃ魔力使えないだろ」

やはりドラゴスの魔力は他の者と根本から違う。もはや魔力ではないのではないかとさえドラゴスは思うのだった。

「なあいいだろ？　一回だけ、一回だけでもさ！」

「そんなの出来る訳ないだろ！」

ドラゴスに対して鳥人族のロツカがしきりに懇願していた。

「おい頼むよ。お前の姉ちゃんの尻尾、一回だけでいいから触らせ

てくれよ」

ドラゴスは悪ガキたちのリーダー的存在であり有名だったが、姉も 炎の美竜女ベラ として有名だった。

今年二十歳のベラはよく焼けた小麦色の肌に、燃えるような赤い髪、そしてちょこんと生えた羽が何とも魅力的だった。短い尻尾は服に隠れていることが多いが、ベラは背中の中の小さな羽が服に覆われるのが気持ち悪いらしく、いつも背中を露出する服装を着ていた。スタイルもいい上に、そういった「種あり」が持つ魅惑のポイントを惜しげもなく露わにしていたので非常にセクシーだと評判だ。そうなるとうなると当然十代の少年たちにとっては憧れの的である。

「ベラさんの尻尾、柔らかいんだろうなあ。それで尻尾の裏は白、それも真っ白に決まってる！ なあお前見たことあるんだろ？ そんなとこどうなんだよ」

「そんなの知らねえよ！」

そういったロツカの興味も思春期の男子としては当然のことであつた。

「スカートの下からチラツと覗いたことあるんだけどさあ、あの尻尾は太くて短いタイプだろ？ エロい、エロすぎる！」

「お前何見てんだよ！ …… 確かに太くて短いけどさ」

ロツカと違い、ドラゴスは今までそんなことを考えたこともなかった。しかし、思い出してみればベラの尻尾はエロいような気もした。

「いいなあ、やっぱり家の中では隠さないんだろうなあ。見放題だよな。それにしてもあのタイプはたまらん！ お前もそう思うだろう？」

「姉貴のなんか見ても何とも思わねえよ」

「お、お前まさか細長派か！ 細くて長い悪魔系が好きなのか？ 竜人族のクセに！」

「ば、馬鹿、そんなことねえよ！」

ついむきになってしまった。言われてみて初めて気が付いたが、

確かにドラゴスが「かわいい女の子」というのを想像すると、大抵小柄で悪魔系の尻尾を持つ子だった。

「凶星だな！ 一族の裏切り者め！ ベラさんは俺がもらうぜ！」

「鳥人族のお前は関係ないだろ！」

「うるせえ！ お前なんかブスな小悪魔に引っかけちまえ！」

ロツカは捨てゼリフとともに帰っていった。日も傾き始めたため、他の者も帰りつつあった。

そこは村の中心部と、村の外れにあるドラゴスの家との中間地点にあるので、クエスト団の連中は竜人闘技場と呼んでいた。

クエスト団と名乗っているものの、小さな村では特にクエスト依頼なんかはなく、いつも竜人闘技場で格闘に明け暮れている。そもそも村の外れにたむろしているので、困っている人を助けるような機会すらない。しかも、クエスト団は悪ガキの集まりで、村の中心部に行っても人を困らせる類の連中である。

だが、クエストを請け負う賞金稼ぎとして冒険の旅に出るのは魔界の少年たちが一度は見ると夢であった。ドラゴスだってそうだ。いつかは冒険を始めたいと思っている。

しかし、家のことが優先である。それは親孝行であるとか、一族のことを思っているということではない。何よりも恩義だった。

「馬鹿野郎っ！」

帰宅早々、ドラゴスはげん骨を食らった。道具屋の店主である父、ダグルはその巨体を揺らして何やら怒っている。

「あの金属製の筒を勝手に持ち出すんじゃない！ おら、早く出せ！」

ドラゴスは一瞬何のことかわからなかったが、そういえば昼過ぎまでそれを持ち歩いていたのを思い出した。が、その後は……

「いや、実は、果物屋に……」

「果物屋に、何だ」

「あげちゃっ……た」

「馬鹿野郎っ！」

本日二度目のげん骨だ。

「あれは 断絶の谷 で拾った大切なもんなんだよ！」

「でも何なのかわからないじゃ」

「いや体積の割にやたらと重いしきつとただの金属じゃねえ。まあ、何なのかわからないが」

「だったら別にいらなんじゃ」

「馬鹿野郎っ！」

三度目。

「谷で拾ったもんは何だって俺の宝だ！ 今すぐ返してもらってこい！」

ドラゴスは蹴飛ばされて家を出た。

とはいえ手ぶらで訪ねるのはまずい。こんな時に限って適当に言った捨てゼリフなんかを覚えているのだ。

『等価交換だ』

そんなことを言っておいてタダで返してもらうのは格好悪すぎる。どうせ果物屋も迷惑そうだったしすぐに返してくれるだろうが、ドラゴスには妙なプライドがあった。

ここは実用的なものをあげるのがいいだろう。日が暮れる前に行けばそれでスムーズに、そしてスマートに解決するはずだと思った。

ドラゴスは母屋の裏にある蔵へ行き、薄暗い中でちよいどいい物がないか物色し始めた。腐っても道具屋の蔵だ。何かあるだろうとドラゴスは考えた。

「あんたまた殴られたの」

姉のベラが蔵の戸口に寄りかかって立っていた。

「三回もね」

おそらく先ほどの話も聞いていたのだろう。というか元からでも馬鹿でかいダグルの声で怒鳴られたのだから聞こえないほうがおか

しい。

今まで意識したことはないが、そういえばロツカの妄想の通り、ベラは家にいるときは尻尾を隠していなかった。部屋着用のショートパンツを履いていて、ローライズだからなのか知らないが、腰の下の方から太くて短い尻尾が出ている。

「行かなくていいの？」

「えっ、ああ、手ぶらじゃ格好悪いし、何か交換するものを探してるんだよ」

「ふうん。それより今日は鶏の豚肉炒めに牛ステーキだから、早く帰ってきなさいよ」

ドラゴスも肉は好きだが我が家の献立にはいつも不満がある。

「たまにはサツパリしたもん食わせてくれよお」

「だーめ。竜人族が肉食わないでどうする！」

「いや俺竜人族と関係ないし……」

突然、沈黙に支配された。薄闇が急に重くなった気がした。しまった……

ドラゴスは言うべきでないことをつい口走ってしまったのだ。

ベラは睨むような目をしていたが、悲しそうでもあった。

そして勢いよくドラゴスに歩み寄ると、肩を掴んで壁に押し付けた。

「本気なの？ 本気で言ってるの？」

ベラの瞳がドラゴスの深いところに突き刺さる。ドラゴスは何も言わずに目を逸らした。

「そりや確かに血は繋がってないよ。でも私は同じ竜人の家族だと思ってる。あんたは私の本当の、たった一人の、大好きな弟なんだよ？」

そこまで言われてから目を合わせると、涙が滲みそうになった。しかしここで泣いてしまうのは格好悪く、何より恥ずかしい。プライドもある。何とか堪えるが、代わりに顔をゆがめてしまう。すると急にベラは軽薄な笑みを浮かべた。

「それでもあんたが他人だつて言うなら、こんなことしたつていいわよね」

ベラはそう言って体を押し付けてきた。発達のいい柔らかな乳房の重みを感じた。互いに多くの部分が触れ合う。

そして片耳をくすぐる吐息ばかりの聲が届く。

「尻尾、触つててもいいんだよ？ さつきから見てたの知ってるんだから。ほら……」

ベラは勝手にドラゴスの手を取って、尻尾に置いた。

「柔らかいでしょ？ 熱いでしょ？ でもね、裏側はもっと柔らかくてもっと熱いんだよ」

指先には強い弾力のある柔らかさとともに、ベラの熱がじわつと伝わってきた。

「ほらどんどん熱くなつて来た……裏側、触つていいのよ？ あんたも興奮してきたでしょ？」

吐息が首筋をなでる。鼓動が高鳴り、ベラの強い鼓動も柔らかな胸の向こうに感じた。

危うい流れだったが、ドラゴスはそこでようやく姉の思いを受け取った。

「ば、ばか！ 自分の姉に興奮するかよ！」

姉の肩を掴んで突き放した。

「あそ。じゃあ早く帰ってきなさいよ」

そう言つと姉は素っ気なく蔵を出て行った。

今更言つても聞こえやしないが、ドラゴスは言わざるを得なかった。

「……ありがとう」
それにしても……

くそっ！ 今「姉にしとくにはもつたいないくらい魅力的だったな」とか思つちやつた俺の馬鹿野郎っ！ 一体何考えてんだ馬鹿野郎っ！ せっかくいい場面だったのに馬鹿野郎っ！

ドラゴスは気を紛らわすためにも猛烈な勢いで物色を再開した。

しばらく物色したのちにドラゴスが選んだのは短剣だった。ただの道具屋だが武器も扱っていたのでこういうものはたくさんあった。その短剣は細身で黒い鞘、金具は金メッキだった。ドラゴスはなかなか悪くないデザインだと思った。

だが何よりも同じものが何本もあったのが決め手だ。それならば一本くらい持っていても問題ないだろうとドラゴスは考えたのだ。果物屋だし、短剣なら果物ナイフとしても使えるだろう。それにしても大きすぎる気もするが、メロンだとか大きい果物専用にするにはいいじゃないか。そう思った。

蔵から出ると、外は朱に染まり始めていた。ドラゴスは早足で歩いた。このままだと日が暮れてしまいそうだった。

ドラゴスの家は西の外れで、村の中心部からは少し遠い。

この村自体も魔界の大地では最西端の村だ。だから「端村」はしむらなどと呼ばれているが、ちゃんとした名前はない。それほど辺鄙な村であつた。

村のさらに西には ラグレー山脈 が南北に大地を走る。非常に高い山が連なるうえに魔物も多く、よほど強い者でない限り越えてゆくことは出来ない。

また、 ラグレー山脈 の尾根は大抵竜の縄張りであり、それも越えられない理由の一つだ。竜というのは魔族一般の人々からすると恐ろしく強い。

魔界において野生の竜を見たことのある者は少ない。大都市に住んでいれば見世物としても存在しているし、竜を連れた騎士を見ることもある。しかし、そうでない魔界の一般人は竜という生き物すら見たことがないのだ。

「竜の目」などと言われるドラゴスであるが、実は彼も竜を見た

ことがない。それどころか竜人族ですらなかった。

ドラゴスが「発見」されたのは、ラグレー山脈のまたさらに西にある、断絶の谷であった。見つけたのは竜人族の道具屋、ダグルだ。

ダグルは屈強な竜人族であり、血も濃い。つまり、限りなく竜に近く、非常に強いのだ。したがって小さな竜ならば簡単に倒すことが出来る。そんな商人は他におらず、彼はラグレー山脈を越えてゆける唯一の商人であった。だから山脈の向こう側で手に入れた物を高値で売ることが出来た。

さらに、山脈を越える冒険者も滅多にいないというものがあつた。山脈を境にして向こう側は乾燥地帯となっていた。そしてそのま西に行くにしたがつて何も無い荒野となり、そこで行き止まりだ。大地を分かť 断絶の谷があるのだ。

谷のこちら側から谷底に下りるのは簡単であるが、向こう側には渡れない。見上げても見えないほどの崖がそり立っている。しかも、谷には生物が皆無であるために草の一本すらない。何かを探してもたまに落ちている人工物くらいしか見つからない。

つまり、山脈の向こうは何もないうえに行き止まりなのだ。だから冒険者も尾根の手前側にはよく行くが、向こう側には無理をしてまで行こうとしないのだ。まだ未知の土地であるなら行く価値もあるかもしれないが、何もない断絶の谷があるということはある程度知れている。用があるとしたら、人工物を拾いに行く物好きであり屈強な道具屋くらいのものであるのだ。

ただ、魔界一般にはほとんど知られていないことだが、ダグルは何度も断絶の崖に行くことで、ある事実を知っていた。

谷の向こうに別の世界がある。

ダグルが谷で拾うものは、魔界の文化圏とは明らかに異なるものであつたのだ。だから「珍品」としてよく売れたが、それが何なのか理解出来ない一品も少なくなかつた。

この世界が「魔界」という風に何かと区別されて呼ばれているこ

とからもわかるように、古代には他の世界もあったという。民間伝承に過ぎないが、人間族は古の時代に他の世界から来たという俗説めいた話だってある。ダグルはその「他の世界」が断絶の谷の向こうにあるのだと確信していた。

そう確信するのにはいくつか理由がある。一つは谷の向こうから落ちてきたと見られる人工物が見つかることだが、ダグルはまさに落ちてくる瞬間を見たことがあるのだ。しかも一度きりではないし、同じ場所でも次の機会に行ったときにはまた違う何かが落ちていることもよくある。つまり現在もなお、谷の向こうには文明が存在し、たまに誰かが何かを落としていくのだ。

そしてもう一つは、断絶の谷には何らかの結界が張られているということだ。それも生物を殺し、谷の両側の行き来を阻むような強力なものだ。魔力の弱い者ならすぐに死んでしまうだろう。ダグルほどの強さがあっても谷底は数日間の探索が限度だ。体調を崩すこともしばしばあり、ダグルでも谷底で一週間生き延びる自信はない。

そういう結界を張る何かが、谷のこちら側にあるようには見えなかった。こちら側はただ荒野が広がるだけの土地なのだ。向こう側がどうなっているのかわからないが、向こう側の誰かがやっていることのように思えた。

だがダグルが他の世界を確信した最たるものは他にある。それは、ドラゴスの発見である。

明け方の出来事だった。

こちら側からは谷底に下りられるといっても丸一日はかかるため、一旦下りてしまえばダグルは谷底で寝泊りしていた。昨晩は疲れてすぐに寝てしまったため、その日はやたらと早く起きてしまい、夜明け前から探索を始めていた。

岩と砂の乾燥地帯なので、日が出ないうちはかなり冷えた。もっ

とも、深い谷底なので日中もそれほど暖かくはならないが、夜間との寒暖差はかなりあった。

夜が明けていないので光もまったく差さない。ダグルは魔力の炎であたりを照らしつつ、暖を取った。

めばしい物を見つけられないまま岩場を歩いていると、不意に一筋の光が射し込んできた。夜が明けたのだった。

光の筋が一つ二つと次第に増してくると、ダグルは炎を消した。しばらく歩いたので体も温まっていた。

そして平たく大きな一枚岩を一条の光が照らした時、異様な光景を目の当たりにした。

竜だ、竜がいる！

竜が左右に大きな翼を広げて仰向けになっている。ダグルは咄嗟にそう思った。

しかしよく見てみると、そうではない。子供だった。それも一歳くらいの赤ん坊だ。翼に見えたのは大量の血しぶきだった。

慌てて駆け寄ると、意識はないがまだ生きているようだった。起こしてみると背中の肉が裂けていた。ダグルの魔力では簡易的な治療しか出来ないが、ひたすらそれを繰り返して何とか傷口を塞ぎ、応急処置を施した。

その後不要な荷物を捨てて急ぎ、半日で谷から脱出し、介抱した。迅速な行動の甲斐があつてか赤ん坊は翌日には目を開けた。ダグルはその目を見た時、再び「竜だ」と思ったのだった。そしてその場で名前を付けた。

ドラゴスはどう見ても谷の向こう側の高い崖から落ちてきたようだった。それにもかかわらず助かったのは、あの特殊な魔力のおかげだろう。背中の怪我は魔力で衝撃を吸収しきれずに地面と激突して出来たのか、それとも体から一度に大量の魔力を放出したせいで内側から肉が破れて出来たものなのか。真相はわからない。だがど

ちらにしろ、落ちてゆく過程であれほどの魔力に目覚めなかったら死んでいただろうし、落とされたことであの魔力を得たのだろう。ドラゴスの魔力は現在でも異常なほど防御に特化しており、その時の出来事が無関係だとは思えないのだ。

落ちてきたドラゴスはまだ物心も付いていない赤ん坊であり、また服も着ていなかったたので、どのような経緯だったのかは一切わからない。ただ、ドラゴスの存在自体は、崖の向こうに人の住む世界があるということの十分すぎる証拠であったのだ。

ダグルはそれら全ての情報をドラゴスに伝えてあった。そのうえで本人が自分の道を決めればいいと思った。息子として育ててきたが、家に縛られる必要はないとダグルは考えたのだ。

しかし 断絶の谷 に行くことだけは禁じた。結界は得体が知れず、危険すぎるからだ。

それにダグル自身も谷へ行く度に命を削られている感覚があったのだ。それを話すと「じゃあなんで行くんだよ」なんてドラゴスは言っていたが、その時は「一度宝を見つけちゃったらやめられない」と冗談めかして返した。結局ダグルは毎年行き続けていた。

それは本人の言葉通りに「期待」からだったのかもしれないし、拾得物を高値で売って家族を養うという「義務感」からだったのかもしれない。

しかしひよつとすると、道具屋の主人でしかない彼も、異世界への「夢」を抱いていたのかもしれない。

第一章 出会い 2

2

リイラがこの村へやって来たのは一週間ほど前のことだった。

生活していくためのあてもなかったが、奥さんに先立たれたばかりでちょうど人手も不足していた宿屋のマルクが面倒を見てくれることになった。

リイラ自身も「何でもする」と言っていたし、マルクも悪魔族なのにやたらお人よしなのですんなりと話は進んだ。

それでもやはり突然この村に現れたリイラのことはすぐに噂となつて広まつた。そういった外見的特徴はないにも関わらず、リイラのことを化け物や異形の獣であるかのように思ってしまうものも多かった。

小さな村であるぶん、そういう未知の存在を恐れる感情も大きいのだ。特にリイラの事情、というより、たとえ見た目が同じでもリイラが得体の知れない存在であるという「事実」は人々を怖れさせるのに十分であった。

だが直に接してしまえば、そのうちにただの少女でしかないとわかる。しかもとても素直でいい子だ。だから事情がどうであれ、何度も接すればきっと受け入れてもらえるはずだ。

そうマルクは考え、なるべくいろいろなお使いを頼み、より多く村人と接する機会を作っていた。

その中に、緊急の用ではないが道具屋でお鍋のふたを買ってくるというのがあった。道具屋に顔を見せるために何でもいいから買うものを指定しなければ、というマルクの意図が見え透いていて、リイラは感謝の気持ちで一杯になるのだった。

リイラはその道具屋へ向かい、村の外れの一本道を歩いていた。

影は長く伸び、空も雲の地面も橙色に染まっていた。日が暮れる頃には帰るように言われているので、急がねばならない。

ここら一帯は乾燥した荒野で、長細い小さな岩山がぼつりぼつりと立っている風景が印象的だった。リイラはその岩山と岩山の狭間に夕日が落ち、影が少しずつ伸びていくのを横目に見ながら歩いていた。

するとすぐ近くの岩陰に二人の少年がいた。二人ともリイラよりいくつか年上の十七、八歳に見えた。あまり素行の良い感じには見え、リイラは絡まれたら嫌だな、と思った。

「おいお前、リイラだろ」

やはり村で噂になっていくリイラなので話しかけられてしまった。声を掛けたのは二人のうち背が高く骨ばった体格の少年で、彼の高圧的な態度がリイラには恐かった。

「……はい」

リイラは平静を装って答えたつもりだったが、声音からは恐怖の色が滲む。

「うわ、本物だ！」

少年たちは新しいおもちゃを見つけたかのようにだった。二人して顔を見合わせ、きつとどんな風に遊ぼうか考えているのだろう、顔がにやついている。

「異世界から来たってほんとか？」

二人のうち背の低いほうが聞いた。低い、といってもリイラと同じくらいの身長である。年の割には小柄かもしれないが、その筋肉質で男性的な体つきはリイラとの力関係では遥かに優位に立つ。

「……ええ、はい」

リイラは恐る恐る答えた。リイラが突然異世界から飛ばされて来たという噂が本当だと知ると、人々はその反応でいつだって彼女を悲しませる。

「マジかよ！」

「化け物じゃねえか！」

少年たちの目は好奇心に輝いているが、それは「人」ではなく「物」に対する時の目だ。

その乾いた視線にリイラはぞっとする。冷たいなどという温度すら存在しないのだ。この一週間でやっと手に入れ始めた「人」としての存在が、脆くも崩れ去る。

人として生きていていい。

異世界でその許しを得るまで、どれだけ悲しみが彼女を襲ったことか。生きた人間だと思われること、それだけでいいのに、難しかった。

異世界人。誰かがそう呼んだ瞬間から、人々にとって彼女は化物、もしくは動くおもちゃでしかなかったのだ。

もし宿屋のマルクがいなかったら。リイラはそう思うだけで心が曇る。

「すげえ、人にそっくりだよ」

「よく出来てんなあこれ」

「……」

少年たちはリイラを棒で突付いてみたりして観察した。最初から素手で触ろうとはしないのだ。そして自分たちが見ているのと同じように、リイラも自分たちを見ているという考えは全くない。リイラにだって「心」がある。そんな当たり前のことでも、そう簡単にはわかってもらえない。

次第に慣れてきた少年たちは、今度は指先でリイラの肩を突付いてみたり、軽く突き飛ばしてみたりする。

「やめてください……」

そう言っても少年たちには、ちゃんと反応するんだな、くらいの情報でしかない。むしろそれは少年たちの嗜虐的な欲望を刺激するのだった。

「痛いです……ごめんなさい……」

叩く。つねる。リイラが反応すること自体が面白いのだ。そうして「人と同じかもしれない」ということを感じ始めると、ある一定

の山を越え、好奇心が底なしに膨れ上がる。といっても、少年たちにとっては「人と同じかもしれない『何か』」でしかない。

背の高いほうがリイラの腕を掴み、岩の陰へ強引に引っ張っていった。だが少年にとっては人を掴むのではなく、物を掴むのと同じようにただであり、殊更荒く扱ったつもりもない。

「脱げよ。服の中も人と同じなんだろ？」

少年はリイラのブラウスを引っ張り上げる。裾がだらしなく垂れた。

「……ごめんなさい」

リイラは顔を伏せながら必死に謝ることしか出来ない。

「脱げつつつてんだよ、ほら！」

今度は頬を叩かれた。身体的な痛みなどどうでもいい。衝撃が壊すのは心だ。

「こりゃ俺が脱がした方が早いぜ」

もう一方の少年が胸を鷲掴みにしてリイラを岩に押し付けた。後頭部を岩に打ち付けられ、胸が圧迫されて息がうまく出来ない。

「うはっ、やわらけえ！」

乳房をもみしだいた少年はブラウスを無理やりに引っ張った。ボタンがいくつか弾け飛び、隙間から下着が覗く。

「待て、俺もそれやりてえ！」

必死に抵抗してみても、すぐに押さえつけられてしまった。リイラには抗う力などないのだ。気付けば涙が出ていたが、それも少年たちを楽しませる一つの装置でしかなかった。

もう何もかも諦めてしまおうかと思った。きっと心を捨てればつらくない。「物」になるうか。

それでもまだ「人」でありたいと思った。だから最後に、願いを叫んだ。

「……助けて！」

荒野に虚しく響くだけかもしれない。それでも叫んだ。

「誰か助けてください！」

岩場に願いが反響する。

「そのクエスト、乗った！」

リイラは声のした方を見上げた。目の前の細い岩山の上に、夕焼けを背にした人影があった。

「我こそは 竜の目のドラゴス！」

リイラに絡んでいた二人の少年も啞然として見上げていた。
もしかして昼間の……

「竜の目……」

「まさか……」

ドラゴスが飛び降り、ふわりと着地すると、二人の顔はみるみるうちに青ざめた。

「や、やばい、本物だ！」

そしてドラゴスが腰に下げた短剣を見たのだろう。

「殺される……」

二人とも顔を見合わせて状況を確認しているようだった。

「おい二人とも……」

ドラゴスは案外暢気な口調だったが、少年たちは怯えきっていた。

「うわあ、ごめんなさいっ！」

「人殺し！」

ドラゴスの言葉も待たず、背を向けて逃げ出だしていった。

「いや、ちがつ……あつ、これか」

ドラゴスは自分の短剣に気付いて笑った。リイラはこの滑稽な一連の出来事がまるで他人事であるかのように、クスリと笑った。しかし、振り向いたドラゴスと目が合うと、彼が自分を助けるために行動してくれたことに気付き、慌てて駆け寄った。

「あの、ありがとうございます！」

リイラは深々と頭を下げた。

「お陰で助かりました。本当にありがとうございます！」

何度頭を下げてでも足りないと思った。

「『助けて』って言ったろ？ クエストの依頼があったんならクエ

スト団としては当然の行いさ」

リイラとは対照的にドラゴスは落ち着いた口調だった。

「クエスト？」

「ああそうだ。誰かの願いを叶える、それがクエストだ！」

ドラゴスは胸を張って言い、笑って見せた。しかし「クエスト」と聞いて不安になった。

「でも私に払える報酬なんて……」

「いいのいいの、俺だって岩に登って遅れ……いや偶然あの岩に登ってただけだしさ」

「でも……」

「それよりどうして棒で突付かれたりしてたんだ？ 普通の絡まれ方じゃないよなあ」

ひやりと心に冷たいものが差し込んだ。この人もさっきの少年たちと同じように振舞うようになるのかと不安になった。

リイラは言うべきか迷った。

「あ、まさかお前、異世界人のリイラとか」

やはりこの人も……

しかしリイラは隠せるようには思えなかった。

「……はい」

また始まるのだろう。リイラは悲しくなった。

珍しいことではないのだ。よくあることなのだ。この人が他の人間と同じだろうと悲しむことではない。リイラは自分に言い聞かせた。

しかし、ドラゴスの見せた反応はリイラにとって初めての経験だった。

「うおっ、本当か！」

驚いたドラゴスはまず、両手でリイラの手を握った。

「あったかい！」

そしてリイラの額に自分の額を付けた。

「同じだ！ じゃあそんな薄着じゃ寒いだろ、大丈夫？ 昼は暑く

ても夕方から急に冷えて来るんだよ、ここらは。もしかして異世界って夜もあつたかいのか？　どんなとこなんだ？　どうやって来たの？　どうすれば行ける？」

ドラゴスが感じているのと同じように、握った手から、寄せた額から、リイラもドラゴスの暖かさを感じた。しかしそこにはそれ以上の意味があつた。ドラゴスが自らと同じ存在として接してくれることが何より暖かく、嬉しかった。

ドラゴスの温もりが触れた肌から染み込んでいくようで、それが体の奥へと達すると、胸の中で何かがはじけた。

抑えようとしても、抑えようとしても、涙がとめどなく溢れた。

「え、あれ？　俺まずいこと言った？　ごめん！　よくわかんないけどごめん！」

リイラは首を振るが、言葉にならない。

訳もわからず謝りながら、ドラゴスはもう一度手をぎゅっと握った。しかしリイラはそうされると余計に涙が出てしまうのだった。

もう我慢しなくていいのかもしれない。そう思ったらもう、声をあげて泣いていた。

……　つらかった。今まで本当につらかった……

その場にへたり込み、赤ん坊のように大泣きを始めてしまった。

困惑してとりあえず頭をなでるドラゴスに対し、甘えるのを抑えられなかった。

そうしているとリイラは、ドラゴスと自分との境界がなくなっていくような不思議な感覚になっていった。

ようやく泣き止んで話せるようになった頃には赤々としていた夕日が地平線に隠れ、薄暗くなり始めていた。時折肌をなでる風にリイラは鳥肌を立てた。

「ほら、寒いだろ？　それでも羽織れよ」

ドラゴスだってシャツ一枚なのに、ボタンを外し始めた。

「だ、大丈夫です！」

リイラは慌てて断った。

「ほんとに？」

「わ、私熱がりですからっ！」

ドラゴスは何度も心配してくれたが、リイラはその都度、平気だと言った。

ブラウスのボタンを上まで留めていても胸のところの二個がなくなっているの、風が吹くとやはり少し寒気がした。ドラゴスもそれを見て心配してくれているのだろう。

しかし、平気だと言ったのは嘘ではなかった。リイラはなぜ次第に体が熱くなり始めていた。

「どうしてこんなとこ一人で歩いてたんだ？ 俺が言うのもなんだが、ここらは悪ガキたちも多いし」

ドラゴスがリイラの目を見て話す間じゅう、リイラの体温が上がりに続ける。

「あ、あの、ど、道具屋さんに行こうとしてたんですっ」

おまけにちゃんと喋れていない。リイラは体調が悪いのかもしれないと思った。

「道具屋？ うちだよそれ！ なんだ早く言ってくれよ。じゃ行こうぜ俺んち」

ドラゴスはリイラの背中を押し、すぐに道具屋に向かおうとした。背中が熱くなった。

「い、いえ、今日はいいんです！ 日も暮れちゃったしっ」

「そうか。じゃあ泊まってく？」

「と、とま、泊まらなくていいですっ。か、帰るですし、なんか体調悪いです！」

「ああ確かに様子おかしいもんな。どれどれ」

ドラゴスはまた額同士をくっつけた。

「うわ、すごく熱いじゃん。大丈夫？」

鼻先が触れそうな距離で、ドラゴスはリイラの目を覗き込んだ。
リイラは何も答えられず、体から火が出てしまうかのように感じた。

この人の持つ異世界のウイルスかなんかにやられているのだろうか。リイラは思った。

特に目が猛毒なのかもしれない。異世界ならあり得る。この人の目で見られるとどうにも参ってしまうのに、こんな近くで目が合ったらきつともう死んじゃう……

頭がぼうつとし始め、何度も問いかけるドラゴ스에返事を返せなかった。

「おい、どうした！ 宿屋マルクさんのところだろ？ すぐに送るっ」
ドラゴスはふらふらのリイラを抱きかかえた。

リイラはさらに参ってしまい、やっとのことで一言発した。

「……もうだめ」

リイラはドラゴスの腕の中で目をつぶっていた。ドラゴスの目の猛毒にやられないようにするためでもあったが、それ以外にも理由があった。

単純に目を開けると恐いのだ。ドラゴスの移動速度が異常なほど速く、そして一歩ごとに高く空を飛んでいる。普通に歩くときの百分分を優に超えるほどの距離を飛んでいるというのに、着地はふわりとしていて衝撃は全くない。リイラはまだ魔力についてよく知らないが、おそらく魔力を使っているのだと思った。

しっかりと首に手を回して掴まっているし、ドラゴスにもちゃんと抱えてもらっているので落ちることはないだろうが、それでも恐かった。

そうして目を閉じたのだが、リイラの熱は不思議と収まっていた。そして五分も経たないうちに元気になっていた。

やっぱりあの目が毒なのかな。目を合わせなければ異世界ウイルスも効かないのかも……

しかし今更元氣だとは言いつらい状況だったので、リイラは黙ってじっとしていた。

今度はむしろ、心地良くなってきた。リイラにはドラゴスと触れる部分から温もりが伝わり、それがたまらなく気持ちいい。

この人は解毒作用もあるのかなあ、なんだか癒されてる。ああ、気持ちいい。ずっとこうしていたい……

リイラはまだ当分着かないで欲しいと願った。もしその願いを口に出せば、ドラゴスは叶えてくれるかもしれない。そんな期待が頭をよぎった。

「着いたぜ」

「はやっ！」

つい驚いて目を開けてしまった。行きは歩いて三十分以上かかったというのに帰りは正味五分で着いてしまったのだ。

宿屋は大通りから一本入った人通りの少ないところにあり、建物も三階建てだが横幅が狭く、こぢんまりとしている。

やはり果物屋の時のように街中は屋根の上を渡ってここまで来たのだろうか。リイラは周囲を見回しながら思った。

「少しは元気になったみたいだな」

抱えられたリイラは首に手を回しているの、声に振り向いたら至近距離でドラゴスの目を見てしまった。

「は、はいっ」

せつかく良くなっていたのに、これで再び熱がぶり返した。しかもドラゴスと触れている部分が多く、そこからも急激に熱を発生始める。くすぶっていたものが一気に発火する。

恐ろしい異世界ウイルス！ リイラは急いで目を閉じた。

「あれ？　なんか熱くなってきた」

抱いたまままで密着部分が多いのでドラゴスもすぐに気が付いたようだった。

リイラの再びの病変に表情を険しくしたドラゴスは、また額を寄せた。鼻先が微かに触れ合った。

「やっぱ熱あるな……それに脈がおかしい！」

ドラゴスは緊迫した様子でそう言つと、ぐっと抱き寄せてリイラの胸に耳を押し付けた。リイラは圧迫された乳房が燃えるような猛毒に冒されていると感じた。

「相当速い！」

爆発しそうな動悸がしていて、リイラは意識が飛びそうになった。死の不安が怒濤のように押し寄せる。

「はぁ……はぁ……」

息も絶え絶えになっていた。

「だめ……だめ……」

自分でも何を口走っているのかわからなかった。

「……しぬ……しんじやう……」

「大丈夫だ！ 助かるって！」

ドラゴスは勢いよく宿屋の扉を開け、大声でマルクを呼んだ。その切迫した声の様子を聞いてか、おっとりした性格のマルクも大慌てでやってきた。

「マルクさん！ リイラが！」

ドラゴスが簡単に説明すると、マルクはずんぐりとした体をせわしなく動かして奥の一室に通した。そこはベッドと机の他に小さな箆笥があるだけのリイラの部屋だった。

ドラゴスがベッドに降ろして寝かせると、リイラは段々と落ち着いていった。

「いやぁ、ありがとう。ドラゴス君」

「ま、クエスト団だからな！」

ドラゴスはそう言つて誇らしげに笑つてみせた。

そしてドラゴスは別の部屋に案内され、マルクはリイラの看病を続けた。

ドラゴスが泊まっていくなと言ったので、案内されたのは二階の一室だった。こちらにもベッドと机があるだけの小さな部屋だった。

「すぐに用意できる夕食はトマトスープとパンしかないけど、それじゃ竜人族を満足させられないかな？」

「平気平気。俺さっぱりしたものが食べたかったんだ」

姉が夕食を作って待っているはずだったが、ドラゴスはリイラが心配なので仕方なかった。それに随分と魔力を消耗していてあの移動方法はもう出来そうになく、帰るとしても歩いて帰らねばならなかった。

「じゃあもう少ししたら運んでくるよ」

マルクが部屋を出ると、ドラゴスはベッドに仰向けになった。

それまで夢中だったので感じなかったが、ドラゴスの疲労が限界に近かった。全力で魔力を使いながらこれほどの距離を移動したのは初めてだったのだ。

体の周りに大量の魔力を纏い、踏み込んだ足を蹴りだす瞬間、下方で圧縮した魔力を急激に膨張させて高く飛ぶ。そして着地の時には衝撃を吸収させながら魔力を圧縮する。この二つを一步ごとに繰り返すことでより速く、飛ぶように走れるのだ。

今までは短距離でしか使っていなかったものでわからなかったのだが、問題もあった。

スピードの調節が難しく、加速し続けてしまうのだ。一步ごとに歩幅は大きくなり、消費する魔力も多くなる。そのうちろくに制御出来なくなるわ大量に魔力を消費するわけで、止まる時に必要な相当量の魔力も残っているか危うかった。最後は無我夢中で宿屋前に止まったが、ドラゴスの魔力はもう完全に絞り出されたという感じだった。

鍛えなきゃな。ドラゴスは痛感した。将来のためにはこれじゃ駄目なのだ。

大の字になったまま、ドラゴスはまどろんでいた。

それからどれほどの時間が経ったかはわからないが、しばらくするとマルクが夕食を持ってきた。言っていた通りパンとスープの質素な食事だったが、疲労したドラゴスの食欲を刺激するのには十分に魅力的だった。

トマトスープから立ち上る香りが鼻に入ると唾液が出て、パンの香ばしさに胃は期待の声を鳴らす。ドラゴスはマルクが部屋を去る前にぺろりと平らげてしまった。

「ありやりや。やっぱり足りないかい？」

「まあね」

「こりや申し訳ないねえ。しばらく後になるかもしれないが、きつとまた何か持つてくるよ」

そう言つて部屋を出ようとしたが、ドラゴスは引き止めた。

「リイラはどうなんだ？」

「ああもう大丈夫だよ。横になったらすぐに良くなった」

それを聞いて安堵した。ドラゴスも女の子があんな風に悶えているのを初めて見たので、相当に慌てていたのだ。

「一体何が原因で」

「リイラから今日あった出来事を詳しく聞いたが、ふふ、こりやまあ一種の心労だね。大したことじゃないさ」

「心労……俺なんかしたかな」

「いや君は悪くないよ。むしろこれからも会つてやつてくれないかな」

「それくらい構わないけど……そうだ。ならここ泊まるの毎回タダにしてくれよ」

「そりや駄目だよ君。まあ、ツケにしとくくらいなら構わないが」

「ちえっ」

「でも今日はタダでいいからさ。それで許しておくれよ」

「仕方ねえなあ」

マルクが食器を持つて出て行くと、ドラゴスは再び寝転んだ。量

的には物足りないとはいえ、気分としては腹に何か入ったことで充足していた。そのまま心地よい気分を味わいながら、ドラゴスはまたまどろみに落ちていくのであった。

リイラはあれほど参っていたのが嘘のように元気になっていたが、それでも不安そうな顔でベッドに腰掛けていた。

「本当にもう大丈夫なんですか？ 魔界の毒とかじゃないんですか？」

「毒？」

リイラの言葉にきょとんとしたマルクだったが、意味がわかると大笑いした。

「あつはつはつ、確かに甘酸っぱい毒とも言えるかもね。でも大丈夫、害はないさ」

「本当ですか？」

しかしリイラのほうは至って真剣であった。異世界に飛ばされたせいでやたらと疑心暗鬼になっているのだ。先ほどまでの異常な様子も、半分は「命の危険が迫っているかもしれない」という不安がもたらした自己暗示が原因であった。

「でも、死んだりすることは絶対がないが、またさっきのようになることもあるだろうね」

「そ、そしたらどうすればいいんですかつ」

リイラはメモにでも取りそうな必死さで聞いた。

「どうもしなくていい」

「え？」

「どうもしなくていいんだよ。逃げたりもしない。そのまま、そのまま向き合っただ。そうすればだんだん良くなってくるはずさ」

「は、はい……」

少し拍子抜けしたが、従順なリイラは心に銘記しておいた。

そのまま向き合う……か。

「それじゃ、リイラも元気になったことだし、ドラゴス君のお腹を満たす方法を考えようか」

「はいっ」

リイラは張り切って立ち上がると、とろけそうな笑みを浮かべて台所へ向かっていった。

「……こりゃとんだ猛毒だ」

「え？ 何か言いました？」

振り返ったリイラに何でもないと言い、マルクも後を追った。

マルクは内心驚いていた。リイラがこんな笑い方をする子だとは知らなかったのだ。人と話す時は笑顔を作るものの、どちらかと言えば暗い子で、今まで自然と笑みがこぼれることなどなかった。

よかった……全部ドラゴス君のおかげだろうな。マルクはドラゴスに感謝しつつ、安堵した。

リイラが大皿を持って部屋に入ると、ドラゴスは眠っていた。しかしそれでも匂いを嗅ぎ取ったのか、何やらつぶやいてから勢い良く跳ね起きた。

「テコテコ！」

「きゃっ」

驚いたリイラは持っていた大皿を危うく落としそうになった。

「危ないですよ」

リイラは冗談めかして咎めるような顔を向けた。会ってからそれほど経っていないのに、不思議と壁を感じなかった。

「わりいわりい。それ テコテコ だろ？」

「はい。揚げたてです」

テコテコ とは、たれに漬け込んだじゃがいもを油で揚げたものである。ドラゴスのすむ魔界の西部地方でポピュラーな料理だ。

「うーん、香ばしい匂い。たれは ギャムジャン か」

「ええ。 ギャムジャン をベースにした甘辛味です」

ギャムジャン というのは大豆を発酵させて作る液状の調味料のことである。塩気だけでなくコクを感じさせる濃厚なうまみが特徴であり、それをベースに甘いたれや辛いたれなど、多彩なたれを作る事が出来る。

この ギャムジャン を使ったたれ料理は西部地方特有の料理であり、魔界中の酒場ではいつだってこんな冗談が飛び交う。

「そいつが西部出身だってことは目をつぶっていてもわかる。なぜならギャムジャンだれの香りがするからね」

このことからわかるように、 ギャムジャン は西部に住む者にとっては幼少から親しんだ「ソウルフード」なのである。そしてその中でも特に愛されているのがギャムジャンだれの テコテコ、通称「ギャムテコ」である。西部では揚げたてのギャムテコを前にして手を出さずにいられるものなどいない。

ドラゴスもご多分に洩れないようで、早速立ち上がってリイラが持った皿からつまみ食いをしている。

少しもじもじしてから、リイラが言った。

「……マルクさんから、ここで食べるように言われたんです」

「お前こんなに食べんのか」

「ち、違いますっ。ほとんどはドラゴスさんの分ですよ。だ、だから……」

リイラは顔が赤くなった。また熱が出そうだった。

……でも、向き合うつ。

「だから、一緒に食べませんか？」

「何言ってるんだ。俺はもう食べてるぞ」

そういえばドラゴスはさっきからむしゃむしゃとテコテコを食べていたのだった。

「あ、それもそうですね……ふふっ」

リイラは自然と笑い、少し楽になった気がした。

まだあの目は毒だけど、きっと良くなるっ。

ドラゴスの部屋にはベッドの他に小さな机と椅子が一つあるだけだった。ドラゴスはその小さな机をベッドの近くに置き、リイラに皿を置かせた。そして椅子を引き、座らせてくれた。

「さ、食べようぜ」

「はいっ」

リイラはなぜだか幸福を感じていた。きっと毒に耐性が付いたおかげでドラゴスの癒し効果をより強く感じ取ることが出来るようになったからだ、などとリイラ自身は思っていた。彼女が「恋」なんてものを知るのももう少し後のことだった。

「体のほうは大丈夫なのか？」

ドラゴスがここへ来たのもリイラの体調が原因だったので、そう問うのも当然だった。

「はい。あそこまでしてもらいながらこんなにすぐ元気になっちゃうなんて恥ずかしいですけど……」

リイラはそう言い、はにかんだ。しかしそこで気付いたようだった。

「あつ、ごめんなさい！ わざわざ運んでもらったりしたのに私まだお礼言ってますでした。ごめんなさい！ 本当にありがとうございます！」

リイラはしきりに謝罪とお礼を繰り返した。

「いいってそんなのは……」

困惑気味のドラゴスはそれよりも、体調を崩す彼女の心配をするあまり、やたらと体を触ったりしていたのが今になって恥ずかしくなってきた。

……俺、夢中だったからよく覚えてないけど、脈拍調べるとき当たり前のように胸とか触ってたような……

「今日はドラゴスさんに助けてもらってばかりです。ドラゴスさんは知らないでしょうが最初は果物屋さんの時です」

……胸、結構あったかも……持ち上げたとき軽かったな……壊れ

そんな小さい肩……

「ドラゴスさん、リング盗みましたよね？」

「えっ？」

ドラゴスは聞き返した。先ほどからリイラの言葉を全く聞いていなかったのだ。

「あつ、ごめんなさい！ そんなつもりじゃないんですっ！ 交換……でしたよね？ ドラゴスさんが泥棒したみたいな言い方してすみませんっ！」

泣きそうになりながら謝る言葉の断片から、先ほどリイラが話していた内容を推測した。そしてドラゴスは果物屋に用があったの思い出した。

しかし涙目のリイラを目の前にしたら、もうそんなことはどうでもいいように思えた。

「たくさん恩があるのに私……本当にごめんなさい……」

リイラは声も小さくなり、しゅんとして俯いてしまった。

どうも悪いことをしてしまったような気になったドラゴスはリイラの肩を強く掴み、顔を上げさせた。

「そんなことで謝るなって。俺は気にしてないんだしさ」

「は、ほんとですか？」

リイラは涙を滲ませた瞳で、上目のままドラゴスをまっすぐに見つめた。かえってドラゴスの方が狼狽してしまった。

「う、うん、本当だって。そ、それにリングは……盗んだ！ ああそうだ、俺は盗んだんだ！ 適当な捨て台詞を吐きながらね！」

「……ふふっ」

笑顔を取り戻してくれたようだった。

「だから気を落とすなよ。明るくいこうぜっ」

「はいっ」

リイラは心から嬉しそうに笑った。

ドラゴスはそれを見て胸に暖かいものが広がったように感じた。でもなんだかどきまぎしてしまう。

「あれ？ 何の話だっけ」

「えっと、果物屋さんの時の話です。不気味な異世界人っていう噂が広まってるせいで私と初めて接する時、みんな気味悪がって距離を置くんです。それで、親しく接してくれてもみんな大袈裟な演技なんです。果物屋さんの時もそうでした。みんな悪気がある訳じゃないってわかってるので、私は笑顔を絶やさないようにしてたんです。だけど、今思えば少し無理してました」

リイラの表情はドラゴスからもらった笑顔を失わないように保っていたが、話しながら次第に影が射していった。しかし、急に明るくなって言った。

「でも、ドラゴスさんがリンゴを……盗んだ話を聞いて私、自然に笑ったんです。大したことじゃないと思うかもしれませんが、私にとっては大事件なんですっ」

さつきからリイラのまぶしい笑顔を何度も見ていたドラゴスには意外だった。

「私、違う世界にいた時は中学生……って言うてもわからないですよね、えっと……とにかくどこにでもいるような十四歳の地味な女子だったんです。それが、帰り道を一人で歩いていたら突然足元に穴が開いてこの世界の荒野に落ちちゃったんです。そこからは地獄でした。二晩さまよってこの村にたどり着いて生き延びましたが、村の人にとって私は不気味な異世界人でしかなくて、ずっと人として生きることが出来ませんでした」

つらかっただろうに……

不意に、頭をすつとなでてあげたくなった。しかし、そうしているのかという迷いがあった。

「マルクさんが私を拾って親切にしてくれているのには感謝しきれないくらいに感謝しているんですが、それと自然に笑えるようになるのは違うんです。だから、ドラゴスさんの話を聞いて自然に笑った時、私勝手に『救われた』って思っちゃったんです」

自分が特に何かした訳ではないので、ドラゴスには実感が沸かな

かった。

「そういうものかな」

「そういうものですよっ」

リイラの笑顔は暖かった。もしこの笑顔が失われていたのなら、確かに一大事かもしれないと思った。

「それだけじゃありませんよ、私がドラゴスさんに助けられたのは」
「へえ、聞きたいね」

「助けた」話ならだいたい検討はついていたが、にやけつつもドラゴスはあえて聞いた。

「わかつてるくせにつ」

頬を染めたリイラはつまんだテコテコの先でドラゴスを指した。

「さあ知らないね」

ドラゴスはそれを取り上げてしまい、食べた。

「ふふっ、ならお話ししよう」

リイラは芝居がかった口調で続けた。

「実は、わたくし、悪い人たちに襲われそうになったのです。そこでわたくしは『助けてください』というクエストを出しました。すると一人の賞金稼ぎ様が現れ、クエストを受けてくださり、見事にわたくしを助けてくれたのでございます」

そこまで言うとしイイラはわざと滑稽なほど恭しい一礼をしてみせた。自分でやっておきながら少し恥ずかしがっているのが見て取れた。

「素敵な賞金稼ぎだこと」

ドラゴスは他人事のように言ってやった。

「ええ本当に」

リイラが丁寧な手を添えてテコテコを口に差し出してきたので、されるがままにドラゴスは食べた。

するとリイラは急に真面目な顔つきになって言った。

「いつかきつと報酬を払うつもりです」

「だからいらないって」

「いえ、きつちりお礼がしたいんです。でも財産なんてこれっぽちもないから、私……体で払いますっ！」

「えっ？」

ドラゴスは驚いてしまった。リイラの方はというと急に顔を赤く染めて慌てだした。

「あつ、いや、そういう意味じゃなくて、私にはこの身一つしかないんで、ドラゴスさんの頼みなら何でも一生懸命に働いてみせますってことですっ！ ドラゴスさんはその権利を受け取ってください」「大したことはしてないんだけどなあ」

「いいから受け取ってくださいっ」

リイラがあまりにも熱心なので、つい押されてしまう。

「わかったわかった。その権利、もらっておくよ」

「はいっ」

ドラゴスはリイラの口へ強引にテコテコを数本押しつけてやったが、彼女は何とも嬉しそうにそれをほおばった。

リイラは目を細めながらもぐもぐと食べると、一番言いたかったことを言うことにした。

「ドラゴスさんに助けてもらったのはそれだけじゃありませんよ？」

ドラゴスがリイラのテコテコを奪って食べたことをきっかけに、互いの手で食べさせるといふ妙な流れが出来ていた。リイラは自分が差し出したテコテコをドラゴスが食べるのがなぜだか気持ちいいので、どんどんと供給している。ドラゴスはそれをむしゃむしゃと食べながら言った。

「ここまでリイラを運んできたこと？」

「もちろんそれです。これで三つ目のドラゴスさんの救いですね。でも実はもう一つあるんです」

「なんかあったっけ？」

ドラゴスはリイラの口にもテコテコを差し出した。リイラは不思議とそのテコテコだけが特別美味しいような気がして、つい目尻が下がる。

「私が噂の 異世界人のリイラ だつてわかるとみんな私のことを『人じゃない何か』として扱うんです。反応はそれぞれ違うけど、根っこにあるのは同じでした」

リイラは笑顔を崩さなかったが、それでも暗い言い方になってしまったと感じた。ここからははっきり言わなくてはと思った。

「でもドラゴスさんはまるつきり違いました。ドラゴスさんは手を握ってくれたんですっ！ 額を付けてくれたんですっ！ 対等な人として、自分が寒いなら私も寒いんじゃないかって心配してくれたんですっ！ 暖かかった。嬉しかった。幸せでしたっ！」

興奮気味で頬は真っ赤に染まっていたが、リイラはドラゴスの目をしっかりと見据え、そのまま向き合い続けた。

「そうやってドラゴスさんは何度も私を救ってくれたんです」

リイラには目の前のドラゴスが輝いて見えた。何度も救ってくれた希望だった。そしてドラゴスをしっかりと見つめ、かみしめるようにして告げた。

「世界で一番、感謝しています」

言葉の重みにドラゴスは少し驚いたようだが、すぐに真剣な眼差しでリイラを見つめ返した。リイラの気持ちが届いたようだった。

そこでドラゴスは思いつめた様子で、口を開いた。

「実は俺も…… 異世界から来たんだ」

「えっ！ そうなんですか！？ どこの国の人ですか？ 私と同じ日本ですか？」

リイラの心に更なる光が射した。もしかしたら帰れるかもしれない。一緒に、帰れるかもしれない。

そう思つて熱心に詰め寄るリイラの顔があまりに近く、ドラゴスは照れたようだった。それに気が付いたリイラも照れてしまい、二人は顔を背けた。

「お、俺が異世界から来たのは赤ん坊の時だから、リイラの言う『日本』っていう国も知らない…… 俺は赤ん坊の時に 断絶の谷の向こう側の世界から落とされた…… それで運良く助かってこちら側

の世界で育ったんだ」

ドラゴスはところどころ詰まりながら語った。しかしその情報はリイラが期待したのとは違った。ドラゴスの言う「異世界」はこの世界にある別の場所というだけなのだ。

「そう……ですか」

リイラは隠したつもりだったが、少し残念そうな表情になっていた。

「でもいつかは、谷の向こうの世界に行ってみたいと思ってる。今はまだ行く方法もわからないけど、賞金稼ぎとして旅をして、絶対に行き方を見つuckerんだ。だから安心しな、俺がリイラを故郷に帰してやるよ」

ドラゴスはテコテコをリイラへ差し出した。だがリイラはそれを受け取ることが出来なかった。

「それは無理だと思います」

やはりちゃんと言うべきだと思った。意識せず声が冷たくなっていた。

「お前……帰りたくないのか？」

ドラゴスは怪訝そうな顔をして、持っていたテコテコを置いた。

「そう言う訳じゃ……」

「なら俺が帰して」

「違うんですよ」

抑えても、その声には絶望が滲み出てしまった。

「違うんです、谷の向こうやこっちの世界と、私がいた世界は。繋がってもないんですよ。全く別のものなんです。ドラゴスさんがこの世界を旅しても、私のほうの問題はどうにもならないんですよ。声が消え入りそうになるが、何とか言い切った。だがそれでもドラゴスに諦める様子はない。

「いや何とかするって！ 帰りたいんだろ？ 絶対にお前を帰してやるさ！」

「あなたには関係ないんです！」

リイラは強く言い放った。

手を差し伸べてくれるのが嬉しくて、つい甘えてしまいたくなる。しかし、もう救われすぎている。これ以上はただの負担としてドラゴスにのしかかる。しかも冒険して何の義理もない他人を異世界へ帰すだなんて何年かかるかもわからない。彼の人生をそんなことに使わせてしまう訳にはいかない。今は嘘でも睨んで、突き放すしかない。リイラはそう考えていた。

……でも本当はすがりたい。助けて欲しい。

リイラの目からは大粒の涙がぼろりぽろりとこぼれ落ちるが、それでも必死にきつい目を向け続けた。

「……ドラゴスさんは無関係なんです。だから、ドラゴスさんがそこまでする理由ありません。ドラゴスさんは自分のために、谷の向こうの世界を目指してください。私は、この世界では誰とも無関係な私は、自分だけで何とかするしかないんです……」

リイラは顔を伏せ、涙を懸命に抑えようとした。

ドラゴスも少し怒ったような口調になっていた。

「一人で旅にでも出て帰り方を見つけるつもりかよ」

「……はい、それしか……」

リイラは俯いたまま、拳を固く握りしめた。何とかして自分を保とうとした。

「噂通りだと魔力もないんだろ？」

「でも戦う以外のクエストもあるはずです！」

顔を上げ強い口調で言い、ドラゴスを睨み付けた。だがその声は綻んでいた。ドラゴスもリイラと同じく強い目を返して言った。

「そんなんで本当に帰れると思ってるのか？ 甘すぎるよ。その程度の報酬じゃ情報を集めて旅を続ける資金どころか、日々の生活すらままならないだろうね」

リイラの目から、また涙が落ち始めた。頭がくらくらして、平衡感覚も失いそうだった。しほり出す声は細く、震えていた。

「……やっぱり無理ですよ、馬鹿ですよ私。もう二度と帰れな

いんだから、諦めるべきですよね……

……でも、それを認めちゃったら……こんなつらい毎日を無理して生きる意味なんかない気がして……きつといつか帰れるって自分に言い聞かせないと……もう私……死にたくて死にたくて……だめなんです……」

リイラが今まで保っていたものが崩れた。気付けば声にならない乾いた声で泣いていた。胸の中で膨む絶望に心が潰されていく。

死にたい。

異世界に飛ばされてから何度そう思ったかわからない。

毎日が苦痛でしかなかった。

嫌で嫌で仕方なかった。

何をしてもつらかった。

どうして自分だけがこんな目に会っただろうかと、見えない誰かを恨んだ。

夜はいつも泣いた。

朝が来ると憂鬱だった。

幸せそうに笑う人をずるいと思った。

笑顔を作るほど虚しくなった。

人の目が怖かった。

逃げ道なんかないのに、常に逃げたかった。

そんな感情を全部ひっくりくるめた思いが　死にたい。

でもいつか帰れると言い聞かせ、必死に隠していた。死にたいと思っていたのに、思っていないことにした。

なのに今現実を見れば、心は「死にたい」と願う。それだけを願う。

「……もう、死にたいよ……」

純粹な思いが、口からこぼれた。

「クエストって何のためにあると思う？」

しかしドラゴスは落ち着いていた。

「何か問題があった時、それをわざわざクエストになんかしなくて

も、本来はその問題に関係する人が直接解決すれば済んでしまう。でもそう上手くはいかないから、依頼人は願いをクエストという形にして、無関係な人の力を借りる。つまりクエストっていうのは無関係な人と人とを繋ぐものなんだ。

リイラ。俺とお前は出会ったときからクエストで結ばれている。だから覚えとけ。たとえ無関係な世界に来てしまっても、俺とはもう、無関係なんかじゃない」

再び胸に灯った小さな火が、「死にたい」という冷たい思いを勢いよく溶かし始める。溶けたそれは暖かい涙となって、リイラの中から次から次へと溢れた。とめどなく溢れた。

「リイラ、帰りたいか？」

「……」

返事が出来ない。

「帰りたいか？」

「……」

ただ涙を流すことしか出来ない。ドラゴスの声が次第に強くなる。

「帰りたいか」

何とか絞りだして、声のようなものを出す。

「……りたい……」

ドラゴスの怒号のような問いかけがリイラの胸に響く。

「帰りたいか！」

胸の奥にある願いが、いくつもの膜を突き破って昇ってくる。また一つ、また一つと突き破る。そして喉元で最後の膜を突き破る！

「帰りたいです！」

願いは涙声の絶叫となって響いた。

「私を！ 元の世界に帰してください！ 帰りたいんです！ お願いします！」

必死に泣き叫んだ。無様かもしれない。惨めかもしれない。それでもありったけの願いを叫びに変え、吐き出した。届かないかもしれ

れない。それでも手を伸ばした。

ドラゴスも大きく息を吸うと、ありったけの声で応えた。

「そのクエスト！ 乗ったあああ！」

そしてリイラの手を強く強く握る。

ここに一つの物語が、始まった。

第一章 出会い 2（後書き）

ドラゴスクエスト 第一章 完
第二章へ続く……

第二章 旅立ち 1（前書き）

ヒロインの名前を「リイラ」、主人公の姉の名前を「ベラ」に変えました。

第二章 旅立ち 1

第二章 旅立ち

1

「 剛剣のトルガ なんて自分で名乗るのは恥ずかしいが、やつぱり通り名っていうのは重要だな。話が早い」

「 覚えてもらいやすいし思い出してももらいやすいってことか」

「 ああ。あと噂話も案外重要だ。噂になりやすい通り名なら名も知れて、賞金稼ぎとしての信用も保証されるようになる。なにも人として立派であることを証明する必要はない。クエストの遂行を誤魔化したりしない賞金稼ぎであることを証明出来ればいいんだ」

「 そんなこと 」

「 そんなことが意外と難しいんだよ。新参者は特にね。俺は 剛剣のトルガ なんて通り名を付けられたくらいだから噂でも結構強いと評判らしい。そのおかげで初めて行く店でも戦闘系クエストならすぐに紹介してくれるよ」

「 なるほどなあ 」

「 お前も早く村を出ろよ、 竜の目のドラゴス 」

あれから三年が経った。

ドラゴスもトルガも今年で十八になる。

トルガは家族と死別したためにしばらくは村のあちこちで仕事をもらって生活していたが、やがて村を出て賞金稼ぎになった。一年ほど前のことだった。

この村から北東に進むと ザッザル という都市があり、それが最も近い都会だった。そういう都会でないとクエスト依頼は得られ

ないので、トルガはそこでクエストをこなし、賞金を稼いでいた。しかし近いといっても着くまでに数週間にかかる。おまけに険しい山々を越えなければならぬ。

トルガはそれでもこの一年で既に二回帰ってきていてこれで三度目になる。トルガが帰ってくる度に話してくれる賞金稼ぎとしての体験談が、ドラゴスには何よりも楽しみだった。

トルガの見た目は三年前と違っている。さらに背が伸び、筋肉も付き、大男と呼ばれるほどの体躯をしていた。

剣の腕や魔力の使い方も体に比例して成長しており、まさに 剛剣のトルガ の通り名にふさわしい強さであった。

対するドラゴスも成長していた。身長こそ平均よりやや高い程度だが、引き締まった体にはしなやかな筋肉が付き、何よりその精悍な顔付きに成長を見て取れる。もちろん 竜の目 と呼ばれるその目は健在で、いつそう強い光をたたえるようになっていた。

二人は今、久々に剣を交えようとしていた。

過去二回トルガが帰ってきた時は、勝負をしなかった。したがってほぼ一年ぶりとなる。

長剣を構えるトルガの姿は、ドラゴスには以前と変わりないように見えた。

だがドラゴスは変わっていた。ドラゴスはこの一年、体より魔力を重点的に鍛えたので、その効果はかなり出ていた。

纏う魔力の質が上がっているのだ。ドラゴスが戦闘態勢にはいると、全身を覆う高密度の魔力がうつすらとオーラのように見え始めた。これにはトルガも驚いたようだった。これがドラゴスが身につけた、今までよりも一段階上の魔力なのだ。

ドラゴスは試したことがあるのだが、この状態の魔力はリイラでもぼんやりと見える。だからトルガが魔力で視力を強化していなくても見えたのだ。仮にもし警戒して視力強化を行っていたとしても、ドラゴスの纏う魔力の鮮明さに驚くだろう。

そして昔は棒きれだったのが、今は短剣になっている。これは蔵に何本もあつた短剣だ。

実は三年前に果物屋で金属製の筒と交換してもらうために持っていた剣、そのものである。

三年前にリイラを助けて宿屋に泊まった日の翌日、ドラゴスは果物屋へ行つたのだ。すると金属製の筒はやはりガラクタでしかないためにすぐ返してもらえた。一方ドラゴスも短剣を果物屋に受け取ってもらつてあくまで「交換」とするため、その実用性を説き、短剣を抜いて見せたところ、なんと刃がなかった。刀身があるだけである。短剣は武器ではなく、ただの工芸品だったのだ。

ドラゴスが道理でいいデザインな訳だ、と感心していると、果物屋に「結局ガラクタじゃねえか！」と怒られ、追い返されてしまった。

仕方なく金属製の筒とともに短剣を持ち帰り、蔵に戻しておくことにした。

すると帰り道にリイラと出会い、「その短剣似合ってますね。あの時ドラゴスさんがこの短剣を携えて現れた時、私『かつこいい！』って思っちゃいました」などと言われてしまったので、ドラゴスはそのまま短剣を持ち続けるようになったのだった。

その短剣は工芸品であるため、もちろん戦闘には適さない。サーベルタイプの刀身は細く、恐らく鋼ではなくただの真鍮しんちゅうだろう。

だが握りやすい。ドラゴスにはそれで十分だった。むしろ立派な棒きれという感覚で使えた。そしてあまり長くないのも良かった。ドラゴスは魔力を纏い操るが、体から距離があると上手く魔力を操れない。つまり、長剣だと先端までちゃんと硬質な魔力を覆うことが出来ないのだ。

その点、この短剣は先端まできちんと魔力で覆うことが出来る。しかもそれは今や鋼より遥かに硬い魔力なので、刃がないことや刀身の材質は問題ではないのだ。

覆う魔力がより硬くなつたのは、成長したドラゴスの魔力が強く

なっただこともあるが、イメージしやすくなっただということもある。棒きれを覆う鋼の剣をイメージするより、剣にそれをイメージする方が楽なのだ。たとえば、ドラゴスは手刀に魔力で刃を付けることは出来るが、手の先に見えない刀身を付けたりすることは出来ない。体から離れているうえに、イメージしにくいからだ。密度の薄い軟らかい剣なら可能だが、そんなのは戦闘には使えない。

このように体に近いこととイメージしやすいことの二つの条件を満たしているため、この短剣は非常に強力な武器となった。

だがこの剣が相当な強さを持っていることはトルガも三年前から知っている。だから警戒しているはずだ。今までこの短剣で何度もトルガの剣を折ってやったのだ。迂闊に出て今や商売道具である立派な長剣を折る訳にもいかないだろう。

ドラゴスは様子を見ていた。が、ここはあえて何もしないことに決めた。この可視化された魔力の防御力を試してみたかったのだ。

当然村の悪ガキでも試してはいる。その結果は 竜人のリムが繰り出す炎も寄せ付けないし、おしゃべりロツカの俊足を活かしたどの技でも触れさせないという素晴らしいものであった。しかし、彼らの攻撃など以前から効かなかった。ドラゴスはそれよりもっと強い、トルガの鍛え上げられた筋力と魔力で繰り出される一撃で試したかった。ドラゴスはそのため、この防御の技が完成するまであえてトルガとの対戦は避けていたのだ。

ドラゴスは心を静め、技が正常に働くこと祈った。

トルガは剣を折られたくないだろうから、こちらが剣で受ける余裕のないような攻撃を仕掛けるだろう。すなわち、体がけて一閃である。かつての防御法でも一度だって破れなかったのだから、全力でやってくれるはずだ。

両者は睨み合ったままだった。トルガはやはり相当に警戒しているのだ。なのでドラゴスはあえて全身に力を入れた。あまり脱力しているとかえって隙がなくなるからだ。力んでいればきっとトルガは隙を見出してくれる。ドラゴスはそう踏んだ。

すると閃光の如き一撃がドラゴスを襲った。凄まじい速度だった。ドラゴスがそれを頭で理解した時には、既に攻撃を食らっていた。

ギンッ！

気づけばそんな音が響き、トルガの長剣は折れて宙に飛んだ。折れた刀身が地面に突き刺さり、ザクッ、と音を立てるまで、トルガは茫然としていた。ドラゴスはその一連の流れを悠然と見ているだけだった。

「新技、絶対防御だ。イメージを込めてあるがまだ何も変化させていない超高密度の魔力を予め纏うことで、敵の攻撃が触れると自動的に硬くなるようにしてある。まあ、そう作動するようになるまでは一年以上かかったけどね」

「お前……それ早く言えよ……」

トルガはがつくりと肩を落とした。

「この剣、結構いいやつなんだぞ……高いんだぞ……これを手に入るためにいくつのクエストをやったと思ってるんだ……」

トルガは悲しみに暮れている。

「ああ、そりゃ悪かったな……それより俺の新技の感想を……」

「新技か……ああ。自動的に防御だなんて、そんなのありかよ……」

「いや大変だったんだよあれ習得すんの。この一年、クエスト団の連中に俺を見つけたら不意打ちするように言い付けてたけど、やっと最近習得したんだ」

「無茶苦茶な……」

ドラゴスも自分でも無茶苦茶だとは思うが、とうとうトルガの剣すら自動的に防げるようになったのでやった甲斐はあったと思った。

「そんなことより俺の剣どうしてくれんだよ。商売道具だぞ？」

悲しみが収まりつつあるトルガは次第に怒り始めている。

「仕方ない、この最強の短剣を」

「いらねえよ！ 刃もないおもちゃだろそれ！」

「わかったわかった、あとでうちにあるやつあげるからさ」

「まともなやつあんのかよ」

トルガは不満そうだった。

「なんだその顔は！　　うちは確かにしょぼい道具屋だけど立派な剣だつて何本もあるわ！」

「はいはい、じゃあそれで我慢するよ」

「おすすめはだな、黒い鞘の細身の短剣で」

「だからそれおもちゃだろ！」

「でも何本もあるんだぜ？」

「数の問題じゃねえよ！」

トルガは深くため息をついた。

「ああ？　もっぺん言ってみな！」

ドラゴスの姉ベラは、今年で二十三の今が最も旬の美人とは思えない剣幕で怒鳴った。

「だからろくな剣がないんだって」

ドラゴスは用事があると言ったので、トルガは一人で道具屋へ行き、ベラに事情を説明した。

するとベラは豪胆にも好きなものを持ってけと言ったが、「ろくな剣がない」というのが剣の類を一通り見てトルガの出した結論だった。

「うちの商品にケチ付けるたあどういう見だ！　そんな風に育てた覚えはないぞ！」

「あんたがいつ俺を育てたんだよ！」

「知ってるんだから、年頃の男の子はみんな私のお世話に」

「あーあー！　はいはいごめんなさいごめんなさい。どれも素敵な剣ですね」

「顔が全然嬉しそうじゃない」

ベラは不満げにトルガを睨むがそれすら色気を含む。

トルガはため息をついてから言った。

「最後に剣仕入れたのいつだよ」

「うーん、覚えてないね」

「最後に剣の手入れしたのは」

「さあ、記憶にないね」

これには呆れた。

「そんなんだから状態の悪い剣しかないんだよ」

「……確かに」

ベラは納得したようで、トルガは彼女の説教の回避に成功した。

トルガは今までにベラの理不尽な説教を何度聞かされたかわからない。しかも大抵最後はベラの炎の魔力を駆使した体罰で締める。混血とはいえ竜人族の血が濃いベラの炎は強力で、食らった方はたまったもんじゃない。

しかし村を出て一年になるトルガには、それすらもちよっぴり懐かしい気がしないでもない。

「だけど磨けばいい剣だってあるかもしれないよ。それに剣以外の武器でも使えるのが絶対あるって」

トルガは懐疑的だったが、とりあえず頼んでみた。

「いいのがあるんだったら見てみたいし、持ってきてくれよ」

「任せな！」

ベラは自信満々に奥へ行くと、丸くて取っ手の付いた金属製のものを持ってきた。

「この盾なんか似合うと思うぞ」

「なるほど、盾にしてはずいぶん軽いな……ってこれお鍋のふたじやねえか！」

「……ばれた？」

「そりゃばれるだろ！それに『似合う』ってなんだよ！」

「いやあ、なぜだか出しておいた方がいい気がしてね。でも次そはちゃんとしたの持ってくるさ」

ベラは再び奥へ行くと、今度は長い獲物を持ってきた。

「背の高いトルガならこの長槍を使いこなせるのではなかるうか」

「ほう、長いな。槍先は付いてないがこの重量感……物干し竿っ！
ふざけんな！ 何が『なかるうか』だ、本当は生活雑貨売りつけ
ただけだろ！」

「……ばれた？」

「当たり前だ！ もはや武器ですらないんだし……とりあえずこの
長剣もらって行くよ」

トルガは折れてしまった剣とほぼ同じ大きさの剣を手を取った。

「あいよ。ツケとく」

「タダじゃないのかよ！」

「はは、冗談だつて。それじゃ弟をよろしく頼むよ」

「まったく、あんたが言うのと冗談に聞こえねえよ。じゃ、またいつ
か」

トルガは店を後にした。

ベラが店番をしていたのは偶然ではない。道具屋の店主は今、彼
女なのだ。

ダグルは二年前のある日、瀕死の状態で帰ってきた。断絶の谷
へ行っていたのだった。ダグルは外傷がある訳でもなく、それが
結界によるものだというのは明白だった。

ダグルは帰ってくるなり倒れ込んだ。幸いにもベラとドラゴスが
在宅していたため、すぐに介抱することが出来た。だがしばらくは
意識が戻らなかった。

数日の後に、ダグルは意識を取り戻した。そして元氣のない声で
やはり結界のせいであることを説明した。それからドラゴスがいつ
か谷の向こう側へ行きたくなって、結界があるうちは谷を通らず
に行くように言った。ドラゴスはそんな話は後でいいと言ったが、
ダグルは強いて話そうとしたのだった。

その後ダグルはあまり元氣にはならなかった。特別体調を崩すよ
うなことはなかったが、日を追うごとに衰弱していった。

ダグルはベッドから出て歩くことだつて少しなら出来たし、しゃ

べることも出来た。だがドラゴスには巨体だったはずの父が次第に小さく見え始めたことが、悲しかった。

結局ふた月の間徐々に弱り続けたダグルはそのまま静かに息を引き取った。なんの悲劇も苦しみもなく、ダグルは消えてゆくように死んだのだ。

不思議だ。変だ。落ち着かない。

ドラゴスはそんな心境だった。悲しみとは違う感覚だった。

ドラゴスがそれを「喪失感」だと知るのは、もっと多くのものを失い、そして奪ってからだった。

ダグルがいなくなると、ベラが道具屋を継いだ。ただ、ダグルのように谷で品物を拾って高値で売るなどということは出来ないので、従来のようにのんびりと店を構えることは出来なくなった。

なのでベラは村と西部の主要都市を行ったり来たりの半分行商に近いやり方を始めた。

元来活発で口も体も（気も）めっばう強いせいもあり、かなり稼いでいた。行商はベラの性に合ったやり方だったのだ。しかし、一年の半分くらいは村を出ているので、その間はドラゴスが店番をしなければならなかった。

ベラはそこを気にしていた。ダグルが懸念していたように、やはり家がドラゴスを縛り付けているのだ。

ドラゴス本人は不満など一度も口にすることは無い。気に病む様子もない。だがドラゴスが冒険に出たがっているのは誰が見ても明白だった。トルガが賞金稼ぎとなつてからはそれがより顕著となつていた。

ドラゴスはトルガと別れた後、あるものを買に行っていた。実は少し離れた地域である「リーゼ」という町のガキ大将に喧嘩を売

られていたのだ。

もし近隣の地域の者なら、ドラゴスに喧嘩を売るなどというのはありえない。それが自殺行為だというのが、ドラゴスが十代前半だった頃から知れている。ましてや今年で十八のドラゴスに挑むなど、誰もが想像すらしない。

だが不幸にも喧嘩を売ってきたガキ大将の町にはドラゴスの評判もあまり届かなかったのだろう。そんな長距離を行き来するのは大抵大人であるからそれは仕方ない。不幸なガキ大将は「ドラゴスという悪ガキが強い」程度の曖昧な情報に条件反射のように喧嘩を売ってしまったのだ。

とはいえ、やはり少し離れた地域ゆえ、日時を指定して決闘を申し込まれた訳でもない。ただ言づてで挑発されただけなのだ。

ガキ大将には、さらに不幸な点があった。昔ならそんな曖昧な喧嘩の売り方ではドラゴスは見向きもしなかっただろう。何より行くのが面倒だ。

ところが今のドラゴスは違う。三年前に自分の移動能力に限界を感じ、なおかつ可能性も感じたドラゴスは、あの一歩ずつ飛びながら走る移動法を極めつつあった。

つまり、ドラゴスの喧嘩の買い付け範囲は格段に広がっていた。

それに加え、まださらにガキ大将に不幸な点があった。

今はベラが帰ってきているのだ。つまり、店番をする必要がなく、ドラゴスは基本的にすることがない。暇なのだ。そんな暇つぶしを探している時期に届いた挑発だったので、ドラゴスは嬉々として食いついた。

そのガキ大将のいるリーゼという町までの道は普通の大人が三日かかる道だが、ドラゴスが本気を出せば一時間で走れる。いやむしろ速度が上がってくると「飛ぶ」と言った方が適切な様相となる。少しばかり手を抜きながら、ドラゴスは一時間半でリーゼに到着した。

ぶらぶら歩いていると、早速現地の悪ガキ二人に見つかった。だ

が向こうはドラゴスのことなど知らず、ただ絡んできただけだった。

「す、すみませんでした……」

詳細を書くまでもなく不良少年どもはこてんぱんにやられた。

「で、こちらのガキ大将のベルベルだかゼルゼルだかそんな感じの奴はどこだよ」

ドラゴスは悪ガキたちに案内をさせた。

連れてこられた場所は、郊外の廃屋だった。平屋で大きな屋敷だが、穴だらけでボロボロだ。

「いかにも不良の溜まり場って感じだな。ここにいんのか？」

悪ガキは無言で頷く。心なしか余裕が見え始めている。ゲルゲルとやらはそんなに強いのだろうか。ドラゴスは少し期待した。

大きな声を出して呼ぶのも面倒なので、ドラゴスはちょっと新技を試してみることにした。

拳に鋼鉄の魔力を纏いつつ、それを瞬時に膨張させる。魔力の膨張速度は今や爆発に近く、ドラゴス自身も爆発をイメージしている。その技は今まで岩だとか樹木だとかに對してしか使ったことがない。好きに壊していい建物などそうそう巡り会えないのだ。したがってボロボロとはいえ、建物に對してどれくらいの威力を発揮するのかを知る滅多にない機会だった。

玄関前に立ったまま呼ぶことも入ることもせず、拳にぐつと力を込めるドラゴスを見て悪ガキの一人は訝しがり、一人はまた殴られるのかと思い、身をすくめた。

ドラゴスは大きく振りかぶったところで一瞬、躊躇した。

……いや、ほどほどにしたい方がいいかな？ ま、いつか。

吹き飛べ！

扉に拳が触れる直前に爆発を作動させると、轟音とともに廃屋の左半分が吹き飛んだ。岩をも砕く技を廃屋に使ったのだから当然の

結果であつた。しかしドラゴスは全て吹き飛ばすつもりだったのでやや不満だつた。

まだ制御が難しいな……

屋根や壁が吹き飛んだ左側には十数人が呆然と立っていた。残された右側にも奥に何人が固まっているのが見えた。その中心にはソファーに腰掛け偉そうにしている男がいた。

彼はドラゴスをギロリと睨んだが、それでも余裕を見せ、座ったまま出てこようとしなない。取り巻きはドラゴスの方へ急いで接近してきた。

ドラゴスは面倒なので、もう一度新技を試すことにした。今度は炎の技だ。

ドラゴスの魔力は体から離れると制御できなくなる。たとえ高密度の魔力でも拡散してしまうのだ。だから炎を扱うのが得意なドラゴスでも、遠距離では炎の攻撃も拡散して威力が弱まる。しかし、それが利点となる場合もある。

ドラゴスの手の中には青白く光る、豆粒ほどの球があつた。それをドラゴスが投げると、みるみるうちに真っ赤に燃え盛る大きな炎となつた。

焼き尽くせ！

拡散した炎は瞬く間に廃屋の全域に火をつけた。遠距離では攻撃力はないが、自然に拡散するため広範囲に攻撃できるのだ。

余裕ぶつていたら突然放火されてしまったので、たむろしていたいた悪ガキたちとともにガキ大将と見られる男も咳き込みながら燃える廃屋を出る。

「お前がデルデルか！」

「『ベルゼル』だ！」

男はなかなか体格が良く、少し強そうだつた。そしてよく見ると二十代後半に見えた。

「お前、いい年してまだガキ大将なんかやってんのかよ」

「うるせえ！ お前だってそこそこ年いつてるだろうが！」

「俺は十代だからぎりぎり大丈夫だ」

「俺だつてまだ二十一だ！」

「なんだ、見た目より若いじゃないか。老け顔だな」

「ああん？　ぶつ殺してやる！」

ベルゼルがそう叫ぶと、ドラゴスに近い連中から次々と殴りかかってきた。しかし、皆ドラゴスに触れられない。軟らかい何かにふわりと拳が止められてしまう。

「おい、何をやってる！　早く叩きのめしてやれ！」

真っ先にかかってきた連中が何も出来ないでいるのでベルゼルが怒鳴った。

「なんだ、　ふわふわ防御　も破れないのか。じゃあこれはもつと無理だな」

絶対防御！

今度はドラゴスを殴った者が次々と拳を押さえ悶絶している。ふわりとしていて強く殴ってもなかなか触れないので、皆全力で殴り始めていたが、それが急に鋼の硬度になったのだ。拳の方が砕かれる。

さすがにもう目に見えるオーラがドラゴスを覆っているので警戒し、彼らは距離を置いて様子を見始めた。時折剣で斬りかかってくる者もいるが、ただ剣が折れるだけだった。

「もういい！」

痺れを切らしたベルゼルが直接出てきた。

「おつ、やるのかビルビル」

「だから『ベルゼル』だ！」

ベルゼルは取り巻きに持つてこさせた大きな剣を、ぶんと振り回してから地面に突き立てた。

様子からすると剣での戦いが得意なようだ。よくいる「混血」ではなく、「雑種」なのだろう。

「ふん！　どんな魔力を使ってるのかわからないが、どうやら守るしか能がないようだな。腰に下げてるちゃっちい剣を抜いてみな。」

俺が相手してやる」

「その必要はないね。これじゃ上手く手加減できないんだよ」

「けっ！ ふざけた野郎だ。そんなら遠慮なくぶった斬ってやらあ」

ベルゼルのドラゴスとの距離を詰め、一気に斬り下ろしたが、ドラゴスは軽やかにかわし、距離をとった。

……遅いな。でもなかなかのパワーだ。

地面が大きく割れ、周囲の連中にも「さすが」と声に出す者が何人もいた。

ま、それでもトルガの足元にも及ばないが……

ベルゼルの次の攻撃に対し、ドラゴスは回避をしなかった。ただ左手をかざした。

ぶおん、と音を立てて繰り出されるベルゼルの剣が、ドラゴスの左手の前でふわりと止まった。さらにドラゴスは鋼鉄の魔力で左手ごと剣を固定した。

「あ、あれ？ う、動かん！」

「わりい、やっぱ剣使っわ」

「おい、や、やめろ！」

ドラゴスは抜刀とともに斬り、その流れのまま納刀した。根元から折られた刀身が地面に落ちた。

ベルゼルはほっとした表情を見せたが、すぐさま顔付きを変えてドラゴスの顔面めがけて拳を繰り出した。

「それで勝ったつもりかよ！」

ベルゼルの一撃は正確にドラゴスの顔面を捉えていた。が、しかし、拳はドラゴスの目の前でふわりと止まっていた。

「それで勝ったつもりか？」

ベルゼルの顔が真っ青になったときはもう既に遅かった。ドラゴスの拳がみぞおちを突き上げ、ベルゼルは宙に浮いた。

……やべ、忘れてた。

手加減グローブ！

ドラゴスは拳を軟らかい魔力で覆った。これで思い切り殴っても

殺してしまうことはないはずだ。

「おりゃおりゃおりゃおりゃあ！」

宙に浮いたベルゼルは猛烈なラッシュを食らい続け、未だ地面に足が着かない。

「どりゃあ！」

ドラゴスは最後に渾身の一撃を放った。ベルゼルは大きく飛ばされ、地面にぐしゃりと落ちた。

とはいえ、手加減グローブによってパンチの衝撃はかなり緩和されているので致命傷を与えてはいない。が、最初の一撃はついucciかり手加減なしで殴ってしまったため、ベルゼルは完全に伸びていた。

「まあ死にやしないだろ」

ドラゴスが残った取り巻きたちを見回すと、彼らはベルゼルをほったらかしにして我先にと逃げていった。

その中に一人、腰を抜かして逃げ遅れた少年がいた。短く刈った金髪に大きな碧眼を持つ。他の者より少し幼く、十四、五歳といったところだった。

少年も一人だけ残されてしまったのに気付いたようだった。

「ひええええ！」

ドラゴスが近寄るとますます足が立たなくなった。声も出なくなつて顎を上下させるばかりだ。

「お前、残れ」

ドラゴスがきつい目つきでそう命じると、少年は失神してしまった。

燃え続けた廃屋はすっかり焼けてしまい、真っ黒な炭の集まりとなっていた。風が吹くと灰が舞い、ドラゴスは咳き込んだ。

「知らない村でこれは少しやりすぎたかもしれない」

廃屋に見えたが廃屋とは限らないし、他に誰か所有者がいたらどうしようかなどとドラゴスは思った。

だが今更そんなことを考えてもしょうがないので、今この状況をどうにかしようとした。

ドラゴスの近くにいる者は二人とも眠っている。昏倒しているベルゼルと失神した少年だ。

とりあえず死にそうにも見えるベルゼルが無事が確かめてみることにした。

いでよ水！

ベルゼルの顔にばしゃ、と水を落とした。だが反応はない。

「もう一丁！」

今度はかなり多めに水をぶっかけてみると、ベルゼルは目を覚ました。

「ぶはあ！ 溺れる！」

ベルゼルは地面で手足をばたばた動かし、もがいていた。

「あれ？ 地面だ」

状況を把握してむくりと起き上がった。

「あつ、お前！」

「よつ、無事みたいだな。えつと……たかし！」

「『ベルゼル』だ！ 誰だよ『たかし』って！」

「はい無事です」

いつの間にか少年も目を覚ましていた。

「お前かよ！ 顔は知ってたけど名前は初めて聞いたよ」

「へえ、お前も『たかし』なのか」

「はい」

「『も』じゃねえよ！」

「なんでたかしはたかし2号の下っ端なんかやってんだ？」

「それは……あの……」

少年は俯いて気まずそうにしていた。

「おい当たり前のように『たかし2号』とか呼んでんじゃねえよ」

「うるせえ！」

もう無事が確認出来たので、たかし2号を殴って眠らせた。案外元氣そうなのでそれくらい問題ない。

「あ、あの、弟子にしてください！」

「え？」

少年の顔は真剣だった。

「僕も強くなりたいんです！ だからベルゼルさんたちの仲間に入れてもらって鍛えてもらってたんです」

「そんなこと言われてもなあ」

ドラゴスは困惑した。対照的に少年は目を輝かせている。

「さっきの戦いすごかったです。あんなに強いベルゼルさんを簡単にやつつけちゃうなんて。強いって噂の『ドラゴス』さんですよね？」

「なんだ、知ってるのか。ならわかるだろ。俺はここで『はしむ端村』って言われてる西の外れの村に住んでるんだ。ここから遠いし弟子にするなんて無理だね」

「そ、そんなあ……」

少年はひどく気を落としたようだった。

「お前、年は？」

「今年で十六です」

しかし十六にしては小柄で、年齢よりかなり幼く見える。

「混血か？」

「……いえ、雑種です」

「剣は使えるか？」

「あまり……」

ドラゴスは告げていいものかと悩んだが、やはりここははっきりと言っべきだと思った。

「こう言っちゃ悪いが、諦めた方がいい。特殊な魔力のない雑種で小柄じゃそうそう強くなれない。剣術が天才的であるとか、特別な要素がないと難しい。無理に身を危険にさらす必要はない。平穩に

暮らせ」

ドラゴスが諭すと、反論もせず、少年は悔し涙を流した。きっと少年も半分わかっていたことなのだろう。

根性はあるそうなんだけどな。

ドラゴスもそう思うだけに、少年が強くなれないという現実が悔しかった。

急に救いたくなった。

無力であることの悔しさなんか、最初から強かったドラゴスにはわからない。だがその分、自分の無力さに抗おうとする者を見ると、何としても救いたいと思うのだ。

少年は運命に勝てない。絶対に勝てない。しかしそれでも立ち向かおうとしたのだ。その強さに惹かれたのかもしれない。いや、きっと羨ましいのだろう。自分にはない力を持つものが。ドラゴスは思った。

「わかった。話せ。なんで強くなりたいのか、話せ」

少年は途端に明るい顔になった。

「勘違いするなよ。まずは話を聞くだけだ」

「はいっ！　ありがとうございます！」

すると少年はもじもじし始めた。

「あ、あの……実は、さっき嘘付きました……ごめんなさい！」「ん？」

「僕、『たかし』じゃありません。話に入りたくて、つい……。本当は『チトク』っていう名前です」

「なんだそんなことか」

不意にドラゴスは「たかし」という名前がどんな記憶から引き出された名前なのかを思い出した。

ドラゴスが小さい頃、ある変わった冒険者と出会ったのだ。ラグレー山脈に近いので村にも冒険者というのは常に滞在している。村の中心部には宿屋が何軒も立ち並び、村は宿場の街としても機能しているのだ。

だがその冒険者はよくいる冒険者と違うのだ。普通はラグレー山脈に向かい冒険に出る。尾根の向こうは何もないが、手前には豊かな自然が広がり、冒険者にとっては魅力的であるのだ。しかし、彼の冒険の対象は村だった。彼いわく魔界を旅すること自体が楽しくて仕方ないと言う。しかも「危険だから」という理由で近いのにラグレー山脈には入らなかった。いい年した大人だが、魔物にも全く勝てないらしい。彼は村を探索しながらしばらく滞在し、ドラゴスの家である道具屋で生活雑貨を大量に買うと他の村へ行ってしまうた。

ただの変わった冒険者でしかないし、交わした会話も少ない。だがドラゴスに強い印象を与え、影響も及ぼした。

少年であったドラゴスはその時始めて、旅そのものを目的とするという概念を知ったのだ。魔界では何かのために旅をするというのが普通なだけに、ある意味衝撃的だった。他の村人にとっては奇異な冒険者だったが、ドラゴスには思想家のような位置付けで記憶された。ドラゴスに旅への憧れを植えつけたのだ。

彼の名前が変わっていたのも、大して関わりがないのによく覚えている理由だった。彼の名は「たかし」。聞き慣れない響きだった。ドラゴスが自分の出自を知ってからは、もしかして彼は異世界からの旅人だったのかもしれないとも思うようになっていた。

彼は今頃どうしているのか。ひょっとするとリイラが帰る手がかりが……

そこまで考えてドラゴスは歯痒く思った。リイラにあんな大見得を切っておいて三年も何も出来なかった。事情はあるにせよそれを乗り越えられない自分が憎かった。

やはり出来るなら、この少年の力になろう。自分が少年の「強さ」になろう。ドラゴスは決めた。

「『チトク』か……それにしても『たかし』は変な奴だったな」

「へ？」

「いや、なんでもない。チトク、名前を偽ったことはどうでもいい

から、お前が力を欲しがる理由を話してくれよ」

ドラゴスに促されると、チトクは暗い顔になって話し始めた。

この集落やドラゴスの村を含む西部地方の南の一带は、ジャンベリムという貴族の領地である。領内は小さな村ばかりであるが、かなり広大な土地を持っているのだ。

ジャンベリムはよく出来た人物であった。領民を大事にし、村と村を結ぶ道を馬車で通れるよう整備するなど、何かと地域のことを考えてくれている。ドラゴスの住む村がラグレー山脈へ向かうための宿場町としてやっていけるのも、そこに至る道をジャンベリムが整備してくれているお陰でもある。

だがその反面、家庭を疎かにしていたようだ。広大な領地に点々と散らばる集落を暇さえあれば訪問するため、たまにしか家に帰らないのだ。その結果、彼の一人息子は立派な駄目人間となった。

駄目息子はドスドルマという名で、領民にもよく知れている。それは、ジャンベリムが端正な顔立ちなのにドスドルマがひどく不細工であるからではなく、ドスドルマが領内の村々でしょっちゅう悪さをするからである。今年で三十になるというのに、領民の物を勝手に取ったりすることは日常茶飯事だ。

ドスドルマは顔が悪く魔力も弱く、おまけに品もないので貴族社会の女性には相手にされない。だから立場の弱い領民の女の子にしばしばちょっかいを出す。これが一番厄介なのだ。

ドスドルマだって一応貴族なので、お金を出せば寄ってくる女はたくさんいる。しかし、そんな行動力のあり、タフは女には手を出さない。魔力の弱いことがコンプレックスで、自分より弱そうな、大人しい子、もしくは少し幼い子ばかりを狙うのだ。また、そういう子なら何かされても誰にも言えずにいるため、父親のジャンベリムに報告されてしまうこともない。

とはいえ、ドスドルマの悪行はジャンベリムの耳に入ること多い。だから一応咎めはするものの甘く、それだけでは駄目息子は改心せず、結局被害はなくなるらない。

ドスドルマがあまり長い間領民に悪さを働けば、当然ジャンベリムが大急ぎで駆けつける。したがってドスドルマが一つの集落で好き勝手に出来るのはせいぜい数日である。しかし、女の子を泣かせるには一晩で十分だった。

チトクの姉、テナもドスドルマに目を付けられた一人であったが、連れ去られる時に運良く解放されたという。

だが安心は出来ない。ドスドルマの好みであるのは確実なのだ。理由はわからないが解放されたのも運が良かったただけだろう。チトクはそう語る。

「だから僕、強くなりたいです！ そうすれば姉ちゃんを守れるし、賞金稼ぎになれば都会で暮らすことだって出来るんです！ そう思ってたんですけど、でも、僕じゃ無理なんですよね……」

チトクはがつくりと肩を落としていた。

無理ではないし、俺がお前の姉ちゃんを守ってやる。そうドラゴスも言ってるやうだが、どうすればいいのかわからなかった。

やはりドスドルマを一発シメてやるしかないのだろうか。ドラゴスは思ったが、領主の息子に対してそんなことをしたら余計に事態が悪化する恐れがあった。個人的な恨みをぶつけてそれを領民全てに関わる問題に発展させてしまう訳にはいかない。ドラゴスには解決の糸口が掴めなかった。

「ドスドルマに関しちゃ俺も参ってるぜ」

ベルゼルも沈痛な面持ちで言った。

「いつの間に目を覚ましたんだ、ええと……た……たしか『2号』！」

「『2号』しか残ってねえじゃねえか！ それを言うなら『たかし2号』だろ！ いや俺は『ベルゼル』だが！ あーもうめんどくせえ、何でもいいよ！」

2号はそう言うつと再び真剣な顔付きになった。

「……でな、ここらは領主の城からそう遠くもないし、ドスドルマの野郎に彼女を傷つけられたって奴も多いわけよ。ここ最近は特にひどい。でもぶん殴る訳にもいかないのは俺だってわかってるが、部下が悩んでるからには何とか助けてやりてえと思ってるのさ」

2号はやれやれといった風にため息をついた。

「まあ、その部下とやらはお前を置いてみんな逃げたがな」

「なんだって！？　そういえば誰もいない！」

2号はあたりを見回して愕然とし、しばらくうろつろした後に膝を落とし、地面に手をついた。

「なんてこった……俺の人はこんなものだったのか……いい年して何をやっていたんだ俺は……くそっ、俺はもう誰一人信用出来ねえ……」

すっかり落ち込んでしまった2号に、ドラゴスは満面の薄っぺらい笑みを向けた。

「そんなことはないぞ！」

「えっ」

「ここに！　たとえお前が倒れようとも！　たった一人で残り！　必死にお前を守り続けた！　真の仲間がいる！　その名はチトク！」

「えっ、ちょ……」

困惑するチトクに「いいから合わせろ」と耳打ちした。

「お、お前、そんなに俺のことを慕ってくれたのか……」

2号は心突き動かされたようだった。

「当然だろ、お前は強いんだ。チトクも懂れるさ！」

ドラゴスはさりげなく持ちかけた。

「ところでさ、お前もさっきの話聞いてたろ？　お前を守ってくれた最も信頼出来る部下が悩んでるみたいだけど、まさか見捨てるなんてこと、ないよな？」

「はは！　そんなことある訳なかるう！　チトク、この2……べルゼルが！　お前の姉ちゃんを守ってやる！　お前も鍛えてやる！」

安心しな！」

「はいっ！　ありうございます！」

「ま、部下を助けるのは当然さ。礼なんか必要ねえよ」

チトクはドラゴスに礼を言いながら何度も頭を下げた。その横で2号は誇らしげに何やら言っているようだった。

無事チトクと2号の仲を取り持ち、調子に乗って自慢話がくどくなってきた2号が帰っていったのは、もう日が傾いていた頃だった。やはりここらの地域もこの時間帯から急に冷え、肌寒い風が吹いた。強引だが一応は信頼関係を築くことが出来たので、これからは2号がチトクの「強さ」となってくれるだろう。ドラゴスにあっさりやられたとはいえ、2号だって強い。それに、同じ雑種同士なので戦い方を教えてもらえるはずだ。2号は馬鹿で要領も悪いので効率は悪いかもしれないが、面倒見の良さがきつとそれを補ってくれる。チトクの問題に対して、一応の解決策を見出せたことでドラゴスは安心した。しかし、完全な解決ではない。チトクの姉テナの心の傷はなかなか癒えないだろうし、なによりドスドルマの脅威が残り続けている。

2号の話の中に気になる点もあった。最近では端村の噂がよく囁かれるという。そのせいでドラゴスはこちらまで来ることになったのだが、それ以外の人物も噂されてることが気になった。

美人のベラは当然のごとく知られている。そして異世界から来たリイラムもそうだ。

その「異世界から来た」という部分は真相がわからないこととして語られていたが、「魔力がなくて従順。顔も悪くなく胸もそれなりにある」という情報が男たちの中に広まっていると言う。

魔界基準からすれば噂の中の存在でもやはり人気なのはベラである。2号いわく「血が濃くてセクシーなのがそそる」らしい。

だが、リイラに対しても、「血が薄そう感じもたまらない。逆にね、逆に！」と2号は言い、主流ではないにしろニツチな二ーズを確実に刺激するようだ。

ドストルマが好みそうなのは明らかにリイラのほうだ。むしろ、まさにリイラのような子を求めているようにも思える。

ドラゴスは不安になった。端村にドストルマが来たという話は聞いたことがないが、リイラのことを知ったらわざわざやってくるかもしれない。何せリイラは魔力が弱いどころか、全くないのだ。この点に関してはこれほどドストルマの二ーズを満たす人材はいない。自分に守れるのだろうか。そんな不安もある。いくら強くても、少し離れた地域であるというだけで、ドラゴスにはチトクや姉のテナをちゃんと守ることが出来ないのだ。取り巻く状況が変わればリイラだって守れないかもしれない。現にすぐ元の世界へ返してやると言っておきながら、自分の都合が悪いせいで三年もリイラはこの世界にいる。自分の力を発揮すれば、必ずリイラを助けられるという自信はある。しかし、その環境が整わないのである。でもその宿命とも言える状況を自分は変えられない。

くそっ！

ドラゴスは逡巡するばかりであった。

力の問題ではない。そこに足りないのは 決断だった。

2号はもう帰ったが、ドラゴスは夕食に招かれていた。チトクはドラゴスの高速移動も知らないので泊まるところが必要だと思っただらしく、気を利かせたのだ。

もちろんドラゴスは断ってさっさと自宅に帰ることも出来たが、厚意を無碍にしたくないのと姉のテナの傷を癒してやりたいというのがあり、ご馳走になることにした。2号にはそういった類のケアを期待出来ない分、それが自分の義務であるように感じた。

しかしテナとチトクは二人きりで暮らしているらしく、あまり裕福でもないだろうからどれくらい厚意に甘えていいものか計りかねた。あまり負担をかけてしまうようなら幾ばくかの金銭を置いていくことも考えた。

テナは服屋で働き、その店舗の二階に住まわせてもらっているという。店主は別に自宅を持っているので、夜になれば店はテナとチトクしかおらず、まるで一軒家を持っているような気分になるとチトクは語る。

しかし、労働自体に目を向けるとテナはただのお針子でしかなく、職場に住み込みで一日中針仕事をしているのだ。チトクが明るく語るほど楽な生活ではないはずだ。

ドラゴスはやや緊張しながら、服屋に着いた。もうすっかり夜になっていた。

そこはリーゼの中心部で、大通りの末端から少し離れたところっぽつんと二階建ての店が立っていた。一階の一口には看板が掲げられている。外から見る限りではドラゴスの想像よりも立派な建物であった。

「ここです。もう夜なんで僕たちしかいませんし、遠慮せずにどうぞ」

チトクに連れられて中に入ると、中も思っていたより広く、衣類が所狭しと並んでいた。店主ももう帰ったようで、誰もいなかった。奥には階段があり、そこから二階へ行けるようだった。

この様子だと二階も広いだろう。そこに二人で住んでいるとなると住居に関しては案外ゆとりのある暮らしなのかもしれない。ドラゴスは思った。

「こつちです、ドラゴスさん」

やはり階段を登って二階へ行くようで、登りきると扉があった。その奥が居住空間となっているのだろう。

ドラゴスはなるべく心を落ち着けるようにした。ここは下手なことをやってテナの心の傷を刺激するようなことがあってはならない。

だから慎重に振舞わなくてはならないが、かといって壁を作ってもいけない。少しずつでいいから距離を縮め、テナを安心させてやる必要がある。

ドラゴスは唾を飲み込んでいた。やはり緊張してしまっていた。

「ただいまー」

「おかえりっ」

その明るい声は少し幼い感じがして、テナではなさそうだった。チトクの話だとテナは十九である。

中に入ってみると、広い居間の端で縫い物をしていた金髪の少女が一人立ち上がった。年は十四、五に見える。いやもっと幼いかもしれない。やはりテナではないようだ。

そう思っただラゴスが部屋を見回すと、恐らく個室へ通じているであろう扉がいくつかあった。

テナは自室に閉じこもっているのだろうか……

ドラゴスの想像だと薄幸の佳人といった感じの大人しい女性が扉の奥で陰鬱に針仕事をしている。

「姉ちゃん、お客さんだよっ」

だがチトクは明らかに目の前の少女に言っている。

……あ、あれ？

「紹介するね。今日」

「ストップっ！　ちょい待った！　いま当てるから！」

少女はすばやくドラゴスに近寄り、角度を変えながら「うーん」と言っで一瞬懸命に観察した。

「ふむふむ。わかつちやった、わかつちやったよお姉さん。きみ、噂のドラゴスくんだね？」

ドラゴスの胸辺りまでしか背がない少女はほぼ真上を見上げるようにして、その青い目を合わせてきた。

「あ、ああ」

やや狼狽気味に答えると、にっと笑って言った。

「よшきた！　今日はたんとお食べ！」

少女はガッツポーズをした後、居間の隅に戻って縫い物やら何やらを片付け始めた。

チトクのほうを見るとにつこりしているだけで何の説明もない。

「えっと……テナ？」

四つん這いになって道具類を仕舞っている少女は、背を向けたまま顔だけ振り向いて言った。

「そだよー」

な、なんか想像してたのと違う！

「おいしょ、片付け終わりっつと」

立ち上がるとドラゴスに近づき、手を差し出した。

「わたし、テナ。よろしく」

テナは無邪気に笑う。

「お、おう、よろしく」

完全にテナのペースに飲まれているのでドラゴスは握手をしたものの、これからどう振る舞えばいいのか全くわからなかった。

握ったテナの手はとても小さかった。白い腕もほっそりとしていて、肩回りも華奢だ。そもそも体が全体的に小さく、少女にしか見えない。

この少女が年上だと！？

しかし、チトクの実の姉ならばこういった容姿でもおかしくはない。ちびっ子にしか見えないチトクだって十六なのだ。

そうは思うが、この幼さはチトク以上だ。十九にもなつてせいぜい十四、五にしか見えないのだ。声も幼いし、何より顔が幼い。

テナは綺麗な金髪をショートにしている、それが小さな顔をより小さく見せ、大きな碧眼とのバランスとも相まってかなりの童顔なのだ。

「姉ちゃん、今日ドラゴスさんはあのベルゼルさんに勝ったんだよ。それも余裕で！」

「ほほー、やるねきみ。どれどれ」

テナは握手した手を離さないままに引き寄せ、左手の指先でドラ

ゴスの腕の筋肉をすうつとなぞっていった。

「なるほどなるほど」

一体何が「なるほど」なのか全くわからない。テナもわかっていないのかもしれない。

今度はなぞっていた指先をドラゴスの顔に向けた。

「いいねいいね、目も『ズザンツ!』って感じだよ」

テナはまだ握ったままの手を自分の顔に近づけた。仰々しく手にキスでもするのかと思ったら、ぺろつと舐めてから離れた。

訳がわからない!

「ならば今日は肉料理だ!」

どこに決定要因があった!?

「じゃ、すぐ買ってくるね!」

なぜか小躍りしそうなほど上機嫌なチトクが言った。

「お財布持った?」

「持った!」

チトクは小走りで行って行った。

「きみ、いま流行だよー?」

テナは再びドラゴスと向き合うと嬉しそうに笑い、細くて器用そうな指でドラゴスの鼻先をちょこんと触ると左右にぐりぐりと押した。

こ、これと二人つきりだと!?

ドラゴスはかつてないほどの強敵と対峙している気分になっていた。

そこでドラゴスは気付いた。ドスドルマがテナに目を付けたのは「大人しそうだから」ではなく、「幼そうだから」であったのだ。そして解放された理由もよくわかる。

手に負えない!

ドラゴスはどう接すべきかわからずにいた。ドラゴスには目の前にいるテナが幼い少女にしか思えないのに、テナのドラゴスへの接し方が年下の少年を扱うのと同じなのだ。

事実としてはドラゴスが年下なので間違っではないのだが、どうも違和感がある。

「なーんもないこの町じゃ最近では端村が一番の話題だよ。特にきみ有名人。えらいぞー」

「あ、ああ」

テナはまた、にっと無邪気に笑うが、ドラゴスは全くペースが掴めない。

「そんなに緊張しなくてもいいんだよ？」

「えっ？」

テナの言い方は、まるで小さな子を諭すようだった。幼い声なのに妙に大人びている。

「きつとチトクにいろいろ聞かされてると思うけど、それときみは関係ないよ」

関係ない。

ドラゴスの胸の中で、チクリと刺されるものがあつた。

「で、でも」

「ドスドルマは本当に怖かった……だから後ろを振り向けば確かにつらいよ。だけどね、目の前に楽しいことや面白いことがチラツと見えたら、そんなのはもう関係ない。ただ前に走りたいのさ。お姉さんは嬉しくなっちゃうからねっ！」

テナは頭から飛び込んでドラゴスに体当たりした。不意に胸の辺りに頭突きを食らい、ドラゴスはよろめくとともにテナを支えた。

テナもドラゴスの体に腕を回して見上げた。

「だから今夜は……」

吸い込まれそうなほど青い目がドラゴスを捉える。

「宴じゃー！」

勝利者のごとく両腕を突き上げたテナは、居間の一角にある台所へ向かった。そこで夕食の準備に取り掛かったようだった。

鼻歌が次第に大きくなって声になる。

「にーくーにーくーにくにくにーくー」

ドラゴスは終始啞然として見ているしかなかった。しかし、気分はすっきりとしていた。

……あれ？

元気をもらったのはドラゴスのほうだった。

それに気付き、ふう、と息を吐くともう何も気にすることがなくなった。自然と笑みがこぼれた。

「よっしゃ！ 俺は結構食うぞぉー？」

「構うもんかっ！ どっからでもかかってきな！」

挑発的な笑みを向けるテナの顔はやはり幼いが、不思議と姉のベラに通じるものがあつた。

やっぱり年上なんだな……

「はっ！ お姉さん飲んじゃうからねっ！」

「へっ！ ちびっ子のクセに！」

買出しのチトクは帰ってこないし、まだ何も始まってはいない。

でも、気付けば二人してゲラゲラと笑っていた。

そしてしばらく時間が経った。

ジャーギンをぐびぐびと飲んでテナの喉は大きく上下し、首筋に一筋の汗が這う。

「っふう、お姉さんにやこれじゃ足りないよ！ チトク、もっと買ってきた！」

ドラゴスはテナに見えないよう、さりげなくお金を渡し、「いいからこれで」と言つて素面（じふまへ）のチトクをこれで何度目かわからない買出しに行かせた。

食卓に並ぶのは肉料理と テコテコ と肉料理と酒、酒、酒だった。

テナは料理も器用にこなし、とても美味しかった。こつてりとした肉料理ばかりだったが、ベラとは違い多彩な味付けがドラゴスを

飽きさない。テナも料理を褒められるのが嬉しくてもっと作りたがるので、ドラゴスはつい追加をお願いしてしまい、その度にチトクが買出しに走った。

今までリイラの繊細で奥深い味の料理が一番美味しいと思っていたが、テナの元気の出るこつてりとした料理もそれと双璧を成すほどだった。

毎日テナとリイラに飯作ってもらえたらなあ……
つついそんことを思ってしまう。

子供みたいな容姿の割に、テナは大酒飲みだった。飲みながらも追加の料理の手さばきは正確で、ついさっきまで料理を作っては飲んでの繰り返しだった。その結果テナは相当な量を飲んでいる。

テナいわく「普段は飲まないから今日はかなり酔ってる」らしく、さすがにもうだいぶ酔いが回ってきていて、目が据わっている。

料理はほとんどなくなっていたが、ドラゴスは満足していたのでもう作らせなかった。ちょっと危なっかしいというもある。後は酒を飲むつもりだ。

二人が飲んでいるのは ジャーギン といって、麦から作った安価な酒である。微炭酸ですっきりとした味わいだ。

ドラゴスは先ほどまで食べるのが中心で、なおかつドラゴスも酒に強いので、そんなには酔っていないかった。

それとは対照的に酔っ払い始めているテナは、なぜか精神年齢が幼くなっているようだった。酒をあおる姿は相変わらず似合わないが、次第に容姿の中身のギャップが薄れていった。

「でね、そんな人にぐぎゅーってして欲しいの。『ぎゅー』じゃないの、『ぐぎゅー』なの。わかる？」

そう話す姿はまさに思春期の女の子だった。
「うんわかるわかる。だといいね」

適当に返事をしながらも、ドラゴスはこの場を心地よく思っていた。

旨い飯を食い、気の合う人と飲んで淡く酔う。そこに幸福を感じ

ない者はいないのだ。

追加の酒を買ってきたチトクが帰ってきてからはドラゴスも多く飲んだ。

テナが馬鹿を言えば大いに笑い、自慢をすれば髪がぐしゃぐしゃになるほど頭をなでてやった。楽しかった。

チトクも心から楽しんでいるようで、ドラゴスは本当に来て良かったと思った。この姉弟をこれほど笑顔にして、自分も受け止め切れないほどに笑顔をもらったのだ。

ありがとう。

誰に言うでもなく、そんな言葉が漏れる夜だった。

騒がしい夜もいつしか静寂を取り戻していた。

寝ているのか起きているのかわからないが、とりあえず活動停止状態にあるテナを尻目に、ドラゴスとチトクは食器などを片付けていた。

「あ、それ僕やりますよ」

「いいっていいって」

ドラゴスはほろ酔いなのに対し、チトクは素面だった。だがそれでもチトクは上機嫌で、二人の間に温度差が生まれることはなかった。

「姉ちゃんがあんな甘えてるの初めて見ました」

チトクはどこか安心したような言い方だった。

「酔うといつもあんな風になるんじゃないのか？」

「少しくらいはありますが、あんな幼い感じにはなりませんよ。姉ちゃんはいつも必要以上に『お姉さん』のままなんです」

やはり容姿だけはでなく、無理に背伸びしている部分もあるから違和感があったんだろう。ドラゴスは思った。

「僕たちに両親はいなくて、僕が物心ついた時から姉ちゃんはお

姉さん』で、親代わりでした。だから姉ちゃんには少女時代がすっぱり抜けちゃってるんです。僕が強ければそうはならなかったかもしれないが……」

暗い話であるがチトクには嬉しさが勝るようで、微笑んだ。

「やっぱり姉ちゃんも強くて守ってくれる誰かに甘えたかったと思うんです。知らないでしょうが、姉ちゃんは噂の中のドラゴスさんに憧れてたんですよ？ だからドラゴスさんをここに連れてきた時の姉ちゃんの嬉しそうな顔ったら……」。

でも姉ちゃんに染み付いた『お姉さん』が、甘えることさせてくれなくて、酔っ払ってからようやく甘えられるようになったんです、きつと。

だから……今じゃドラゴスさんのことをお兄さんみたいに思ってるはずですよ」

確かに飲み始めた時は姉のような感覚だったが、いつしか妹かなんかと話しているような気になっていた。

テナのほうを見ると一応起きているようで、目をつぶり頭をこくりくりとさせながらも、「……ぶすぶす」と謎の言葉をつぶやいている。

ドラゴスに妹はいないが思った。

仮に妹というものがこういう感じなら……いてほしいな。

一通り片付けると、チトクは奥にあった扉の一つを開けた。

「ここが寝室です。ドラゴスさんは手前の僕のベットの使ってください。僕と姉ちゃんは奥のベッドで寝ます。二人ともちびなんで平気ですから」

「そうか、悪いな」

ドラゴスは素直に従ってベッドを占有させてもらうことにした。

テナはまだ座ったままで、声を掛けても「……焼き猫」という謎の返事があっただけだった。仕方ないので抱きかかえてベッドまで運ぶことにした。

「奥のでいいんだろ？」

「はい、すみません」

ドラゴスは身をかがめ、テナをそつとベッドに下ろした。しかし身を起こそうとすると、テナがしがみついたままだった。

「ほら、寝るんだよ。だから離しな」

小さな声で諭すが、言うことを聞いてくれない。手で引き剥がそうとすると、「……やあだ、やあだ」と駄々をこね、ドラゴスの服をいつそう強く掴んだ。

「ごめんなさい」

チトクが謝りながら駆け寄ってきた。どうにかしてくれるのかと思いいドラゴスはほつとしたが、チトクはテナの寝るベッドを指差した。

「まだお兄さんに甘えたいみたいなので、やっぱりそっちのベッドで寝てください。ごめんなさい」

「ええ!？」

そうしてチトクはそれっきりで、当たり前のように自分のベッドで寝始めた。

しょうがないのでそのままテナの横に寝転んだ。離れようとしてみたら「……だあめ」とぐずり始めた。

これじゃ中身は八歳くらいだろ……

ドラゴスは八歳の妹を抱き寄せ、なだめようと努めた。

とはいえ、体は十九歳の女性だった。テナは女性的な特徴が強く出た体ではないが、触れる感触には色気が余りある。

人を抱き枕かなんかだと思いやがって……

困惑するドラゴスとは裏腹に、テナは安心するのだろうか。ぴつたりと体をつけてくる。

ドラゴスに顔をうずめようとし、首筋からは少し蒸れたテナの匂いがした。ちょうど鎖骨に当たる唇は柔らかく、吐息が熱い。そしてテナの癖なのか、時折少しだけ舐める。

胸なんかほとんどないように見えたのに、押し付けられるそれは弾力がある。腹部が呼吸に合わせて動くのがわかる。足は当然のよ

うにドラゴスに絡めている。内腿のふんわりとした肌触りとその奥にある火が対照的だった。

ドラゴスはどうしたって妙な心地になってしまふ。しかしなんとかしてこの無駄に色気を発する妹を早く寝かしつけようとするため、ゆっくりと頭をなで始めた。するとテナの呼吸が穏やかになっていくだけでなく、ドラゴス自身も落ち着いていった。

妹にはこんな作用があるのか……

ドラゴスは眠ってしまうまで、ずっとテナの頭をなで続けた。

翌朝、テナは声を張り上げてドラゴスを起こした。

「へい起きなっ！ お姉さん朝ご飯たくさん作っちゃったよ！」

ただ、中身は十九歳に戻っていた。といってもやはり、テナは何かがおかしい十九歳であった。

ドラゴスは元気の出る朝食をたらふく食べさせてもらった。ドラゴスが美味しそうに食べるのをとろけそうな笑顔で眺めるテナと目が合つと、どうしても食べ過ぎてしまうのだ。

昨日今日と食費に関してドラゴスは多大な負担をかけてしまった気がしたので、それなりの金額を渡そうとしたが、テナは受け取らなかった。

「きみが食べるのを見たいだけなのさっ」

テナはそう言った。ドラゴスが少し無理をして食べていたのも見透かされていて、「頑張つて食べるきみはかわいかったぞっ」とも言った。

しかしこのままでは申し訳ないので、店にある服を買うことにした。あんまり熱心を選ぶとテナが今からドラゴス特注の縫い始めかねないので、あまり関心のないような素振りで適当に選んだ。

それでもかなり喜んでくれて、テナはドラゴスの体のサイズを測った。次に来た時のためだという。

いい値段で買ってやんなきゃな。ドラゴスは思った。

ドラゴスはそこで帰ることにした。

別れ際、チトクは満面の笑みを浮かべ、ドラゴスに感謝を述べた。
テナは泣きじゃくっていた。

「……また来るんだよドラゴス！ でないとお姉さん泣いちゃうよ！」

「もう泣いてるだろ」

「うう……だつて……」

テナは姉から妹に変わっていた。

ドラゴスは別れの言葉を告げ、歩き始めた。

「また一緒に食べようねー！」

次第に遠ざかるドラゴスに対して、テナは人目もはばからず声を張り上げ、大きく手を振り続ける。

「また一緒に寝ようねー！」

ちゃんと覚えてんのかよ！

「またベッドで抱き合っ」

「わかったわかった！」

慌てて遮った。

「絶対に行くよ！ すぐに行くよ！」

そう誓い、ドラゴスはテナと別れたのだった。

第二章 旅立ち 2

2

夕暮れ時、ドラゴスは自室でぼんやりしていた。周りは静かなのに、テナとの騒がしく過ごした時の空気が頭の中でいつまでも巡っているように感じた。

何だか作り物にも思えた。しかし、記憶を辿ればあの時間は確かに存在していたし、実感もある。目をつぶるとテナとのやり取りに思い出し笑いをしてしまう。

ドラゴスは昼ごろに帰ってからずっとその調子だった。ぼけつとしながら楽しい時間を思い出しては一人でニヤニヤしているのだ。

これじゃだめだ！

ドラゴスは思い立ち、家を出た。向かった先は宿屋だった。

その日はリイラやトルガと一緒に夕飯を食べる予定だった。

村にはいくつも宿屋があるが、トルガはリイラの働く宿屋に泊まっていた。ドラゴスが強引にそうさせたのだ。それも一番高い部屋を勝手に予約しておいた。トルガ一人なのに四人部屋であった。

トルガはそれでも結構金があったので問題はなかった。それに、ドラゴスも単に嫌がらせのつもりでそうした訳ではない。八割方は嫌がらせであったが、リイラや宿屋の主人マルクのために大口の客、それも大して気を使わなくてもいい客を用意したつもりであった。そして大きな部屋の方がトルガの部屋で飲み食いしやすいというのもあった。

そのおかげでトルガの部屋では連日誰かがやってきて小規模な宴が催されていた。そこで出される料理も宿泊費に含まれてしまうのでドラゴスの計らいは多大な不利益であったが、トルガも楽しんで

いた。

今日のその宴の一つで、ドラゴスとトルガ、そしてリイラで集まるのだ。

リイラはいつも宿屋にいるので特に呼ぶ必要はなかったが、ドラゴスは連日の労をねぎらう意味もあつて改めて招待した。その時の料理を作るのも結局リイラで、特別何かが変わる訳ではないが、リイラが喜んでいたのでドラゴスはそうして良かったと思った。

ドラゴスが宿屋に着くと、トルガは外出していた。集まるのは夜だったので、まだ早かったのだ。

「じゃあ部屋で待つよ」

ドラゴスがそう言うと、リイラは止めた。

「だ、駄目ですよ勝手に入ったら」

「いいっていいって、トルガだし。それにお前は掃除に入ったりしてるんだろ？」

「そりゃ、まあ……」

「なら俺も臨時お手伝いさんってことで」

結局リイラはドラゴスの押しに勝てず、トルガの部屋に入れた。

使っていないベッドが三つもあるので、ドラゴスはその一つに寝転んだ。

「やっぱり広いなー」

「四人部屋ですからね……」

早めに来てみたはいいが、別にここに来てもすることはなかった。

「……暇だ。リイラ、今なんか仕事あんの？」

「急ぎの用はないです」

「じゃあこっち来て話そうよ」

起き上がったドラゴスは隣をぽんと叩いた。

「は、はいっ」

リイラは素直にドラゴスの横に腰掛けたが、すぐ向かいのベッドに座りなおした。顔が赤く、落ち着きがなくなっていた。

リイラのそんな様子を見てみるとドラゴスもどきまぎしてしま

うのだった。それに、改めて「話そう」なんて言ってしまったせいで、かえって話しくなくなっていた。

向かい合うリイラの姿は三年前とは違った。髪型は変えていないのに、地味だった黒髪が今は艶^{つや}を持ち、一つの華となった。

背も伸びている。胸もそこそこ大きくなり、体は全体的に女性的な特徴が出ている。そして何より顔に子供っぽさが抜け始め、そのかわり「女」が時折見え隠れする。ドラゴスと同じく、満十七歳であり、今年で十八歳になる。

しかし年齢を聞かれたらリイラは「十七」と答えるが、ドラゴスは「十八」と答えるだろう。魔界では数え年が一般的なのだ。ところがりイラはそれをまだ知らず、自分はドラゴスの一歳下だと思っている。そしてドラゴスを頼りになる年上として、精神的な支えにしている。

ドラゴスのほうも自分が年上だと思っていて、リイラに頼りにされているのを感じている。それどころか、いつか騎士のように救ってくれる憧れの存在としてドラゴスを見ているのもよくわかった。

でも、現実が違う。ドラゴスは思うのだった。

あれほど格好付けて救ってやると言ったのに、救えずにいるのだ。リイラにとっては「救ってやる」と言われることそれ自体が救いだっただけのは確かだが、ドラゴスは本気で救うつもりだった。それなのに、まだ冒険の旅にも出ていない。歯痒かった。

ドラゴスが鍛えて強くなるほど、リイラも喜び、ドラゴスを尊敬した。ベラが留守の間はしゅっちゅうドラゴスの家に来て、家事をしてくれた。料理も舌に味が染みるほど食べさせてもらった。宿屋に行けばいつだって献身的に世話をしてくれた。

それなのに！

変えられない。力があっても変えられないのだ。

ダグルが死んだからって恩義が消える訳じゃない。一緒に育った大切な姉に全てを押し付けることも出来やしない。結果、あの家が

ら動けない。

自分は無力じゃない。必ず救ってみせる。

目の前のリイラにそう言いたいのだが、虚しく響くだけのようないきがして、ずっと出来ずにいる。

三年。

リイラには希望の三年だったかもしれない。だが、ドラゴスには屈辱の三年であった。

「ド、ドラゴスさんっ」

リイラは少し涙ぐんでいるように見えた。

「あのっ、え、遠慮なく言ってくださいっ!」

やはり見透かされているのだろうか。ドラゴスの自責の念がいつそう強くなる。

「何が」

しかしそれをリイラに言っても仕方ない。リイラが自己嫌悪になるだけだ。

「ほ、ほら、そんな険しい顔してるじゃないですかっ。やっぱり私失礼なことしたんですか？ あっ、の、飲み物ですか？ ごめんなさいっ、お茶も出さずに座っちゃうなんて失礼ですよ、い、今持つてきます!」

なんだ……

慌てて立ち上がろうとするリイラを、ドラゴスは肩を押さえて止めた。

「そんなんじゃないって。ちょっと考え事をしてただけ。お茶もいらないからここにいてくれよ」

「は、はいっ」

落ち着いて説得をしたのだが、涙目であたふたするリイラと見つめ合ってしまうとドラゴスも動揺し始めた。

リイラの狼狽する姿には匂い立つような魅力があったのだ。その

せいでいつもドラゴスは鼓動が高鳴り、息苦しくなる。もっとも、ドラゴス自身はそれを異世界人のリイラ特有の毒かなんかだと思っていた。

くそっ！ 今日毒が強いな。心肺機能への負担に加え、胸部中央に違和感が……

ドラゴスはこの得体の知れない毒を警戒はしていたが、死にはしないと思っていた。むしろ毒をもらった後は体の底から力が湧き上がるように感じるので、もっと欲しいと思った。一種の中毒性を持っているのだ。そのせいでいつもリイラに会いたくてたまらなくなり、三日も会わないと胸が苦しくなるのが弊害である。などとドラゴスは考えていた。

さすがにドラゴスもリイラに女性的な魅力があることくらいわかっていた。三年も一緒にいればあの大きな胸が何かの拍子に軽く触れてしまうこともよくあり、その都度どきつとした。しかし、そういった魅力とは別の、離れている時にこそ強くなる胸の苦しみが何なのか、微塵もわかっていなかったのだ。

ドラゴスは既にリイラの発する毒にやられているが、もう少し毒を欲しくなった。

「……さやか」

「え！？ ちょっと、やめてくださいよっ」

リイラは猛烈な勢いで恥らい出す。「さやか」という聞きなれない響きの言葉はリイラが元の世界にいた時の名前だそうで、それを言うときリイラはいつも赤くなる。リイラいわく、こつちの世界でその名前を呼ばれるととても変な感じがするらしい。それに「経験がないことだから」とも言っていた。ドラゴスにはリイラの言う「経験」の意味がわからなかったし、それを言うときに殊更消え入りそうな声になった理由もわからない。しかし、からかわれるリイラがもじもじする姿を無性に見たくなり、たまに「さやか」と呼んでみるのだ。

リイラが「さやか」と名乗らないのはマルクへの恩もあった。リ

イラがこちらの世界へ来た当初は「さやか」と名乗ったが、ただでさえ浮いた存在であるから変わった名前ではさらに浮いてしまうマルクは考え、「リイラ」という魔界で違和感のない名を与えたのだ。リイラはその名を大事にしているのだ。

「さやか、何をやるんだよ、さやか」

「あのっ……な、名前……さ、さや……だ、だめっ、だめですっ！」
リイラはますます恥ずかしがり、おかしくなってしまうそうだった。

しかしドラゴスも毒をもらいすぎていた。余裕そうに繕っているが、実際は動悸、息切れ、発熱を必死に隠している。今日はさらに胸の奥が真空になるような違和感もある。

くっ、体が壊れるかもしれないっ！ この辺でやめとかなくては

……

「はは、冗談だよ。リイラ」

「やめてくださいよ、もう」

リイラは頬を真っ赤に染めながら睨むという妙な表情になった。

ドラゴスは微笑んでリイラの頭をすっとなでる。リイラは何も言わず、今度は満足そうに目を細めた。ドラゴスも特に何か言う訳ではない。三年の月日は言葉を越えたところにあった。

心地良い気分になったドラゴスはリイラに告げた。

「もうそろそろ仕事しなきゃならないんだろ？ 行っっていいよ。俺はしばらくごろ寝してるからさ」

「じゃあこの後のために一生懸命料理してきます」

リイラはやる気に満ちた笑みを見せる。

「期待してるよ。じゃ、行っってらっしやい」

「行ってきますっ」

上機嫌のリイラが部屋から出て行くのを見届け、ごろんと仰向けになった。

ああ、しっくりくる……

結局ここに来て寝転んでニヤニヤしているのだが、自分の部屋

にいた時と心持ちは随分と違っていた。

翌日、ドラゴスはまたもや暇であった。昼間なのにいつまでもベッドに寝転がり、することと言えば昨晚の宴を思い出してニヤニヤするくらいであった。

今日は宿屋に行けない。大人数の客が来たとかで、トルガは一人部屋に移ってしまった。ここ数日は村に泊まる人が何故が多く、マルクの宿屋も急に満室になってしまったのでリイラも忙しいという……困ったな。

この三年間いつもそうであったが、リイラが忙しくなると途端に退屈を感じ始めてしまうドラゴスであった。

結局一日中だらだらと無為な時間を過ごした。もう夕食の時間だった。

夕飯はベラが作った、肉で肉を食うような献立だった。

ベラの料理が嫌いな訳ではない。濃いめで大雑把な味付けで単調であることは否めないが、その味で育ったドラゴスは、むしろ好きだった。

だが最近のドラゴスには少々つらいものがある。

それはこのところベラが数が月ごとに家を空け、だいたい年の半分以上しか家にいないことも大きい。ドラゴスはベラがいない間は自炊していたのだが、料理の得意なリイラに食事の面倒を見てもらうことも多かった。それどころか家事もやってもらっていた。

しかしドラゴスと姉の間にあまり会話がなないのはそういった理由ではなかった。この家では肉をがついている時に会話がなくなるのは必然であったが、二人とも概ね食べ終えつつあるので、この場合は違った。

二人とも、自分たちの今後について考えてしまっていたのだ。

中途半端な現状をどうするか。それでも今を維持するのか。

互いに会話がないことへの気まずさはあった。しかし、どちらも言つべき言葉が見つからない。いや、決められない。二人の頭の中に渦巻くのは言いたくない言葉ばかりだった。

より深刻に考えていたのはベラのほうで、先に口を開いた。

「トルガのところで食べなくてよかったの？」

「それは昨日だったし、今日はうちで食いたかったからさ」

ベラは迷っていた。何を言つべきか、何を言わざるべきかを。

「よくリイラにご飯作らせてるんだってね」

「あいつの料理すごく美味いんだぜ。この村に来てからどんどん料理上手くなつて今じゃ姉ちゃんとは月とすっぽんだよ！ あ、ごめ

……」

殴られると思ったのだらう。ドラゴスは身を固くした。しかし、ベラは何もしなかった。

ベラの方は全く違うことを考えていたのだった。

リイラのことをドラゴスは楽しそうに話す。ベラはそれを見て思つたのだ。

こいつがチビだった頃とはもう違うんだ。いつまでも可愛いがつて手元に置いておくような小さな弟じゃない。生まれだつて育ちだつて家だつて関係ない。……一人の男なんだ。

ベラは決めた。

「私ね、店をたたもうと思うんだ」

「えっ？」

ベラの突然の申し出にドラゴスは驚いた。

「そ、それじゃあ生活が」

「店をなくす訳じゃないわよ。ただ不定期にして、行商一本にしばらく。その方が稼ぎもいいし」

「じゃあ店番は……」

「あんたはもう用なしってこと。私も滅多に帰らないと思うし、悪いけどあんたはあんたでなんとかしてちょうだい」

急に突き放され、ドラゴスはまだベラの言葉の真意をつかめずに

いた。

「でも俺はここで」

「やめなさい！」

ベラの剣幕が静寂を呼んだ。

「……いい加減にしなさいよ。まだ恩義だとか言つつもり？ ふざけないで！ 父さんが今の状況を望んだと思ってるの？」

「だって大事な家だろ！」

ドラゴスも熱くなった。

「馬鹿野郎っ！」

「なんだよ！ 何がいけないっていうんだよ！」

「確かに家は大事だけど、でも、あんたが家に縛られてどうする！ 大事なのはあんたなんだよ！」

「でも姉ちゃんが」

「自分の問題も片付けられない奴が人のことを言うな！」

ドラゴスは何も言えなかった。

何も変えられない。

その悔しさが込み上げる。

「あんたは姉に全部押し付けるように感じてるのかもしれないけど、私は望んでやるのよ。私からすれば行商のほうが楽なの。それくらいあんたもわかってるでしょ」

ドラゴスは野に放り出されたような感覚になり、困惑した。

「じゃあどうすれば……」

「馬鹿野郎っ！」

ドラゴスの頬をベラが思い切り引つ叩いた。

「そんなこと人に聞いてどうする！ 答えなんかとっくに出てるでしょ！」

ドラゴスの胸の中には明確な答えが、ずっと前からあったのだ。固く、揺ぎないはずだった。しかし、まだこの場でもその答えを出すことを躊躇した。

「馬鹿野郎っ！」

再びベラが手を上げた。

「あんたの人生の主人公は誰？ あんたの人生の主人公は……あんなにたしかいないのよ！」

生きなさい！ 自分の人生を！」

ドラゴスがうまく言葉を返せないでいると、ベラはさらに背中を押した。

「悩む暇があつたら進め！ 我が弟よ！」

涙が込み上げるのを感じたドラゴスはぐっところえて立ち上がり、小さな声でありがとう、と言ってその場を離れた。

ドラゴスは外へ出ていった。

暗闇の中を歩き始め、つぶやいた。

「……俺の人生の主人公は……俺だ」
もう一度つぶやいた。

「……主人公は、俺だ」

心に小さく火が灯るのを感じた。

やがてそれは炎となり、我が身を焼かんとばかりに燃え盛る。射抜くような目で、暗闇を見据えた。

闇の向こうも見える気がした。

ドラゴスは叫んだ。

「俺は決めた！俺の人生の主人公は、俺だ！」
そして走りだした。

ドラゴスは村は宿屋へ向かい飛びながら走っていたが、トルガの部屋にはもう泊まれないことに気が付いた。

じゃありイラの部屋で……

そう考えたが、リイラの部屋にだってベッドは一つしかない。

思えばリイラの宿屋に泊まったこともリイラを自宅に泊めたことも数え切れないくらいあるが、一つのベッドで寝たことはない。そ

んな経験はテナとしたことがあるだけだった。

床で寝かせてもらうことも考えたが、テナを抱いて寝るのは心地良かったのだから、リイラでそれをやったらもっと心地良いかもしれないと思った。

そんなことを考えていると、この三年間でごく普通に感じてきたリイラの温もりが特別なもののように思えた。

触れたい。なでたい。……抱きしめたい！

それも一つの答えとして、ドラゴスの心が出したものだった。

「……リイラ！」

ドラゴスは大きく飛んだ。

宿屋までもうしばらくというところで、不意に視界に入ったのはトルガだった。

「ドラゴス！」

差し迫った様子だった。

「ちょうどよかった。たった今リイラが連れて行かれた！ 他の宿泊客はドスドルマの従者だったんだ！」

一体何が起こったんだ！？ 連れて行かれた？ ドスドルマ？

くそっ！ 何ということだ。ちゃんと警告しておけば良かった。まだ状況が掴めないが、ドラゴスはまず悔いた。

「それで急にいなくなつてマルクさんに宛てた手紙だけが置いてあったんだ」

「そこには何て書いてあったんだ」

「ドスドルマの城で雇ってもらうことになったから、毎月金を送ると書いてあったんだ。あの野郎、事情を調べてリイラの弱みに付け込んで説得しやがった」

「くそっ！」

リイラを養った三年分の金額となれば相当だろう。マルクに請求するつもりなんかなかったも、リイラにとっては負い目だったのは確

かだ。

「ドスドルマの噂は昔から聞いていたが、城に雇い入れるなんて聞いたことがない。もしかすると強引に娶るつもりかもしれない」

リイラはドスドルマの理想に近いだけに、それも十分にあり得る。「ど、どうすればいいんだ!？」

「いま宿屋では従者たちがマルクさんを説得している。ドスドルマはリイラを連れて馬車でさっさと帰りやがった。もう俺が走っても間に合わない。ドラゴス、リイラを連れ戻せるのはお前だけだ!」

「わかった!」

「最後に一つ、マルクさんから伝言だ。

『娘』を、救ってくれ!」

「そのクエスト、乗るぜ!」

「奴は街道を東に向かつてる。急げ! 俺もすぐに行く!」

「おう!」

ドラゴスは全速力で走り、夜を切り裂くように飛んだ。

ゴトゴトゴトゴト……

単調な音の連続。暗闇の中。

リイラは二人乗りの馬車に揺られていた。それは個室になっていて、窓の外を見ても暗闇しか見えない。

「うふう……いいねいいね、たまらないね……その顔。こっち向いて……視線は下に……今度は顎上げて……はい横向いて……俯いて……首を振って……」

リイラは言われるがままに動いた。

「あつ、ああ……もらしちゃいそうだよぼくは……んん……んん……じゅうじゅん。従順! ね? ね? ね!」

「は、はい……」

リイラは困惑していた。隣に座る男はドスドルマだった。

背が低く小太りの中年だ。三十と言っていたが、それ以上に見える。伸びっぱなしの長髪をたつぷりの油で後ろに撫でつけ、きつい香りを漂わせる。眼鏡は指紋で汚れている。

「りっちゃん不安そうな顔だねえ……ぼくは悪いようにしないから……ぎひ」

ドスドルマは顎を首に埋め、非対称に笑った。

「大丈夫……お金もちゃんと払うよ……毎月金貨百枚……銀貨のほうがいいかい？　なら一万枚……」。

でも不安なんだろう？　では！　銅貨百万枚に崩して支払われるんじゃないかって！　ではは！　ではは！　ぎひ、ぎひひ……びゅんっ！」

そう言っただけで痺れたように跳ね上がるドスドルマを見てリイラはいっそう不安になるのだった。

だが、毎月金貨百枚は大金だ。仮にどこかで一生懸命に働いても給料はせいぜい金貨二十枚程度だ。毎月百枚ももらえれば、マルクが今まで負担した分のお金は返せるし、ドラゴスが冒険に出るための資金を自分が援助することも出来る。もし自分だけの力で元の世界へ戻らなくなっても、数年で十分な資金を得られるだろう。そう考えるとリイラは自分が稼ぐ他にないと思った。

「まだ心配してるのかい？　約束したでしょ……りっちゃんにはお掃除とかお洗濯とかお料理とかをやってもらうんだよ……それだけ簡単なお仕事だよ……ぎひ……そういうの得意でしょ？」

「ええ、まあ……」

「ぎひ……ぎひひ……お掃除が得意なりっちゃんにねえ……ぼくの大切なチッチチッチをてるんしてもらうんだ……てるんしてんしてもらうんだ……あびゅんっ！」

ドスドルマは再び跳ね上がる。

本当に家事の手伝いで金貨百枚の待遇だとしても、リイラはこの男の屋敷で生活しなければならぬのだ。それを想像すると、怖かった。

「りっちゃん……りっちゃん……やや、りったん……りったん？
りったん！　ね！　ね！　ん！」

「はい……『りったん』でいいです……」

ドスドルマは座っていた位置を大きくずらしてリイラに寄った。
リイラも横にずれたが、壁があり、逃げ場はない。ドスドルマは自分の体と壁でリイラを挟み、髪の毛を嗅いだ。

「りったん……りったん……りったん……ああ、うああ……いい匂い、いい匂い……もれる、もれちゃう……うっ……びゅんっ！　ああ……うあ……ああ……肌……やわらかい……指がとけるよあ……じゅわあ……じゅわあ……胸、胸……おっぱい……りっぱい？　りっぱい、りっぱい！　へにゅうって、へにゅうって……あ、あ、あびゅんっっ！」

ドスドルマは不可思議な拳動を繰り返す。リイラは怯えていた。怖い。目の前の男が怖い。我慢していたがやはり、つらかった。

逃げたい。

でも自分はもう選んでしまったから、逃げられない。

でもどうしようもなく、つらい。

でももう遅い。

ああ、三年前と一緒だ。今度こそ、「物」になろう。こんな耐えられない……

リイラは人であることを諦めた。

「うう……りったん……笑って……笑って？　笑って？」

もうどうにでもなればいい。言われる通りに笑ってみようと思った。

私はただの人形……

しかし、笑顔の作り方がわからない。

自分はこの村で、たくさん笑った気がするのに。

そうだ、自然に笑ってたんだ。そしてほとんどの笑顔はあの人がくれた。

笑おうとしているのに、涙が溢れた。止めようと思えば思うほど、あの人の顔が思い浮かんだ。

なのに、なのに私は、あの人がくれた笑顔をなくしてしまっ
た！

探してももう見当たらない。出てくるのはひたすら涙だった。

「……とめてください！ ごめんなさい……私やっぱり、行きたくな
いんです！」

「物」になったつもりだったのに、気がつけば叫んでいた。抑え
られなかった。自分の気持ちに涙とともに溢れるのだ。

「……会いたい！ ドラゴスさんに会いたい！」

笑顔をくれるあの人が、好きで好きでたまらないのだ。また笑顔
をもらいたいのだ。

「ここで降りしてください！」

「ほうお？ だめだよ……約束したもんね」

ドスドルマはリイラの涙を指ですくい、舐めた。

扉を開けようとするが、外から鍵がかかっていて開かない。

「ぎひ……そのための馬車だから、ね」

ドスドルマは非対称に笑う。

「……会いたいんです！ 大好きな人に会いたいんです！」

泣き叫んでもドスドルマは意に介さない。こんな状況には慣れて
いるのだろう。

しかし、馬車は止まった。

「ね、ねえ！ なんで今日は止めちゃうの！」

ドスドルマが小窓から御者に怒鳴るが、その直後に御者の姿が消
えた。そして馬車の上半分が吹き飛んだ。

咄嗟に顔を伏せ目をつぶった。恐る恐る目を開けて前を見ると、
粉々になった馬車の破片が舞っていた。そして、その中から手が差
し出された。

……あつ。

よく知る手だった。迷わず握り締めた。

「リイラ！」

「ドラゴスさん！」

リイラが飛びつくと、ドラゴスは抱きかかえて馬車の外に連れ出した。

「た」

「助ける。当然だろ？」

ドラゴスはリイラをきつく抱きしめた。リイラには抱きしめるドラゴスの腕が、体の芯まで届きそうに感じた。

暖かい。

「リイラ、大丈夫か？」

「はいっ」

今度はさつきとは違う、暖かい涙がこぼれた。

「ならよかった……」

ドラゴスはリイラの頭をすつとなで、微笑んだ。自然とリイラも笑顔をもらっていた。

「これで一件落着……とすれば丸く収まるかもしれないんだけどなあ……」

ドラゴスは腕を組み、眉間に皺を寄せ目をつぶり、悩んでいる様子だった。

「んんゝあゝ、駄目だ！ やっぱ我慢出来ない！」

そう言って壊れた馬車の中に隠れているドスドルマに向かった。

「ドスドルマ！ 死なねえ程度にぶっ殺す！」

「……ぼく知らないぼく知らないぼく知らない……」

ドラゴスはドスドルマを引きずり出すなり、すぐさま顔を殴った。

「びゅんこ！」

奇声を上げながらドスドルマは転がった。

「だ、大丈夫なんですか？」

「大丈夫。ちゃんと手加減してるよ」

ドラゴスは心配するリイラをなだめる。

「もう一発！」

「てぶるっ！」

今度は蹴り飛ばした。

「これはテナの分！」

胸倉を掴み持ち上げ、みぞおちを殴った。

「べふ！」

ドスドルマは大きく宙に浮いた。

「そしてこれは……リイラを泣かせた分だ！」

ドラゴスはそう叫ぶと、猛烈なラッシュを浴びせた。

「おらおらおらおらおらおらあ！」

ドスドルマは宙に浮いたままで、既に気を失っているようだった。

「うりやうりやうりやうりやうりやあ！」

「まだまだまだまだまだまだだっ！」

「くそくそくそくそくそくそくそっ！」

「このこのこのこのこのこのこのっ！」

最後に気合の一撃を放った。

「だりやあ！」

ドスドルマは街道沿いの畑にぐしゃりと落ちた。横には御者も伸びていた。

「大丈夫……なんですよね？」

「ああ大丈夫。命に別状はない。ちょっと懲らしめただけさ」

ドラゴスはそうは言うが、リイラにはどう見てもやりすぎているように思えた。ドラゴスもちよつと不安そうにしているが、後で魔力かなんかで治すのかもしれない。

「寒くないか？」

ドラゴスはリイラを気遣った。

確かに夜風は肌寒いのでリイラがこくりと頷くと、肩に手を添え、壊れた馬車の中に座らせた。立派な椅子なので座り心地は良く、壁も下半分は残っているものでそれなりに風は防げた。

ドラゴスはそこで改まった真剣な表情になった。

射抜くような目。

リイラは思った。

「あの時の『権利』、覚えてるか？」

「……はい」

リイラは思い出す。三年前のあの日の約束。

この身一つしかない自分はドラゴスのためなら何でも働いてみせる。この体一つで、恩を返す約束。それを実行させる権利。

リイラはあの日から生きるのが楽しくなったのだ。元の世界にいた時でも「生きる喜び」なんていうのは感じたことがなかったのに、それをドラゴスは毎日与えてくれた。なのに何の見返りも求めない。ただもらってばかりだった。

だから今でも恩を返したいと思っている。ドラゴスの持つ権利は消えてはいない。

「今使つてもいいか？」

「ええ、何なりと」

「じゃあ……」

少し間を置き、ドラゴスは意を決したように言った。

「この我のものとなれ！」

「え？」

ドラゴスは少し恥ずかしそうになってすぐに言い直した。

「その……つまり……お前が欲しい！ お前が必要なんだ！」

よくわからないが、リイラはこれほど言われて嬉しい言葉は初めてだった。

「……体で払わせる権利って言っただろ？」

ん？

「だから……さ、今から体で払ってくれよ……お前の体が欲しいんだ」

そんな、直接的な！

「い、今ですかっ!？」

「ああ今すぐ」

リイラは体が急激に熱くなり、胸が高鳴るのを感じた。三年も一緒にいたが、ドラゴスがこんなに大胆に迫ってくることはなかったのだ。頼れる年上だがそういうことに関して、ドラゴスはまだ「恋」

なんてちつとも理解していない、きつと胸の苦しみを「毒」だなんて思うような子供だと思っていた。

「こ、ここで……？」

「ここ？ ……まあそういうことになるな。それでこれからもいつも何度でも！」

ドラゴスの眼差しにも熱がこもっていた。

「やっぱりだめか？」

少し残念そうな顔を見せた。

「だ、だ、駄目じゃないですっ！ ど、どうすればいいかよくわからないですけど、どどドラゴスさんとなら本望ですし……わわわわわ私も頑張ってみますっ！」

「そ、そうか！」

ドラゴスは子供のように喜び、リイラを抱きしめた。体の奥に火がつくのを感じた。

「おーい！」

トルガの声だった。

「おっ、ちようどいいところに来た！」

ちよ、ちようどいい！？

ドラゴスは馬で駆けつけたトルガにドスドルマを治すようにいった。

「お、おいドラゴス、お前……」

「これ一応生きてる……よな？」

「死にはしないだろうが、こんな大怪我は止血だけじゃどうしようもないぜ」

「……てことは？」

「治るのに大分かかるだろうし、腕のいい奴に治してもらわないと歩けるようになるかもわからないぜ？」

「うわぁ……」

やはりやりすぎであった。

「それよりお前、これがどういうことになるかわかってるのか？」

「ああ。その点は問題ない。俺、もう決めたんだ」

ドラゴスは自信を持って答えていた。

「やっとか……リイラは？」

「リイラも承諾した」

「そうか、なら急げ。どつかあてはあるんだろ？　ここは俺が何とかしとく」

「悪いな」

「貸しだぜ？」

ドラゴスはリイラのもとに駆け寄った。

「急ぐぞ！」

「急ぐんですか！？」

「とにかく早いほうがいいんだ！」

ドラゴスはリイラを抱いた。

「トルガ、マルクさんに伝言頼む！」

『娘』を救った報酬として『娘』はもらった！

「わかった！　じゃあ近いうち　ザッザル　で会おう！」

「おう！」

トルガと急ぎの会話を交わしたのち、ドラゴスはリイラを抱きかえたまま走り出して一歩ごとに飛んだ。

リイラは話についていけなかった。いま何をしているのかもわからない。

飛びながら走るドラゴスに抱えられながら、リイラは質問を投げかけた。

「む、村に戻らなくていいんですか？」

「ああ。むしろもう戻れないよ。領主の息子を思いっきりぶん殴ったんだから」

「じゃあどうしてわざわざそんなことしたんですか！？」

「お前、泣いてたろ？　理由はそれで十分だよ」

ドラゴスのしてしまったことは馬鹿なことであるのに、そう言われてしまうと嬉しさが込み上げる。

「……ごめんなさい。私のせいで村に帰れなくなっちゃうなんて……でもこれからどうするんですか？」

「冒険だよ。冒険が始まるんだ！」

ドラゴスの顔は晴れやかだった。

「いつかは出るつもりだった。お前に託されたクエストもある」

「覚えてくれてたんですかつ」

「当たり前だろ。必ずお前を元の世界に戻してやるさ！ その冒険に出るのが今なんだよ！ 俺はもう決めたんだ！」

ふと、一つの疑問が浮かんだ。

「私は……これからどうなるんですか？」

「ん？ 何言ってるんだ一緒に来るんだろ」

「えっ」

「おいもう忘れたのかよ。リイラ、お前は俺のものになったんだ。お前の体も俺のものだ。だからいま持ち歩いてるんだろ」

そ、そういう意味だったのか！ まあ、そうだよ、ドラゴスさんだもの。

……でも、私の体がドラゴスさんのものなら、これからそういう機会もひょっとしたら……

「あれ？ なんか体が熱くなってるぞ？ 嫌なのか？」

「い、嫌じゃないですっ！ ただ……」

「確かに冒険は危険だよ。でも、俺が守ってやるから安心しな。まあ、それに嫌って言うてももう離さないぜ？ いっぱい料理作ってくれよ。それで二人でいるんなとこに行こう！」

「……は、はいっ」

冒険の始まりがあまりに唐突で、リイラは驚いた。しかし、いずれは旅立たねばならないと思っていたのですがすぐに心は決まった。村のみんなやマルクに別れを告げられないのが残念だが仕方ない。今しかないのだ。今こそ旅立ちの時なのだ。

「覚えてますか？ 出会った日のこと」

「覚えてる。何度も思い出してる」

「あの時もこうしてもらって……」

「あの時より重いけどな」

「ご、ごめんなさい！」

「謝ることないよ。あの時より今の体のほうが、なんていうかその

……大人っぽくて……魅力があるよ」

「そ、そうですか？」

「え、ああ間違いない……きっと……たぶん」

「ふふ、ありがとうございます。……あ、あの、これからもまたこうしてくれませんか？」

「もちろん。きっとそれもあの日から決まってたんだ。こうやって冒険に出ることも全て。なのに俺は、何も出来ずにいた」

「そんなことないです。私が何も出来ないせいで……」

「じゃあ二人とも駄目だったってことだ」

ドラゴスの闇を見据える眼差しに力がこもる。

「でもこれからは違う。俺はここで俺の人生の主人公になった！これから俺は自分の決断で、自分の人生を生きる！それはリイラも同じだ」

「……はい」

リイラも自分の人生の主人公になろうと、決めた。

「それで二人で！俺とお前の物語を生きるんだ！一緒に生きよう！二人の人生を！」

「はいっ！」

リイラを抱きかかえ、ドラゴスは暗闇の中を進んでゆく。

前もろくに見えず危険だ。

吹き付ける風も冷たい。

この先のこともわからない。

しかし、それでも突き進んでゆくのだ。

彼は、自らの人生の主人公となったのだから。

第二章 旅立ち 2（後書き）

ドラゴスクエスト 第二章 完
第三章へ続く……

第三章 山麓の村 1（前書き）

ヒロインの名前を「リイラ」、主人公の姉の名前を「ベラ」に変えました。

第三章 山麓の村 1

第三章 山麓の村

1

朝の白い光が窓から射し込み、ドラゴスの顔を照らしていた。

「うーん……」

小さく唸ってベッドから起き上がると、そこは広い部屋だった。他に誰もいない。隣にもう一つベッドがあり、ドラゴスが寝ていたベッドとともに、真っ白なシャツが日差しを照り返している。ベッドの上から眺める光景は見慣れぬものだが、見覚えがある。そこは、テナの家であった。

着ているのも昨晚着ていた紺色のシャツではなく、真っ白なシャツだった。新品のようだがよく体に馴染んでいる感じがした。恐らくこの前ドラゴスの体のサイズを測ってからテナが縫い上げたシャツなのだろう。

昨晚、トルガにあてはあると言ったが、それがここである。あの後リイラを抱えたまま一時間以上かけて飛びながら走ったドラゴスは、テナの家に着くとすぐに倒れこんだ。昨日は家を出て、ドストルマを追いかけ、そしてテナの家に着くまでひたすら「飛び走る」ことを続けていたのだ。疲労は限界だった。

着いたのは夜遅くだっただろうか。記憶は家の前あたりから薄れている。恐らくテナとは顔を合わせていない。きっとその後リイラが戸を叩いてテナたちを起こし、運んでくれたのだろう。

もう少し体力が持てばリイラにそこまでさせることはなかったはずだ。しかしどうしても「飛び走る」と止まる時に大量の魔力を必要としてしまう。もっと改良しなければならぬ。簡単に魔力を使

い切って倒れてしまうようでは、いざという時にリイラを守れない。そうドラゴスが思っていると、扉の向こうからいい匂いがしてきた。リイラの料理だ。ドラゴスにはすぐにわかった。詳しくは知らないが、ギラムジャン ベースの味に、何かの出汁だしを加えたスープである。味はあっさりとしているが深みがあり、いかにも西部風といった感じだが、魔界にはない料理だ。リイラがいた世界の料理で、味噌汁 というらしい。ただ、魔界には「味噌」というものがないのでギラムジャンで代用した魔界風で、リイラは 魔の味噌汁 と命名していた。

ギラムジャンはリイラの故郷で最も重要な調味料である「味噌」と「醤油」の中間のようであるとリイラは言い、西部料理はリイラの故郷である「日本」の料理に近いらしい。中でも味噌汁はドラゴスのお気に入り、しょっちゅう作ってもらっていた。特に自宅にリイラを泊めた次の日、リイラにやさしく起こされてから食べる朝の味噌汁はまさに別格の美味しさであった。いつだったか、あまりの美味しさに、

「これから毎朝俺に味噌汁作ってくれよー」

と言ったらリイラは顔を真っ赤にして俯いてしまった。リイラのいた世界でもやはり味噌汁は別格の扱いで、きつと特別な意味を持つのだな、とドラゴスは直感した。恐らく、神聖であるとか、家の誇りがかかっているとかで、それを毎朝作るプレッシャーにおののいたに違いない。だから軽々しく言うべきではなかったのだ。どうやって作っているかわからないが、あの味の深みにはそれくらいの重圧がかかっているもおかしくない。

ドラゴスが味噌汁へ思いを巡らせていると、今度はジュウつという音がした。テナだ。きつとテナが油をひいて熱したフライパンに厚切りベーコンを投じたのだ。これは以前食べたことがある。味噌汁と合うかわからないが、これは旨い。スモークは弱めで肉の水分もやや多く柔らかい。その代わり肉の風味と旨味が強いのだ。味付けはなんだろうか。味噌汁に合わせて岩塩と胡椒のシンプルな味付

けかもしれない。ただの塩とはいえ、テナの家にあった岩塩は侮れない。ツンとした感じがなく、まるやかであり、素材の味を殺さない。それでいて塩自体の旨味もさりげなく料理に添える。まさに理想の塩だ。

今思えば数日前にテナの家で食べた食事も全てが相当良いものだった。台所の環境も良すぎるほどに良く、恐らく今も二人が同時に料理することの出来る余裕があるはずだ。あの晩は酒も飲んでいて深く考えなかったが、テナの生活水準はそれなりに高そうだった。というより、裕福としか思えない。後で聞いてみよう。それにしても……

いい匂い。いい音。

これはまさに夢のようであった。リイラとテナが料理を作ってくれているのだ。ドラゴスはもうこの時点で幸福を感じ始めた。

そういえば寝室にはベッドは二つしかない。だが人は四人いる。

どういう組み合わせだったのだろうか。ドラゴスは気になった。体は軽く、こんなにぐっすり眠れたのだから、テナを抱き、なでながら寝たのかもしれない。いや、もしかするとリイラを抱いて寝たからこんな心地良い朝なのかもしれない。うーん。どちらにしてもなぜか幸福感を禁じえない。ま、まさか二人ともか！　そ、それならば納得出来るぞ！　この素晴らしい朝が！

するとそこへチトクが入ってきた。そのちびっ子は短く刈った金髪をしていて、くりくりとした碧眼を輝かせて立っていた。

「あ、ドラゴスさんおはようございます。朝ごはんですよ。えへへ

……昨日はあんなになでしてくれてどうも……」

「お前かよ！」

チトクの顔が嬉しそうなほど、ガツカリ感と悔しさが込み上げる。ああそうさ、そりゃ普通は男女で分けるだろうね！

「今行くよ」

ドラゴスの声は酷く不機嫌だった。

「疲れてるんならもう少し寝てからでも……」

チトクは心配そうに言った。

「いやすぐ行く。早く顔が見たい人がいるし」

リイラの無事をちゃんと確かめたかったし、何より会いたかった。
「じゃ、どうぞどうぞ」

満面の笑みを浮かべるチトクに促され、寢室を出た。すると居間の奥にリイラが立っていた。

「リ」

「ドラゴース！」

胸部に衝撃を感じたので下を見ると、テナが頭から突っ込んで抱きついていた。ショートヘアの金髪が朝日に輝いた。そして新品の木綿のような匂いがした。テナの匂いだ。

「体は大丈夫？ 怪我とかしてない？ お姉さん心配したんだよ？」
そう言っただらゴスの体中をべたべたと触り、くまなく調べ始めた。テナの小さな手が触れるとくすぐつたい。

「お、おい、やめろって！」

股間さえも躊躇せずチェックしてるあたり、もう身内として見られているのかもしれない。

「大丈夫だって」

「本当？」

テナは真上を見上げるようにして、大きく丸い碧眼を潤ませる。

「ほらこの通り」

ドラゴスは両手を広げてアピールするが、テナの表情に納得の様子はない。

「どの通りなの？ ねえ。お姉さん不安で仕方ないよ！」

「昨日は疲れて倒れたただだから。眠ればなんともないさ」

そう言っただらぽん、とテナの頭をなでた。そこでテナは納得してくれたようだ。

「リ」

「ドスドルマぶん殴ったって本当？」

再び遮られる。今度は目を輝かせていた。テナの勢いに押されて

とりあえず答えた。

「ああ、まあ。お前の分も込めて思いつきりな」

「やっぱり本当なんだ！ 昨日の夜に二人のこと全部リイラちゃんから聞いたんだよ！ ドラゴス、きみ最高だよ！ 超かつこいいよ！ もう大好きだ！ お姉さんと結婚してくれい！」

「え、ええ！？」

ドラゴスより先にリイラが声を上げて驚いた。興奮していたテナも意表を突かれ、きよとした様子でリイラのほうを振り向いた。

「あれ？ リイラちゃんってドラゴスの恋人なの？」

テナはドラゴスとリイラを交互に見た。

「いえ、そんなんじゃないですけど……」

「そんなんじゃないけど……リ、リイラは……俺のものだ」

ドラゴスが答えるとテナは両手を頬に押し付けて驚いた。

「わーお。お姉さんうつかり失恋しちゃったよ」

「だ、だからそんなんじゃないですっ」

リイラが真つ赤な顔で言った。

「じゃあ二人はどんな関係？」

テナにそう言われると二人とも答えられなかった。自分たちがどんな関係かなんか考えたこともなかったのだ。

「むむ、二人とも黙ってしまった……ということは、いやらしい関係だね？ 二人ともうぶな感じなのに意外と」

「ち、違いますっ！」

「うーん、よくわからないなあ……とりあえずドラゴス！」

「お、おう……」

「今夜は抱いてくれるの？ この前みたいに……」

テナは見上げてくるくせに見下ろすような挑発的な目で問いかけた。

「や、やっぱりドラゴスさんとテナさんはそういう関係なんですか

……」

リイラは涙目になっていた。

「ち、違う！ 誤解だ！ お、俺は誰とも……そ、そういう関係に

なつたことはないっ！」

リイラもテナも少し驚いた様子だった。

「おや？ おやおや？ やっぱりうぶだったんだねえドラちゃん」

「へ、変な呼び方するな！」

テナはドラゴスの胸元をつつつと指でなぞりながら吐息混じりに囁いた。

「リイラちゃんの前……私で練習してもいいんだよ？」

「だ、だめですっ！」

リイラが珍しく怒った。が、すぐに頬を染めて俯いた。

「い、いえ、だめじゃないです……ドラゴスさんの自由ですし……私には口出しする権利なんか……」

リイラは再び涙目になっていた。リイラのそういう姿はドラゴスにとつて毒であるため、ドラゴスも冷静さを失っていた。

「いや、だめだテナ！ 俺はリイラを選んだんだ！」

「ほほう、ようやく恋人宣言ですな？」

「あっ」

どうやら嵌められていたようだった。

「そんなんじゃ」

ドラゴスとリイラで声を合わせて否定しようとしたが、テナは強引に話を切り替える。

「それより朝ごはんだけい！」

そうしてこの問題は朝食によつてうやむやにされた。

ドラゴスとリイラはなんだが恥ずかしくなつて会話も少なくなつてしまつたが、互いの距離を今までより近く感じていた。

一方その脇で心配そうな顔をしたチトクがテナの手を強く握つたのを、二人は知らなかった。

「ええっ！？ 何を言ってるんだ！」

「だから言ってるじゃない。お姉さんたちが全部面倒見てやるって！」

朝食を食べ終わったところ、テナとチトクはドラゴスの旅に付いていくと言い出したのだ。それどころか全て面倒を見てやると主張する。

「それに、旅費もないんでしょ？」

「そ、それは……」

ドラゴスはベラとの夕食時に出て行ったきりなので、完全に手ぶらだった。短剣すら持っていない。

「で、でもお前たちだってそんな余裕は」

「あるね！ はっ！ 私たちを舐めるんじゃないよ！ この町で荒稼ぎする 裁縫師テナ とは私のことさ！」

なるほど、道理で暮らしもいいし店主が寝泊り用の別邸まで持っているのか。ドラゴスは納得した。

「さらにチトクはこの町一番の使い走り！ 人呼んで パシリのチトク！ その卓越した記憶力と地形把握能力は他の追随を許さないのさ！」

すごいんだかよくわからないが、とにかくチトクも稼いでいるらしい。

「で、でもそんなの悪いですし……」

「リイラは黙ってて！」

「は、はいっ」

そしてなぜかリイラに厳しいテナ。

腰に手を当て、テナはドラゴスに詰め寄った。

「だいたいドラゴス！ 状況をわかってるのかい？ きみは賞金稼ぎどころかまず賞金首になるかもしれないんだよ？」

「た、確かに……」

やはり領主の息子を半殺しにしたのはまずかった。

「そんな極悪人を匿った私たちも……しくしく」

凄まじくわざとらしい演技だが、その点に関しては謝るしかない。

「す、すまない……」

「責任、取ってくれる？」

「ど、どんな……」

リイラも不安げな顔をした。

「連れてって！」

「結局そこか！」

詰め寄ってくるテナにどうすれば勝てるのか、ドラゴスは考えた。しかし、いい案は思い浮かばない。思えばテナの押しに勝ったことなどない。

「ねえ」

「ん？」

テナは口の端を吊り上げ、ドラゴスの胸を指で突付く。

「ザッザルへの行き方は知ってるの？」

「そ、それは地図を見て……」

「地図、持ってるの？」

「それはどこかで買って……」

「お金、あるの？」

「な、ない……です」

テナには勝てない。それがドラゴスの出した結論であった。

「どうせ移動手段も考えてないんでしょ。全部私らに任せなさいな！」

ドラゴスは悩んだが、今はテナの力を借りるしかないと判断せざるを得なかった。

「よ、よろしく頼む……」

「よしきた！」

テナは天高く拳を突き上げたのち、チトクとハイタッチした。

「いんですか！？ ドラゴスさん！」

ドラゴスの決断にリイラは戸惑っていた。

するとテナがリイラの前に詰め寄った。

「リイラは自費で別行動ね」

テナはあざ笑うように言い放った。

「ええ！？……で、でもそうですよ。テナさんには私なんかを助ける義理もないですし……」

「おいテナ！ それは酷いんじゃないか」

涙目のリイラを見てドラゴスも思わず熱くなつた。

「へへ、冗談だいっ！ りっちゃんとドラちゃんも全部私が面倒見ちゃうよ！ 二人とも大好きだからね！」

テナはそう言つてリイラに抱きつき、胸に顔をうずめた。

「うひーやわらかー」

リイラが「どうすればいいのかわからない」という目でドラゴスに助けを求めている。

「リイラ、あきらめろ。テナはずっとこんな感じだ」

「そだよー」

テナは顔を上げてリイラを見つめた。

リイラは何と言つていいのかわからないので、とりあえずお礼を言つた。

「あの、ありがとうございます。お礼はいつか必ず……」

「ああそうだ。借りは絶対に返すよ」

そう言つても断るだろうと思つたが、テナは目を輝かせた。

「絶対に？」

「ああ絶対」

「じゃあ行き先を テグサンドル に変えてもいい？」

「で、でも ザッザル でトルガと」

「すぐじゃないんでしょう？」

「まあ……」

「お姉さん一回行つてみたいんだ。西部首都、テグサンドル。大都會、テグサンドル。グルメの街、テグサンドル！」

「グ、グルメの街……」

確かにトルガと合流するのは今すぐではないし、いずれザッザルで会えればいい。

「テナがそこまで言うなら……」

「い、いいんですか!？」

「リイラは黙ってて!」

「は、はいっ」

やはりなぜかリイラに厳しいテナ。

「じゃあ出発は今晚こっそりね。そんじゃ私たちは準備するから二人は出歩いたりしないでこそこそしてな!」

テナとチトクはなにやら身支度を整え始めた。そして家を出る時にも念を押した。

「ここは領主の城にも近いし賞金首候補の二人は用心するんだよ?」

「おう……」

「はい……」

さすがのテナも真面目な顔だったのだが、そこで急にいたずらっぽく笑った。

「そうだ。日中はもう寝室に入らないようにしておくから、ドラちゃんとりっちゃんはいチャイチャして暇潰してもいいんだよ?」

「ば、ばか!」

からかうテナを追い払ったものの、そんなことを言われて二人つきりにされたら気まずくならざるを得ない。

二人は赤くなって俯いたまま、お互いのことをぼつりぼつりと語り合った。

「皆の衆、よく聞きたまえ」

テナがそう言って切り出したのは深夜だった。

特に夜遅くに出発する予定ではなかったのだが、夕食が宴のように盛り上がってしまったのだ。特にテナとリイラが楽しそうにしていた。

ドラゴスはテナの態度が時々厳しいのでリイラのことを嫌ってい

たのかと思っていたが、ただ単にからかうと可愛いからいじめていただけのようで、安心した。

テナは酒を少し飲むとリイラにも甘え始めた。もちろん最初はドラゴスにばかり甘えていたが、横でリイラが「私なんか気にせずに」などと言って目を潤ませてしまう。だからなるべくテナをリイラに押し付けておいた。するとテナはリイラのほうが抱きつきやすいのか、段々リイラとだけべたべたしていた。

チトクはチトクで「姉ちゃんもやっぱり優しいお姉さんに抱きしめて欲しかったんですよ」とどっかで聞いたことのあるようなフレーズで素面の癖になぜかしんみりと語り始めた。

そうして晚餐は長引き、テナの酔いが醒めるのを待っていたら深夜になったという訳だ。

「皆の衆、心して聞けい」

暗い室内でテナは小さな声で言った。

「今夜は……」

緊張が走る。

「夜逃げじゃー!」

勝利者の如く両手を突き上げたテナは楽しそうだった。

「静かにしないでいいのかよ!」

ドラゴスが問うと同じく楽しそうなチトクが答えた。

「昼間調べたんですけど、まだドスドルマの一件は知られてないの
で全然警戒する必要ないんです」

「なんだ……」

からかわれたことへの怒りより、安堵のほうが大きかった。

リイラもほっとしているだろうと思って振り向くと、リイラも勝利者の如く両手を突き上げていた。

「やつほーい」

リイラはまだ酔いが醒めていなかったのだ。そしてキャラがおかしい。

「どうしたのそんな顔して、私が慰めてあげる……よしよし」

そう言ってリイラはドラゴスの頭を胸に抱き、赤ん坊のようにな
でた。

「あは！ ドラちゃん顔あかーい！」

悪くない心地だったのでついされるがままにしていたが、からかわれて慌ててリイラを突き放した。

「あれ？ そのままちゅっちゅしてもいいんだよ？」

「ば、ばか！」

突き放されたリイラはそのままふらふらとあたりを千鳥足で歩いた。すると倒れそうになったので、ドラゴスはすかさず抱きかかえた。

「私だっこしてあげる……」

「抱かれてるのはお前だよ」

リイラはそのまま眠ってしまった。リイラも酒は飲めるのだが、弱かったのだ。普段ならあまり酩酊することはないが、今日はテナのせいで飲みすぎていた。酔った時の甘えたテナと母性的なリイラがあまりにも相性が良く、酒が進んでしまったのだ。結果、酒に弱いリイラだけがぐでんぐでんになっている今に至る。

「じゃありイラはドラゴスが運んでくれい。荷物はもう荷馬車に積んであるよっ！」

「荷馬車なんかわざわざ用意したのか」

「いつも使ってるやつですよ」

「いつも？」

「使い走りって言ってもチトクくらいの受注量になると移動は荷馬車が基本なのさっ！」

テナは胸を張り、チトクの頭をなでた。

「えへへ、そうなんです」

外に出ると、チトクは隣の一軒家に入って行った。

「お、おい、いいのかよ人の家に勝手に入って」

「あれチトクの事務所だよー」

「……事務所？」

「そ。チトクが率いる使い走り集団の拠点さ」

もはや使い走りのレベルを超越してるじゃないか……

「でも大丈夫なのか？ 急にいなくなつて」

「うん。ちゃんと下の者に話をつけておいたつて言つてたよ」

しばらくしてチトクは建物の裏から幌付き二頭立ての荷馬車を引いて現れた。

「お待たせしました」

質素な作りだが頑丈そうで、長旅にも十分耐えられそうな荷馬車だった。馬も立派である。

とんだ金持ちじゃないか……

ドラゴスは感心とも呆れともつかない、妙な気持ちになった。

全員乗り込むと、チトクは慣れた手つきで馬を扱い、ゆっくりと歩かせた。逃亡劇の割には随分とのんびりした出発であった。

荷馬車の中には椅子もないが、毛布が何枚も用意しており、十分にくつろげそうだった。

テナはてきぱきと毛布を敷き、寝るためのスペースを作った。

「さ、今日はもう寝ちゃいな」

「いいのか？」

「いいっていいって」

テナはドラゴスの背中を押して促した。

「悪いな……」

ドラゴスは抱きかかえたリイラをまず寝かせると、その横に自分も寝転がった。

ドラゴスは無意識のうちにリイラの頭をなでていた。リイラは実に気持ち良さそうな顔で寝ている。

「ねえドラゴス……」

テナには珍しく、細く弱弱しい声だった。

「ん、どうした？」

リイラを起こさないよう、ドラゴスも小さな声で答えた。手はリイラをなで続けていた。

「私も寝ていいかな……」

月が出ているものの、少し下を向いたテナの顔は暗くてよく見えなかった。

「チトクがiiiって言えばいいんじゃないか？」

「そうじゃなくて……」

それ以上は特に何も言わなかった。テナは小窓から一言二言チトクとやり取りしたのち、ドラゴスの脇に寝た。

ドラゴスはリイラの頭をなでていたので、テナには背中を向けた状態だった。テナがドラゴスの服を掴むのを感じた。ドラゴスは仰向けになってテナのほうを向こうとしたが、「このままでいいの」とテナは制した。テナの手はより一層強く服を掴んでいた。だがドラゴスは動けず、何も言えなかった。

そのうちにゆっくりと進む荷馬車の揺れが眠気を誘い、意識は夜に消えていった。

第三章 山麓の村 2

> i 1 1 6 4 6 — 1 6 3 6 <

2

西部首都テグサンドル は出発したテナの町 リーゼ の北東に位置し、西部地方最大の都市である。トルガと合流する予定のザッザル はその西にしばらく行っ たところにあるので、先にテグサンドルへ寄ること自体は問題なかった。

しかし、厄介なのはテグサンドルに着くまでの道のりである。ドラゴスの端村やテナのリーゼは西部地方の中でも南西部にあり、テグサンドルやザッザルのある中心部と完全に分断されている。というのも、間に「ラグレー山脈の小枝」と呼ばれる ラリー山脈 が通っているのだ。ラリー山脈は南西部の北側からラグレー山脈と枝分かれし、南東へ伸びる。それによって西部地区の中心部と南西部は分断されていて、両者を結ぶ道はかなり限られてしまっている。

ただ、ザッザルへ向かう西側ルートは比較的楽である。道は平坦ではないが、山脈を越える必要がない。そこには大トンネルがあり、簡単に通過することが出来るのだ。

逆にテグサンドルの方面へ向かう東側ルートは困難な道のりとなる。山脈に突き当たるまでは平坦なので楽であるが、山脈は自力で越えなければならないのだ。

「ラグレー山脈の小枝」と呼ばれる通り、あまり高い山脈ではないので、荷馬車のままでも山間部の街道を通ることが出来る。問題はラグレー山脈とラリー山脈の尾根が繋がっていることなのである。

つまり、竜との遭遇率が高いのだ。

そのため、商隊などはリスクを恐れて大抵西側ルートを通り、そちらばかりが整備される。また、東側ルートを通るのは個人旅行者が多く、竜討伐のクエストを出す資本家もなかなか現れない。

チトクはこういった事情もよくわかっていたが、ドラゴスの強さなら問題ないと楽観視していた。ドラゴスもチトクがこれらのことを説明する雰囲気から自分が竜に負けることはないのだろうと思った。

だが横で聞いていたリイラは魔界での「強さ」に関してよくわからなかった。

「ドラゴスさんって竜より強いんですか？」

「あたばうよ！ お姉さんもドラゴスほどの『魔力使い』は見たことがないね！」

「そうなんですか。やっぱりドラゴスさんは強いんですねっ！」

リイラが目を輝かせるのでドラゴスは少し照れた。

だがリイラはそこで「魔力使い」という言葉について気になった。魔界でよく聞く言葉だが、実はなんとなくしか意味を理解していなかったのだ。

「あの……『魔力使い』とそうでない人の違いって何なんですか？ 魔界の人はみんな魔力を使えるようですし……」

「そ、それはお姉さんもわからないや」

「俺も知らないな」

「その境界は曖昧ですね……たぶん、戦いに使えるほどの魔力を持っているかどうかじゃないでしょうか」

魔界の人間でも理解はあやふやで、明確な定義はないようだ。

「お姉さんは火を付けたり水を出したり氷を出したり料理に使うようなことしか出来ないし『魔力使い』とは言えないと思うよ。チトクは火花が一瞬出るくらいしか出来ないからもって『魔力使い』とは言えないね。リイラは……ごめん」

「なんで謝るんですか！」

「だって魔力のない人間なんて…… あっ、でもリイラは胸があるからそんなこと気にしないんだよね…… へっ、どうせ私は胸なしだよ…… もう十九だし希望はないよ……」

「ご、ごめんなさい……」

「あ、謝るってことはリイラもやっぱりそう思ってるんだ！ ああそうさ、世の中魔力よりおっぱいのほうが大切だよ！ こんちくしよーっ！」

「そ、そんなことないですよっ。 テナさんだってそれはそれで」

「じゃあドラゴスに触って確かめて」

「だ、だめですっ！」

「どうして？」

「そ、それは……」

リイラは赤くなってもじもじし始めた。 テナはこれが見たかったのだ。

「もぉー！ 冗談だよっ！ りっちゃんかわいいね！」

そう言ってリイラに抱き付き、胸に顔をうずめた。

「あひゃー、たまらん」

リイラもそうされると母性本能がくすぐられるのか、無性になでてあげたくなる。 なんだかんだでこの二人は仲がいいのだ。

そんなやり取りもはや日常だった。 今日で出発してから二週間が経つ。

胸に抱いたテナは、うとうとしていた。 チトクがゆっくりと進める荷馬車の心地良い揺れに加え、よく晴れた午後だったので眠くなってしまったのだろう。 リイラはテナの体勢を優しく変えてやり、膝の上に頭を乗せた。 さっそくよだれを垂らして寝始めたので思わず苦笑し、隣に座るドラゴスと顔を見合わせた。

天気もいいのでその日は幌を外していた。 そのおかげで街道沿いの景色がよく見える。

このあたりはそろそろラリー山脈も近くなり、気候区分も変わり始めていた。 端村やリーゼあたりは乾燥地帯だが、西部地方の大半

が湿潤な気候区分に属する。ラリー山脈によって南西部だけ気候が変わってしまっているのだ。

したがってラリー山脈に近づくにつれ湿度が増し、緑も多くなる。まだ山脈の手前なので湿潤地帯と言えるほどではないが、それでも砂地や岩山はあまり見られなくなった。農地も畑だけだったのが、水田も見られ始めた。

だがリイラが一番変化を感じたのは匂いである。南西部と違い、風に混じるのは砂埃の匂いではなく、周囲の森の湿気を含んだ柔らかな匂いなのだ。それは故郷日本で慣れ親しんだ匂いでもあり、心地良かった。

「村にいた時は風が吹けば戸を閉めたけど、ここらの風は気持ちいいな」

ドラゴスもリイラと同じように感じていた。風がドラゴスの前髪を揺らすと、ドラゴスは気持ち良さそうに目を細めた。

「ええ……」

お互いに同じように感じていることは不思議とわかっていたので、返事はそれだけで十分だった。ドラゴスはリイラが眠くなっているのも察したようで、頭をすつとなでてから肩を抱き、寄りかかるように促した。リイラは少し躊躇したが、甘えることにした。そうして心地良い風と温もりに包まれ、午後の眠りに落ちていった。

それからさらに何日かすると、もうラリー山脈のすぐふもとまで来た。周囲の景色はより一層緑の深さが増していて、平らな土地も減ってきているので農地も少なかった。

目の前には当然ラリー山脈が立ちはだかる。高くはないとは言え、十分な圧迫感を持ってそこに存在していた。

「今日はあの向こうに見える ジュク という村に泊まります。今までは必ず泊まる場所を確保出来ましたが、 ジュク を最後にあ

とは野営ですので、しっかりと体を休めてください」

チトクが指差す方向には小さな集落があった。そこは街道からは随分と離れていて、今まで立ち寄ったような宿場町とは雰囲気違っていた。チトクはそこで何日か過ごしたのち、ラリー山脈入りをすると説明した。

晴れやかな空の下、集落を取り囲むようにして水田が広がり、日差しをきらきらとはね返す。水田の一つ一つは小さいが、斜面を工夫して切り拓き、様々な形の田んぼがパズルのピースのように連なる。その曲がりくねった畦道あぜみちには、駆けずり回る子供たちや農作業に勤しむ者がちらほらと目に入った。

リイラは大きく息を吸い込んでみた。すると木々の香りと土の香りが周囲の風景と相まって、郷愁の念を抱かせた。田んぼに引かれた山の清水も、水の豊富な日本を連想させる。

集落に入る少し手前には二本の柱が立っており、村の門のような印象を受けた。柱はトルガの腕でも回らないであろうほどの立派な丸太で、くまなく装飾が彫り込まれている。恐らくこの集落は街道が出来てから開拓されたのではなく、古いにしえの時代からそこにあった土着の集落なのだ。

幌を外した荷馬車がのんびりとその門を通過しようとした時、一人の少年が飛び出してきた。少年は十二、三歳に見える。切羽詰った表情で、ドラゴス一行を気にも留めず、黒髪をなびかせながら横を走り抜けた。

「捕まえてくれ！」

そう叫びながら小柄な男も飛び出してきた。髪には白髪が混じり、五十過ぎの初老に見えた。

「こいつか？」

ドラゴスが少年を指差して確かめると、初老の男は「そ、そうだ！」と息を切らしながら答えた。

「なら……」

と言ってドラゴスが踏ん張ったかと思うと、次の瞬間には少年の

前に立ちはだかった。

「うわぁ！」

「こら、逃げんな！」

慌ててきびすを返す少年を腕をドラゴスは掴んだが、少年は激しく抵抗した。

「やなこつた！」

「暴れるな馬鹿野郎っ！」

ドラゴスが思い切りげん骨を食らわすと、少年は瞬く間に昏倒した。

「つたく、盗みでも働いたのか？ この悪ガキめ」

少年の首根っこを掴んでドラゴスがそう言っていると、リイラはくすくすと笑った。まるで三年前に初めて見かけた時のドラゴスを今のドラゴスが捕まえているようで、とても滑稽に見えたのだ。

「ん？ どうしたんだ？」

「ちょっと昔を思い出ただけですっ」

リイラは楽しそうに笑った。ドラゴスは訳がわからず、ちょっとむすっとした。

「おお助かった……ありがとう！」

初老の男が遅れて駆け寄ってきたので、ドラゴスは少年を引き渡した。

「旅の方かい？」

「ああ。ちょっとこの村に泊めさせてもらおうと思ってな」

「そうか！ なら案内しよう」

そう言って男はてきぱきとドラゴス一行を村の奥へと導いた。

「泊まるのは別の場所を用意するが、とりあえずうちで茶でも飲みな」

男はドラゴスたちを自宅に招いた。荷馬車を引くチトクは男が呼

んだ他の者に連れられ、別の場所へ向かった。

小さな集落の割に、その男の家は大きかった。男はこの村の村長であつた。

「なに、村長だから家が大きいって訳じゃないさ。暮らす人間が多いから改築の度に広くしたんだ」

お茶を運んで来た村長がそう話す間も、広い家の中を小さな子供が何人も走っているのが見えた。

「見かけによらず絶倫なんだねっ！」

「こらテナ！」

無遠慮な言葉だがテナは無邪気だつた。

「いやいや、違うんだ。私は見かけ通りに精力が弱くて夜はいつも

」

「あんたも答えなくていいよ！」

夜はいつも何なのか少し気になったがここは制した。この場にはリイラだっているのだ。

「まあとにかく、この家で暮らしている子供たちはみんな私の子供じゃないんだよ。ここらは山での……『事故』が多く、かろうじて生き残つた子供だけが発見されることがたまにあるんだ。そういつた孤児みなしこが自立出来るまでここで育てているのさ」

「見かけによらず優しいんだねっ！」

「こら！」

「ははっ。でも育てる時はもちろん頑固親父だな」

この面倒見のいい村長は責任感も強そうで、確かに厳しく育てていそうだった。

「あの悪ガキはクフィーといってな、あいつもそんな孤児の一人だ」
村長は目をやった先には、さっき捕まえた少年が気を失つたまま寝かされている。

「あいつ……クフィーは何をやつたんだ？」

村長は急に深刻な表情となった。苦しみを耐えている顔にも見えた。

「死に行こうとしたのさ……」

予想外の重い言葉に、ドラゴスたちは何も言葉を出せずにいた。にわかに緊張が張り詰めていく。

「実はこの村に竜が来てな……この家で暮らす少女の一人をさらっていつてしまったんだ……」

ドラゴスは部屋の温度が、ぐっと下がったように感じた。

「ここらはそういうことの起こる土地なんだ……それでクフィーは少女を助けに行こうとしたのさ……」

「止めて……よかったのか？」

「ああ。村に来た竜は『銀竜』という希少種でな、人間が勝てるような竜じゃない。それにその少女も助かりはしないだろう……失うのは一つでいいんだ……」

村長はあまり具体的なことは言いたくなさそうだった。ここで生活をともしていた者が一人犠牲になったのだから、それも仕方ないかもしれない。だが、ドラゴスはどうも靄のかかったような、変な感じがしていた。

「いや、すまない。せつかくのお客さんにこんな話をしてしまったて……なに、心配しなさるな。もう竜が来ることはないはずだ……さて、泊まるところを案内しようか」

村長はそう言って立ち上がると、てきばきとドラゴスたちを宿泊先へと導いた。

宿泊先は村長の家からやや離れたところにあるちよつとした平屋の一軒で、いつも来客用に使っているという。大きな家ではないが、四人が泊まるには十分な広さだった。小さな集落なのでこうやってもてなして人との繋がりを持つことが重要なんだと村長は言った。

「じゃあ、ゆつくりしていつてくれたまえ。何かあったら気兼ねなく村人に言つといい。夜までにはベッドを四つ運び込んでおくよ」

村長は手短に説明をした後、すぐに背を向けて自宅へ戻ろうとした。それをドラゴスが引き止めた。

「クフィーはどうなるんだ？」

「起きたらまた家を飛び出すかもしれないな……縛り付けてでも止めるよ」

「そうするしかないか……」

そこで村長とドラゴスたちは別れた。

チトクはどこかへ馬小屋を借りにでも行っているのだろう。外に荷車だけが置いてあった。中に引き入れるには大きすぎるが荷物を野ざらしにする訳にはいかないので、三人で協力してささっと幌を張っておいた。そうして家の中へ入った。

室内はちゃんと掃除が行き届いていて、非常に清潔に保たれていた。戸を閉めると三人だけの空間となり、そこでようやく緊張が解けた。

「ふいー、何か疲れたなー」

「親切ですけど、何だか物騒な村ですね……」

「まあ大丈夫！ ドラゴスがいるからねっ！」

「お、おう……」

ドラゴスは心に引っかけりを感じていた。それが何なのかはわからない。だが間違いなく、この村をほの暗い靄のようなものが覆っている。そう思った。

「おかしいですね……」

ドラゴスは遅れてやってきたチトクに村長から聞いたことを話した。するとチトクも不審に思っただけだった。

「村に『銀竜』が来て少女が一人さらわれただけで済むとは思えません。人は逃げるのが出来ますからそれだけの被害で済むかもしれませんが、家畜や建物や農作物は竜が来たからといって逃げられません。なのに村に荒らされた感じも全然ないですし……」

チトクはそこまで言うと、少し暗い顔をした。何か気付いたのかもしれない。だがドラゴスはまず『銀竜』について気になった。

「銀竜つてのはそんなに強いのか？」

「ええ。希少種なんでよくわからない部分が多いんですけど、竜の中でも屈指の強さです。魔力はほとんどありませんが、力が強く、その鋼より固い鱗はどんな剣でも貫けないと言われています。人が勝てるような竜ではないでしょう」

「へえー。それだけ聞くと俺より強そうだな」

ドラゴスは感心しながらも少し悔しく思った。

「たぶん……ドラゴスさんでも勝つことは難しいでしょうね……」

チトクが言いづらそうに告げると、横からテナが飛び込んできた。
「じゃあこも危ないじゃん！ ドラちゃん使えなーい」

テナはドラゴスを見下すような目付きで言い放った。

「う、うるさいちびっ子！ やってみなきゃわかんないだろ！ このっ！」

ドラゴスはテナのわき腹をくすぐって押し倒した。

「あひやひやひやひや！」

思った以上にテナはくすぐりに弱いようで、顔が真っ赤になるほど大笑いした。ちょっとだけ懲らしめるつもりだったのにやりすぎたように感じたので、ドラゴスは手を止めた。

「うう……」

すると笑いを止めたテナは頬を染めたまま、笑い涙で潤んだ碧眼を向けた。ドラゴスは仰向けのテナに覆いかぶさるような体勢でそんな顔をされたので少し照れてしまった。テナはそれをすかさず茶化す。

「リイラが見ているのに……大胆！」

「ばかっ！」

ドラゴスは再びくすぐり始めた。

「リイラも来い！ いつもの仕返しをしてやれ！」

さすがに最初はリイラも遠慮がちだったが、次第に本気でくすぐり始めた。しかもリイラのほうが女の体を知っているせいか、くすぐりが上手かった。テナの笑いはもはや悶絶と言っていいほどに激

しくなる。

「うひゃひゃひゃひゃ！ リイラはだめだ！ リイラだけはだめだ！ 死ぬ！ 死ぬ！ あっ」

なんだか本当に死んでしまいそうだったのでそこでやめておいた。テナは汗だくなつて息を切らし、力なく倒れていた。

「りっちゃん許さない……」

天真爛漫なテナの性格に似合わない怨嗟の声が漏れた。

「あーすつきりした。いつも人をからかってばかりのテナが悪いんだ。……あれ？ 何の話でこうなつたんだっけ？」

「銀竜が強いつて話です」

「そうだそうだ。俺でも勝てなさそうならテナが言つたようにここも危険だな」

「大丈夫だと思いますよ」

チトクは確信のありそうな顔だつた。

「銀竜は恐ろしく強いのですが、飛べないんです。それに走るのも得意じゃないと言われています。だからドラゴスさんの移動能力でささつと僕らを避難させてくれれば簡単に逃げられますよ」

「そうなのか。……それにしてもお前は物知りで本当に役に立つなあ」

ドラゴスが褒めるとチトクは照れたが、すぐに真面目な顔になつて続けた。

「あと……村長さんはもう竜は来ないって言つたんですよ？」

「ああ。でもそれって俺たちを安心させるためにとりあえず言つておいただけなんじゃないか？」

「ええもちろん、そう捉えることも出来ます。でも……本当に竜が来ないことを知っていたとしたら……」

ドラゴスは固唾を呑んで聞き入った。

「考えられる可能性は二つあります。一つは少女がいなくなったことを竜のせいにしたという可能性です。だとすると村で何か事故があつたのかもしれない」

「なるほど。でっち上げで隠さなければならぬ何か、ってことか……」

少女に起こった凄惨な事故……もしくは事件と言うべきものか……やはりドラゴスにはこの村が何か暗いものを隠しているとしたか思えなかった。

「ええ。でも、そうなると『銀竜』と言ったのが引っかけります。でっち上げにしては具体的ですし、銀竜なんて希少種の情報だとかえって噂が広まってしまう。たぶん都会では今だって銀竜捕獲のクエストが出されているでしょうし。何せ希少種ですからね……」

「なににせよ事情はかなり複雑そうだな」

ドラゴスが言い終わると、屋内の静けさも不気味に思えてきた。

「もう一つの可能性はなんですか？」

ドラゴスと一緒にチトクの話をしつと聞いていたリイラが尋ねた。

「もう一つのほうはシンプルです。少女をさらった竜が『もう来ない』と言った可能性です」

その一言で一気に場の緊張が高まった。

「それって……」

「そうです。『自我竜』が来たということです」

「自我竜」とは自我を持ち言葉を話す竜である。種にもよるが、野生の生き物もおよそ百年生きると自我を持ち、言葉を話すと言われている。それらの総称を「自我獣」と言い、その中でも竜は「自我竜」と呼ばれる。

大抵の自我獣は少なくとも百年もの間、老いることなく育ち続けるため、同種の平均的な大きさを遥かに超える巨体である。もし仮に自我獣化している銀竜ならば、その強さは計り知れない。

「でも銀竜でなおかつ自我竜なら村が荒れていないのが余計不自然じゃないか？」

「ええ確かに……とにかく今は情報が少なすぎますし何も断定は出来ません。やたらと心配しても仕方ないですし、今はゆっくりしましょう」

「ああ……」

そうは言ったものの、誰も緊張を解くことが出来ずにいた。ドラゴスは念のため他の者に言った。

「みんな……今日はなるべく個人行動はしないでくれ。むやみに村人に情報を聞いたりもするなよ」

一同無言で頷いた。

「でも、村の人がベッドを運んでくる時に何か聞いておいたほうが……」

チトクが提案した。

「そうだな……そうしよう」

ドラゴスが答えると、そこで家の中は沈黙に支配された。テナはチトクの手を握り、リイラも怯えた様子であった。ドラゴスはそんなリイラの頭をすつとなでてやり、手を握った。しかし、誰も不安を拭い去ることは出来なかった。

それからしばらくすると、しんと静まり返った室内に突然戸を強く叩く音が響いた。一同思わず身をすくめた。

ドラゴスはリイラを抱き寄せ、リイラもドラゴスにしがみ付いた。もう一度戸が叩かれたのち、女性の声が聞こえた。

「あれ、いないのかい？」

そう言つて乱暴に戸が開けられた。そこにいたのは太った中年女性だった。

「マリールさん！」

チトクがその女性の名を呼んだようだった。

「なんだい、ちゃんというじゃないか」

「す、すみません」

チトクは先ほど馬小屋を貸してくれたのがこのマリールというおばさんだと説明した。

「君がドラゴスくんか。はっは！ いい体してるじゃないの！」

マリールはドラゴスの体をバシバシと叩いた。どうやらマリールはがさつな性格のようだった。

「ほら、ベッド持ってきたよ」

外には若い男たちがベッドを運んできていた。すぐに中に引き入れ、一同でお礼を言った。

「チトク、中にいたのに一体どうして返事もなくにしまかったんだい？」

「いや、それは……」

チトクが言いにくそうにしていると、ドラゴスはここで思い切つて聞いてみようと思った。

「それは竜が来たつて聞いたからみんな怯えてたんだ」

ドラゴスはあえて暢気な調子で言った。

「やだねあんた、案外臆病じゃないの。まったく、男はもつと堂々としてなきや。そんなんじやその彼女も愛想つかしちゃうよ？」

無意識のうちにドラゴスに寄り添っていたリイラが顔を赤くしてうつむいた。

「え、あ、いや彼女というより」

「とにかく、竜なんか来やしないんだからドンと構えてな。あと、その様子じゃ話を聞いてるんだろうけど、村長の前でそんな話をしちゃだめだからね。あんたらも不安かもしれないけど、クドウナのこととは村長だつてつらいんだよ」

「『クドウナ』？」

知らない名が出てきたので思わずドラゴスは聞き返した。

「名前は聞いてなかったのかい？ 竜に持ってかれた村長の一人娘だよ」

「村長の一人娘！？」

おぼろげながら、村長が多くを語りたがらない理由が見えてきたが、それでもまだ情報が足りない。

「おや、村長も言つてなかったのかな？ そりゃあまあ仕方ないか

……」

ドラゴスはさらに突っ込んだことを聞いてみた。

「どうして竜が来ないってわかるんだ？ そいつは自我竜だったのか？」

ドラゴスが尋ねると、マリールは途端に慌てだした。

「それは……あ、あたしに聞くんじゃないよっ！　だ、けど他の人にも聞いちゃだめだからねっ！　いい？　村のことにはあんまり首突っ込んじゃだめ！　お客なんだからゆっくりしてなさい！」

こちらが相槌を打つ暇もなく矢継ぎ早にしゃべると、マリールは逃げるようにして去っていった。

ベッドが運び込まれて少し狭く感じるようになった室内では、再び重い空気が戻ってきた。日も傾き始め、室内はやや薄暗くなっていた。

「本当はあの家で村長の子供も暮らしてたんだね……」

テナの声には憐憫が込められていた。

「そうみたいだな……でも、『クドウナ』っていう一人娘を竜にさらわれた悲しみがあってあえて言わなかったのもあるだろうけど、それだけじゃない気がするんだ」

ドラゴスも村長に同情はするが、どうも腑に落ちないのだ。

「僕もそう思います。マリールさんの反応を見る限り、やっぱり『来ない』というのがわかっていて、なおかつ自我竜だったんだと思います」

「だよな……」

低い位置まで落ちてきた太陽が何かに隠れたのだろう。にわかに射し込む光が少なくなり、室内が暗くなった。

そこでチトクが恐る恐る口を開いた。

「あ、あの……村長にはこんなに良くしてもらっておいて、こ、こんなことは言いたくないんですけど……」

「どうした。落ち着いてからでいいぞ」

ドラゴスが背中をそっとさするとチトクはぼろぼろと言葉を紡い

だ。

「……………すごく……恐ろしい考えなんです……こう考えると全部……辻褃が合つんです……………」

チトクは意を決したように言った。

「村長は自我竜に一人娘を……………」

しかし、そこで場の空気を一変させる絶叫が響いた。

「助けて！……………旅の人！ 助けて！」

ドラゴスがすぐさま外に出ると、少し離れたところに例の少年、クフィーがうつ伏せに倒れていた。

「大丈夫か！」

クフィーは後ろ手に縛られている状態で転んだため、地面に顔を打ちつけたようだった。ドラゴスに声を掛けられて顔を上げると、額を擦りむいていた。そして前歯が折れていて、おびただしい血が衣服に染みている。だがその血で最も濡れているのは足であり、どうやら転んだせいで歯が折れたのではないようだった。裸足の足首には縄が擦れた跡があった。

「お前……歯が折れるほど噛み続けて縄を千切ったのか！」

「……………お願い！ 助けて！」

「ああ今助けてやるよ！」

そう言つてドラゴスは手の縄を解いてやろうとした。

「違う！ 俺じゃない！ クドウナを助けて！」

血を流し続ける口からは悲痛な声が発せられる。

「どういうことだ！ 説明しろ！」

ドラゴスも切迫した様子で問いただす。

「早くしないと夜になつちゃうよ！ クドウナが！」

「クドウナが何なんだ！」

「クドウナは……………生け贄なんだよ！」

生け贄。

つまりクドウナは村長の意思で……………

「やっぱり……………」

チトクは顔をゆがめた。

クフィーを追ってきた村長がそこで姿を現した。

「おい、捕まえてくれ！　せつかく縛ったのに逃げてしまったんだ」

走ってきた村長はドラゴスとクフィーの前に来ると、膝に手をつけて肩を上下させた。

「いやあまた迷惑をかけたね……」

村長は申し訳なさそうに頭を掻いた。

「おい……一人娘のクドウナが生け贄ってどういうことだよ」

ドラゴスは極力静かな調子で言った。

しかし村長はドラゴスとは向き合わず、クフィーを叱った。

「おいクフィー話したのか！」

「答えてくれよ」

ドラゴスは自分でも声が怒りに震えているのがわかった。自分の中の火薬のようなものに火が付いてしまいそうに感じた。

「そ、それは……」

村長は言葉に詰った。

「もしかして……あんたは自分の娘を使って自我竜と取引したのか？」

村長は何も答えない。だが、その沈黙は十分に答えだった。ドラ

ゴスは怒声をとどろかせた。

「どうなんだ！」

燃えるような目していた。

そのドラゴスの目を見ずに、村長は答える。

「……ああそうだ」

村長は拳を強く握り締め、必死に耐えるような表情を見せる。ドラゴスも殴りたい気持ちを必死に抑えていた。しかし、全身が血が熱くたぎるように感じるとともに、爆発した。

「それが人のすることかよ！」

叩き付けた拳によって、地面がえぐれた。

「お前は親なんだろ！」

ドラゴスは全ての怒りを声に込めていた。なぜだかわからないが、どうしても許せなかった。

「どうして村を襲ってきた竜にクドウナを売ったんだ！ 村の安全のためか？ 竜が『もう来ない』って言ったってどこにそんな保障があるんだよ！ なんてそんなことで自分の子供を捨てたんだ！」

ドラゴスの目はより一層燃え盛る。しかし、村長は睨み返した。
「私だってつらいんだ！」

全身に力が入り、震えていた。

「一人娘を竜にやって平気な親なんかいる訳ないだろう！ でもこの村に暮らすのは私たちだけじゃない！ 他の村人だって平等だ。我が子のために他の家の娘を犠牲にする訳にはいかないんだ！ だから私が村長として！ 自分の子供を犠牲にするしかないだろう！」

村長の顔が悲痛にゆがむ。

「ふざけんな！」

やはりドラゴスは我慢できず、村長を殴った。懸命に力を抑えたつもりだったが、村長は後ろへ転げた。

「誰を犠牲にだとか、そんなことじゃないだろ！」

すぐさま起き上がった村長はドラゴスの胸ぐらを掴んだ。

「他にどうしようもないだろうが！」

村長も憤怒の形相で食らい付いた。ドラゴスもさらに強く睨みつけ、両者の怒号が絡み合う。

「だからってあきらめんのか！ 娘を捨てんのか！ 道を探せよ！ 願えよ！ 娘の幸せを！」

「願ってるさ！ 代われるなら代わってやりたいよ！」

「そこまで思うなら他の方法だってあっただろ！ 逃げるなり何なり出来たはずだろ！」

「村を捨てて逃げることなんか出来るわけないだろう！ 私は村長なんだ！」

「馬鹿野郎！」

ドラゴスは再び手を上げた。

「村長である前に、あんたは父親だろ！」

殴り飛ばされて這いつくばった村長が顔を上げた。

「だが」

「クドウナはあんたを何だと思ってたんだ？　まず村長か？　違うだろ！　たった一人の父親だろうが！」

村長は大きく目を見開き、恐ろしいものを見てしまったような表情になった。村長は気が付いたのだ。

自分が最後まで、クドウナに村長として接していたことを……
クドウナを「村長の娘」として扱っていたことを……

父親としての一言すら、クドウナに与えなかったことを……
「自分の娘」に対して、最後に愛していると伝えなかったことを！

そして顔を伏せた。額を地面に押し付け、泣いていた。

「……クドウナ！　すまない……私は父親失格だ……お前は『村長の娘』じゃないのに！　『私の娘』なのに！　クドウナ……ああ……私は取り返しの付かないことをしてしまった！」

村長は地面を掻きむしりながらとめどなく頬を濡らした。

「馬鹿野郎！　なんであきらめてんだよ！」

ドラゴスはそう叱咤して村長の襟を掴んで引っ張り起こし、叫んだ。

「まだ生きてるんだろ？　ここであきらめたら捨てたのと同じじゃねえか！　抗ってみせろよ！　運命に！」

「……どうすればいいんだ！」

村長はすがりような目付きで泣き叫んだ。

「俺が……助ける！」

ドラゴスは射抜くような目で、声高に宣言した。

「クフィー、場所はわかるのか？」

「ああ、だから早く！」

クフィーの縄を解くと、ドラゴスは言った。

「最後に一つだけいいか……村長、あんたの願いは何だ！」

「願い……」

村長にもう迷いはなかった。

「私の願いは、クドウナが生きて……幸せになることだ！」

涙と土にまみれた顔が、切なる願いを發した。

「だから……助けてくれ！ 私のたった一人の娘を助けてくれ！
頼む！」

そこにいたのは「村長」ではなく、一人の父親だった。

「そのクエスト！ 乗ったあ！」

そう叫ぶとドラゴスはすぐにクフィーを抱きかかえ、飛ぶように走り出した。そしてあつという間に、夕闇が覆う山奥に消えていった。

第三章 山麓の村 3の1

3

石造りの祭壇は冷たい。およそ十メートル四方の祭壇はちよつとした舞台のようで、周囲より大人一人分くらい高くなっている。クドウナはその中心にぽつんと座っていた。ちようど日が落ちて夜になった頃だった。祭壇の四隅に立てられた松明^{たいまつ}にも火がつけられ、そこに村の大人が一人ずつ立っている。

舞台の中心にいるクドウナは、これからどんなストーリーを迎えるのかを知らない。ただわかつているのは、その結末が悲劇だということだけだ。「どうして自分が」などとは思わない。自分の意思で、悲劇の主役となったのだ。

そこは村から一時間ほど歩いたところにある祭壇で、山の奥の深い場所にある。いつ作られたのか、何のために作られたのかは不明だ。恐らく祭壇であろうそれは、とにかく昔からそこにあつたのだ。村から遠いのでほとんど使われることもなく、後世には「祭壇」という呼び名も失われてしまふかもしれない。クドウナはそんなことをふと思った。

生け贄のクドウナにはもう残された時間などない。銀竜と約束した夜がもう来てしまつているのだ。いつこの悲劇の結末が訪れてもおかしくはないだろう。しかし、動揺する訳でもない。クドウナは不思議と何も思わなかった。むしろ心は空っぽで、今までの人生で泣いたり笑ったりしていたのも虚構の中の出来事であつたような気がしてしまう。祭壇の冷たさすら感じなくなつてきていた。

ぼんやりとしながら闇に浮かぶ松明の炎を見てみると、ますます思考が鈍くなる。しかし不思議なことに記憶が次々とよみがえり、

頭の中を満たしていく。クドウナはそこに手を伸ばしてしまった。考える力も失いつつあるクドウナはただ過去を眺めているだけの人でない何かになりかけていた。

母親が死んだ時、クドウナは六歳だった。実感は湧かないものの「死」というものは既に理解していたので、もう二度と母親に会えないということがわかっていた。

だからこそ、泣いた。「死」はそれ自体が悲しいのではなく、死んで会えなくなるから悲しいのだと学んだ。クドウナは聡明な子だった。もしかしたらクドウナの死生観はその時に形成され、今に至る決断をさせたのかもしれない。

クドウナは元気な女の子であったが、母親が死んでからはふさぎ込むことが多く、よく泣いた。記憶を失った訳ではないが、言葉はほとんど発しなくなった。以前は年の割に随分と利発な子供であったのに、急に赤ん坊のように幼くなってしまったのだ。村長はそれでも愛情を持って育てていたが、村人には「クドウナはもう駄目かもしれないから」と真剣な顔で村長に助言する者もあった。

半年が経つてもクドウナは成長しなかった。体が大きくなってよく食べるようになっただけで、意思疎通もままならない。村長の家でなく他の家の子供であつたら、間違いなく食い扶持を減らすために間引かれていただろう。

そんなある日、山で「事故」があつた。恐らく竜の仕業だろうが、山間部を通る街道で商隊が壊滅していた。食料品、特に肉類をふんだんに積んだ商隊であつた。普段ならそんなものを積んで竜が縄張りになっている可能性が高い場所を抜けようとする者などいない。だがそのぶん高く売れるので、その商隊は悪い商会にでもそのかされたのか、賭けに出してしまったのだろう。あるいは破産寸前の商人一家だったのかもしれない。詳しいことはわからない。何しろ商隊

は護衛も含めて全員消えていたのだ。そこにあつたのは血と壊れた荷車、そして肉類の買い取り証書だけである。だから経緯はわからないのだ。だがその商隊の結末は明らかだった。竜かそれに準ずる獣に人も馬も積荷も食われたのだ。

ところが一人だけ生き残った者がいた。五歳前後の子供だった。

「事故」現場の近くで奇跡的に無傷の状態で見え、村に連れてこられた。連れてきた村人は親切心から拾ったようだが家計に余裕があるようではなかった。村長が引き取ることにした。他人の子供を育てた経験などないが、せめてその子供が自立出来るようになるまでは責任を持って育てようと決めた。

その子供は「事故」のことを何も覚えていなかった。それどころか全ての記憶を失っていたようだった。言葉も話せず、まるで赤ん坊のようだった。その様子からも、村長は自分の家しか受け入れられる場所はないと思った。

子供は男の子で、村長は「クフィー」と名付けた。クドウナの弟として育てることにした。二人とも黒髪で肌の色もほとんど変わらないので本当の姉弟のようにも見えた。

村長はたった一人で問題を抱えた二人を育てなければならないので、相当骨が折れるのを覚悟した。

ところが、予想とは違ったことが起こった。赤ん坊のようであつたはずのクドウナが、同じく赤ん坊のようなクフィーに対し、母親の如く振舞いだしたのだ。クフィーに出ない乳を吸わせ、あやし、寝かしつけていた。恐らくそれは失った母を求めるせいで発現した一種の病的なものであるが、クドウナはそれによって言葉も思考も取り戻していった。だが以前のクドウナに戻ったというより、別の人間として成長したという感じであつた。

クドウナが年相応の知能を獲得すると、クフィーの知能も飛躍的に向上した。記憶が戻ったわけではないしクドウナほどの急変ではなかったが、驚くべき速さの成長を見せた。

数年が経つと、二人の関係はまさに姉と弟であつた。クドウナは

もう病的な母親ではなくなり、クフィーも赤ん坊ではなくなっていた。知能はむしろ同年代の子供たちより上回るほどで、クドウナに至っては知性と言うべきものすら時折垣間見える。

二人はいつも寄り添って生きてきた。村長には二人が人格を共有しているかのようにも見えた。事実、二人は互いの存在によって失われた人格を再形成したのだ。そこには「絆」なんていうものを超えた、もつと深いところで繋がった何かがあった。たとえクドウナの実父である村長でも、そこには入っていけないようにも思えた。

こうして育った二人だが、その関係はいつしか対等なものとなり、ここところは姉と弟というより恋人のようになってきた。実際、二人は村長に「いつか絶対に結婚する」とも言ったこともあった。クドウナとクフィーは十四歳と十三歳である。村長はまだそんなことを考える時期じゃないと二人には言ったものの、そうなるのが一番いいと思った。

だがそんな二人の物語も突然途絶えてしまうこととなった。例の銀竜がやってきたせいだ。

それは朝の早い時間だった。銀竜は村の外れにやってくるなり、発見した村人を襲うのではなく、話しかけた。銀竜は交渉を求めたのだった。

「村を襲われなくなったら生娘をよこせ」

銀竜は地を震わすような低い声で、駆けつけた村長に言った。

「生娘！？ 穀物じゃだめか？」

「駄目だ」

「じゃあ肉類は？ 生きた牛や馬を何頭か用意しよう！」

「生娘だ」

「どうしてもか」

「ああ」

村を襲われたら何人も死ぬ。家だって壊される。被害を最小限にするにはやはり条件を飲むしかないだろう。たとえこれから何度もこういうことが起こるとしても、村を襲われたら一度で全てを失う。だから仕方がないのだ。村長はそう考えた。

「……わかった。用意しよう」

苦い顔をしながら村長は承諾した。

「村長！ それは酷いんじゃないか！」

村長を責める声がいくつか飛び交った。野次馬が下手に竜を刺激しないようにするため、竜が来たことは秘密にしてあったが、それでも辺りには村人が集まって来ていたのだ。

「他に村を守る方法があるのか！」

村長が一喝すると、騒ぎ始めた野次馬も途端に静かになった。

「は、は、は。物分りのいい男だ。では今日の夜までに」

「待ってくれ！ せめて三日後に出来ないか！？」

「遅い」

「じゃあ明日！ 明日の夜でどうか！？」

「仕方ない……物分りのいいお前に免じて、今日の夜なら生娘は一人だけでいい」

「くっ……なら……今日で頼む。……場所は祭壇でいいか」

「祭壇？」

「ここよりも山の奥にある石造りの舞台だ」

「あそこか……そのほうがここより近くていいな。じゃあ夜までに必ず生娘を連れて来い」

「ああ……」

銀竜はそうして村を全く荒らさずに帰っていった。

皆、無言だった。発言にともなう責任が大きすぎて、誰も口を出せなかった。しかし、考えていることは皆同じだった。

誰を生け贄にするのか。

沈黙は長かった。

すると、静寂を破る一声が凜と響いた。

「私が行く」

集まった村人をかき分けて村長の前に現れたのは、クドウナだった。

「クドウナ！ 付いてくるなと言っただろう！」

「ごめんなさい……でも私も役に立ちたかったの！」

村長は狼狽しながらもクドウナを諭そうとした。

「お前は家に帰ってなさい。この問題はこれから大人たちで話し合うから……」

「その必要はないわ。私が行く」

クドウナはまっすぐな眼差しをしていた。

「クドウナ！ どうしてだ！？」

村長の顔は悲しみに崩れる。

「誰かが行かなくちゃならない。でも誰だって行きたくない。だからこそ、他の人に押し付ける訳には行かないの。私は村長の娘よ。私が責任を持って行くわ」

毅然とした態度であった。

周囲の者は顔を伏せ、目を合わせない。だが村長は無言のうちに、村人たちの期待を感じていた。そして、クドウナが自主的に名乗り出た以上、後には退けないこともわかっていた。

銀竜と交渉したのは村長だ。全滅の可能性より一人の生け贄を選んだのも村長だ。決断には責任が伴う。村長として、ここは腹をくくるしかない。そう思った。

「クドウナ……村長の娘として……この村を守るために……行ってくれないか……」

「もちろんよ！ 村長の娘として私がこの村を守ってみせるわ」

クドウナは堂々と胸を張った。村人たちは申し訳なさそうな顔をしつつも、尊敬の眼差しをクドウナと村長に向けていた。

クドウナは間を置かずに、祭司に連れられて祭壇へと向かった。

そうして事情を知らぬ村人には「クドウナが竜にさらわれて食われた」とだけ伝えられ、交渉のことは秘密とされた。

クフィーはそれを聞いて放心状態となった。クドウナとは体の一部を共有しているかのように思っていたのだ。クドウナの死という情報を受け入れるに従い、心が壊れ始めた。

その様子を見た村長はやはりクフィーには真実を話すべきだと感じ、ありのままを話した。するとクフィーは目に輝きを取り戻した。家が飛び出し、祭壇を目指して駆け出した。だがドラゴスの協力で捉えられてしまい、縄で縛られたのだった。

銀竜が来てから、クドウナはクフィーと会っていない。会おうともしなかった。会ってしまったら、別れがつかなくなるのだ。だから既に別れてしまっている状態を維持しようとした。それに、決意が揺らぐことも恐れていた。

そうして一日中、クドウナは祭壇に座らされていた。ずっとぼんやりしていたのだが、夜になる頃には心が虚ろになっていた。

自分という泉の奥底に沈んでいくような感じであった。風に揺れる木々の音も、松明の灯りも、水の外から中へ伝わってくるようだ。その中でただ、過去の記憶を眺めていた。「人」というにはあまりにも、感情のない存在となっていた。

しかし、何かが聞こえた。水の外から誰かが呼ぶのだ。次第にその声は鮮明となる。

ああ、ばかだなあ……

まずは呆れた。

どうして来ちゃったの……

でも、溢れ出る愛しさが止まらない。

会いたかった……

クドウナを水没させていた水が引き、目の前に世界がひらける！

「クフィー！」

「クドウナ！」

たった一度の視線で、千の愛しさが交わる。

クフィーはクドウナの知らない青年に担がれていた。

「こら！ 来ては行けないはずだぞ！」

祭壇の周りにいた大人四人が詰め寄った。

青年はクフィーを下ろすと言った。

「悪いな」

すると瞬く間に四人を気絶させた。

「お前がクドウナか？」

青年が問うと、クドウナはこくりと頷いた。

「あ、あなたは誰？」

クドウナは警戒しているようだった。

「俺か？ 俺はドラゴス。お前たちの願いを叶えに来た男だ」

「願い……」

ドラゴスとクフィーは祭壇に上った。クドウナはクフィーのほうも見やると、唇を噛み締めた。それを見てクフィーが聞いた。

「どうした？」

「……帰って」

「え？」

「帰ってって言うてるの！」

ドラゴスとクフィーは顔を見合わせた。そこにクドウナの怒声が割って入る。

「私が生け贄にならないと村がどうなるかわかってるの？ それとも私じゃだめで他の子が生け贄になるのはいいっていつの？」

「でも！」

クフィーとドラゴスが近づくと、クドウナは逃げ、距離をとった。

「私は村を救うのよ！ どうしてそれを台無しにしようとするの！」
すると地鳴りのような音が響き始めた。しかしそれは声だった。

「は、は、は。お前も物分りがいいなあ」

ドラゴスたちが声のしたほうを向くと、そこには十メートル以上はある、巨大な竜がいた。暗闇を松明が照らしているので、ずんぐりとして全身をくすんだ銀色の鱗が覆っている姿がよく見えた。まさしく銀竜であった。

「いつの間に！」

ドラゴスは驚いた。銀竜はあの巨体にして音も立てずにここへやってきたのだ。一般的な銀竜は走るのが苦手だというが、この自我竜にそんな常識は通用しなさそうだとドラゴスは思った。

ドラゴスとクフィーが銀竜にたじろいでいる隙にクドウナは祭壇から飛び降り、銀竜のほうへ駆け出した。慌ててドラゴスが連れ戻そうとすると、クドウナは「駄目！」と強く言い放った。そうしてドラゴスとクフィーが戸惑っているうちにクドウナは銀竜の横へたどり着いてしまった。

「どうして！」

クフィーはクドウナに悲しみと嘆きの入り混じった声を投げかける。しかし、クドウナは睨み返す。

「『どうして』はこっちの台詞よ！ どうして追ってきたの？ 私は村を救うの！ 無駄にしないで！」

「俺だってそれはわかってるよ！ でもクドウナを失いたくないんだ！」

「私だってクフィーと別れたくない！ だけどそれは他の人だって一緒なの！ 自分たちだけの幸せのために他人を犠牲にするなんて私には出来ない！」

クドウナは泣き叫ぶ。胸の痛みはクフィーと同じだった。だが痛みがわかるぶん、それを他人に押し付けることが出来ないのだ。

傍らでは銀竜がそのやり取りを悠然と眺めていた。楽しげな様子さえ見せる。

「他の方法は考えなかったのかよ」

ドラゴスが問う。

「他の方法なんかあるわけないでしょ！」

クドウナの声は鋭く響く。

「なんであきらめてんだよ！」

ドラゴスは声を荒らげて言った。クドウナも両手をいっぱいに広げて叫ぶ。

「あきらめた訳じゃない！　ちゃんと考えた結果これしかないの！」

「それはそんな時の話だろ！　今は状況が違うかもしれない、変えられるかもしれない。そんな風には思わないのかよ！」

「そんなこと言っただってどうしようもないでしょ！」

「馬鹿野郎！　それをあきらめてるって言うんだよ！」

クドウナの顔が悲痛にゆがんだ。拳を握ったクドウナは上目に睨みながら声を上げる。

「じゃあどうすればいいのよ！」

「馬鹿野郎！　目の前に道を作るのは、『どうすればいいか』じゃない。『どうしたいか』だ！　叫べ！　お前の願いを！」

「願い……村を救う……村を救うの！　だから私が犠牲になるの！　ふざけんな！　それじゃ全然救えないだろうが！　お前がいなくなったらクワイーはどうなる！　村長はどうなる！　何よりお前が、救われねえじゃねえか！」

クドウナは歯を食いしばった。

「願いつていうのはもつと大きくて、もつと先にあるもんなんだよ。クドウナ、過去のお前は何を願った。村を救うなんて言うてるけど、過去の自分にもそう言い訳するの？　未来に期待していたその目を、ちゃんと見ることが出来るか？　お前は過去のお前に期待されて今を生きているはずだろ！　なのにあきらめて、もつともらしい言い訳をすんじゃねえよ！　最初は上手いかわいかもしれない。でもそれで終わりじゃないんだ。あきらめなきゃまだ先があるんだ！　だから、最後まであがき続けてみせろよ！」

クドウナはうつむき、悔しそうに頬を濡らす。

「でも、私には……変える力がないの！」

「馬鹿野郎！ 一人で抱え込むじゃねえ！ たとえ力がなくても、誰かに願いを託したり、協力したりすれば変えられるかもしれないとは思わないのかよ！ どうして願いのために道を模索し続けないんだ！ 力なら俺が持つてるし、俺は村長やクフィーの願いによってここに来た。後はお前さえ願えば、俺は全力でお前を助ける。絶対に死なせない！ どんな悲劇だろうと必ず変えてみせる！ だから叫べ！ お前の願いは何だ！ 一番の願いは何だ！」

一番の願い。

その言葉はクドウナに届くと、胸の奥へと潜っていった。それはとても明るくて、クドウナの薄暗い泉を照らしながら下へ下へと進んでいく。そうして泉の底に落ちると、さんぜん燦然と輝きだした。すると絵のように断片的に散らばるクドウナの記憶の一つ一つを、鮮明に浮かび上がらせた。

クフィー……

そこにはクフィーの顔ばかりだった。最初から最後まで、クフィーとの思い出なのだ。クドウナの人生は、クフィーとの人生であった。

クフィー！

クドウナは地面に膝をついた。ぼろぼろと涙がこぼれ、息が上手く出来なくて苦しい。でも、それでも 願った。嗚咽を打ち破って叫んだ。

「私は……私は……生きたい！ あの村で！ クフィーと一緒に生きたい！」

ドラゴスは大きく息を吸った。

「そのクエスト！ 乗ったあ！」

空気を震わせ、宣言した。そして踏ん張ったかと思うとあつという間にクドウナの元へ移動し、抱きかかえた。すると銀竜もそうはさせじとすかさず鋭い爪でドラゴスたちを引き裂こうとした。だが

突き出されたドラゴスの左手の前で爪はぴたりと止まった。

「あいつらの願いは邪魔させねえよ！」

銀竜は止められたことに驚いたようだった。その隙にドラゴスはクドウナを抱えたまま身を翻し、再び祭壇へ一瞬にして戻った。

「クドウナ！」

クフィーはすぐさまクドウナに抱きついた。

「ごめんね……ごめんね……」

クドウナはそればかり繰り返し、クフィーに顔をうずめてとめどなく泣いた。

「お前ら、ちゃんとさがってるよ」

ドラゴスはそう言って祭壇を降り、銀竜の前に立った。

第三章 山麓の村 3の2

「おい……何をしてるんだ……」

銀竜の低い声は怒りを含み、より一層地鳴りのような響きとなった。

しかしドラゴスは答えない。銀竜に向けるのはただ 射抜くような目。

銀竜も対話が通用する状況ではないと察したのか、押し黙る。途端に静寂が染み渡る。

辺りはもうすっかり暗くなっていた。ところどころに立てられた松明が、銀竜とドラゴスを照らす。

風により、木々がざわめく。潮音にも似たその音は、ドラゴスの鼓動を徐々に高めていく。そしてより強く、銀竜を睨む。

両者の間には張り詰めた空気が流れていた。それは強く張られたピアノ線のように、それでいて脆く繊細なガラス細工のように、危うい均衡を保っている。しかし世界が止まってしまったかのように、両者は動かない。

風が、止まった。そして動き出す世界

銀竜が爪を立てて襲い掛かる。だがドラゴスは即座に前へ出て回避するとともに飛び上がり、銀竜の懐に入る。そこで強化した拳による渾身の一撃を銀竜の首元に叩き込む。

「なに!？」

しかし痛みはドラゴスにあった。銀竜の鱗は予想以上に硬く、鋼より硬いはずのドラゴスの拳を砕く。

普通にやっては勝てない。本能がそうささやく。ドラゴスは素早く飛びのいた。

ところが銀竜はそれを読んでいたのか、ドラゴスが着地するタイミングに合わせた一撃を繰り出す。

避けられそうになかった。ドラゴスは左腕を突き出して得意の防御姿勢をとった。

くっ！ さっき俺が止めた時よりも本気なはずだ。

ドラゴスは目一杯の魔力を纏った。

衝撃はなく、ドラゴスは銀竜の鋭い爪が目の前を掠めていくのを見た。そして振りぬかれる銀竜の腕。宙を舞い、夜の森に消えていったのはドラゴスの左腕。血しびきがドラゴスの左頬を赤くする。

ドラゴスは起こったことをすぐには理解出来なかった。速すぎる脈拍がドラゴスに異常を伝え、そこで状況に気付く。

銀竜に防御を破られたのだ。しかもドラゴスは銀竜の鱗を打ち破ることが出来なかった。

力の差。眼前に立ちはだかるのは圧倒的な力の差。

ドラゴスは振り返り、祭壇の陰に隠れるクフィーとクドウナに叫ぶ。

「逃げろ！ 今すぐ走れ！」

もし銀竜が二人を狙い始めたら、ドラゴスには守る術がない。

そしてドラゴスは銀竜と向き直り、左腕のことを考える。肩から先がなくなり、大量の血が溢れ続けていた。

くそっ！ どうすればいいんだ！ 治すか？ いや、こんなの治せる訳がない！ 魔力を込めて止血くらいは出来るかもしれない……駄目だ、時間がない！ くそっ！ くそっ！ くそっ！ 早く血

を止めないと 死ぬ！

対照的に銀竜は余裕もって追撃する。大きく振り上げた腕を叩き潰すように振り下ろす。

ドラゴスは右手で傷口を押さえながらなんとかかわし、銀竜なるべく距離をとった。

とりあえず今はこれしか！

銀竜のさらなる追撃が来る前に、ドラゴスは傷口を凍らせた。応急処置にしかないが、とにかく血を止めなければならなかったの

だ。

銀竜は次々と攻撃を繰り返した。銀竜の移動自体は速くないが、その腕の振りは速く、たとえドラゴスでも全く余裕はない。かといって止められる攻撃ではない。必死の回避を繰り返すことにドラゴスは体力を消耗していった。

それでもドラゴスはあるべく祭壇に銀竜を近づけないよう注意を払っていた。確認は出来ないが、祭壇の陰には気を失ったままの四人の大人がいるからだ。もしかしたらクフィーとクドウナが彼らを起こし、一緒に逃げていったかもしれないが、クフィーたちが逃げずにいる可能性だつてある。銀竜の攻撃から逃れるので精一杯で確かめられない以上、祭壇にはやはり銀竜を近づけるべきではない。

ドラゴスは劣勢に立ち、なおかつ疲労により刻一刻と敗北へと向かっているが、懸命に打開策を探していた。

敗北は即ち 死。

たとえ力の差があろうとも、負けるわけにはいかないのだ。

しかし不思議と逃げようとは思わなかった。単なる格闘ではない、命を賭けた勝負。死を意識せざるを得ない戦い。それがドラゴスの心と体に、生命の躍動を与える。

そんな経験は初めてであった。左腕を失ってから時間が経ち、自らの絶望的な立場を客観的に理解するほど、心が燃え盛る。

ドラゴスは実感していた。いま自分は命を燃やして 生きている！

決して楽しくはない。つらい状況にも変わりない。自分が銀竜より弱いという事実も叫び出したいほどに悔しい。

しかし、生きている。ここで生きている。むしろ自分という存在が生きるにはこうあるべきだったのではないか。そう感じた。

「しつくりくる……」

ドラゴスは呟いていた。そして銀竜の懷に飛び込んだ。しばらく時間を稼いだので、痛めた右の拳もほぼ治癒出来た。

ドラゴスはその拳に再度魔力を纏い、銀竜の腹を殴った。

だが結果は依然として変わらない。敗れるのはドラゴスの方であった。鋼より硬い魔力は銀竜の鱗に砕かれ、拳も鱗に傷一つ与えられない。

すぐさま注意深く距離をとり、再び回避し続ける状態へと戻った。銀竜の攻撃を避けることを第一優先としながらも、ドラゴスは痛めた拳に魔力を込め、患部の治癒力を強化する。今度は全力で殴った訳ではなかったので、すぐに治すことが出来るはずであった。

ところが拳に意識を集中させると、銀竜の鱗に触れた感覚が脳裏によみがえり、気が散った。あのいぶし銀のような色をした鱗に殴っただけでもわかる、その極めて硬い質感は初めての経験だった。金属よりもさらに硬質なのだ。

木と金属の質感は誰でもわかるくらいに違うが、金属と銀竜の鱗の質感にもそれほど差があった。鋼より硬いという程度であったドラゴスの魔力が通用しない訳である。銀竜の鱗はまるで別次元の硬度であったのだ。

やや時間がかかって右の拳の治癒を終えた時にはもう、ドラゴスの体力は限界に近づいていた。意識も朦朧とし始めている。しかしドラゴスの思考を支配するのは銀竜の鱗ばかりであった。

「なあ」

ドラゴスは銀竜に問いかけた。

「お前の爪と鱗、どっちが硬いんだ」

突然の問いかけに意表を突かれたのか、銀竜は攻撃の手をひきと止めた。そして少し考えたのち、大きく笑った。

「残念だったな！ どうにかして俺の爪で鱗を割ろうと思ったんだろっ？　だが爪よりも鱗の方が遥かに硬い！」

銀竜は愉快そうに言い放った。

「俺の鱗より硬いものなどないのだ！」

「そうか……」

「なんだ、諦めたのか……は。は。は。物分りのいい奴め」

ドラゴスは銀竜の方を見ず、自分の右手をじっと見つめていた。

そして手のひらの感触を確かめるように指を閉じてみる。

「やっぱりお前の鱗が一番かもな」

「だがな……」

銀竜はその隙に渾身の一撃を食らわせるため、腕を振り上げていた。

「これでとどめだ！」

かなり大振りだが、銀竜の爪は凄まじい速度でドラゴスへ向かう。ドラゴスもそれにすぐ気付いたが、避けられそうになかった。ドラゴスは右手を突き出し、銀竜の爪を受ける。

すると左腕を失った時と同じように、銀竜の腕は止まることなく振りぬかれた。そして再び宙に舞うものがあつた。

「ばかめ！」

銀竜は高らかに言う。しかしドラゴスは落ち着いていた。

「バカはお前だ」

宙を舞っていたものが地面に突き刺さる。

銀竜の爪。

「なぜだ！」

ドラゴスの右手を覆うのは 銀竜の鱗。

「見て触って、忘れられねえんだ。そりやイメージ出来るさ。悪いがそういう能力なんだ。お前にはいい物をもらったよ」

とは言うものの、肌に纏う魔力を銀竜の鱗として発現させるには相当の魔力を必要とした。

ドラゴスは立っているのも精一杯で、わずかによろめいてしまった。

しかしその脱力を余裕の表れだと受け取ったのか、銀竜はその隙に追撃をせず、たじろいだ。

「どうした……来いよ！」

射抜くような目。

ドラゴスは今にも倒れこみそうな自分の体に鞭を打ち、全身全霊を込めて叫んだ。

ここで決する。それは覚悟であり賭けであった。すべての魔力を右の拳に集中させ、一切の防御を捨てる。

ドラゴスはすぐさま動きだした。まっすぐに走り、飛び込むようにして銀竜の首元へ拳を叩き込む。ぶつかり合う鱗と鱗が激しい衝突音とともに火花を散らし、互いに砕ける。

するとそこへ銀竜の腕が襲い掛かる。銀竜は後ろにのけぞりつつも払いのけるようにしてドラゴスを高く跳ね飛ばす。防御のための魔力を纏っていないドラゴスは全身が軋むほどの衝撃を受けた。猛烈な勢いで意識が飛びそうになるが、歯を食いしばり必死に踏みとどまる。

宙高く投げ出されたドラゴスは、祭壇の上に落下しようとしていた。しかし意識を保つことだけで精一杯で、空中で姿勢を整える余裕などなかった。そしてもう残っているかもわからない魔力を、着地に使ってしまう訳にはいかなかった。ドラゴスは再び歯を食いしばり、落下による二度目の衝撃を耐えた。

石造りの祭壇に倒れた体をなんとか起こし、力を振り絞って立ち上がる。もはや凍らせた左肩も溶け始めていたが、それに対処する魔力も残っていない。徐々に血が染み出してきているのをドラゴスは感じていた。

銀竜の首元を見ると、先ほど拳を叩き込んだ場所の鱗が割れている。次の攻撃もそこだ。

しかし銀竜と同様に、ドラゴスが拳に纏った鱗も砕け散ってしまい、消えていた。魔力はもう、尽きかけていた。

「まだだ……」

ドラゴスは右の拳に意識を集中させる。

「お前の鱗が砕けても、俺はまだ……」

命を燃やし、魂を削るように、魔力を振りしぼる。

「終わらねえんだよ！」

決死の思いで精神を滾^{たぎ}らせる！

ドラゴスは再び拳に銀竜の鱗を纏い、前へ走り出す。そして先ほ

どと同じ場所に 叩き込む！

既に碎けている銀竜の鱗とぶつかり合う拳。しかし先ほどとは違い、ドラゴスの拳は止まらない。硬い鱗を纏った拳が銀竜の皮膚を、突き破る。傷はまだそれほど深くないが、赤い血が飛び散った。

「ぐおお！」

銀竜は唸り声とともにまたもやドラゴスを払いのけようとするが、ドラゴスは飛びのいて回避する。銀竜は首元から血を流しながら、後ろへバランスを崩した。

すかさずドラゴスは突進し、銀竜の腹に体当たりした。ぶつかる瞬間、ドラゴスの左肩から血が噴き出す。

押された銀竜が仰向けに倒れると、ドラゴスはすぐさま首元に飛び乗る。

拳に纏っていた鱗も保てずに消えている。しかしもう魔力など残っておらず、生身の拳で殴るしかない。

だからたった一つの拳で、先ほど与えた傷に追い討ちをかけるように何度も殴る。銀竜の血が勢いよく噴き出し始めるが構うことなく殴る。もかく銀竜の上から落ちないよう踏ん張りながら殴る。鮮血の中で銀竜の肉を引き裂いていくように殴る。その度に左肩から大量の血が溢れても殴る。薄れゆく意識の中で殴る。他の一切を忘れて殴る。半狂乱になって殴る。必死で殴る、ただ殴る。殴る。殴る。殴る。殴る殴る殴る殴る殴る殴る

「あああああ！」

殴る！

銀竜の噴血が止まった。血は傷口からただ溢れるように出てゆくのみとなった。銀竜の心臓が止まったからであった。

夜はそこで静寂を取り戻した。風が木々をざわめかせる。まるで潮が引くように、ドラゴスは意識を失った。

ドラゴスが銀竜の上から力なく転げ落ちると、あとは静寂のみが残った。

第三章 山麓の村 3の3

旅の一行が借りた一軒とは別の家に、ベッドが一つあった。そこには男が一人横たわっている。まるで人形のように動かなかった。片腕がないため、本当に壊れた人形のような有様だった。ドラゴスであった。

傍らには椅子が三つ。リイラ、テナ、チトクが座っていた。沈黙の深夜であった。

「あ……」

最初に気が付いたのはリイラだった。ともに過ごした時間が長いせいだろ。リイラと同じようにドラゴスを看ていたテナとチトクには、何の変化もないように見えた。現にドラゴスは目を閉じたまま微動だにせず、横たわったままだ。

しかし、リイラにはわかったのだ。ドラゴスが意識を取り戻したことを。

「ん……」

ドラゴスは目を開いた。真っ先に視界へ入ったのは、リイラだった。喜びか驚きか、それとも安堵なのかわからない、なんとも言えない表情をしている。目には涙を浮かべていた。そして後からリイラの握っている手が自分の手だと、ドラゴスは気が付いた。

「ドラゴスさんっ！」

「大丈夫、大丈夫だよ……」

リイラが呼びかけると、ドラゴスは反射的に弱弱しい声で答えた。リイラの心配そうな顔を見ると、つい大丈夫だと言ってやりたくなるのだ。

もう一方の手で頭をなでてやろうと思い、そこで気付く。ないのだ、左手が。

そうか……

ドラゴスはそうして銀竜との戦いを思い出し、自分の今の状況も

おおよそ把握した。

「大丈夫。死なずに済んだし、もう大丈夫」

依然として弱い声しか出せなかったが、今度ははっきりと言った。

ドラゴスの意識がすっかりとしているのを確認したからか、次にテナとチトクが寄ってきた。

「ドラゴス！」

「どうした……」

「ばか！ どうしたじゃないよ！ 急にどっか行っと思ったたらボロボロで運ばれてきて！ 全然起きないからお姉さん心配したんだよ！ ドラゴスに限ってそんなことは絶対ないと信じてたけど……もう起きないんじゃないかって……もしかしたら、死んじゃうんじゃないかって思うと……」

そこからはもう言葉にならない声を上げて、テナは泣き出した。それまでよほど思い詰めていたのだろう。目一杯泣いた。チトクも直立したまま、黙って泣いていた。

「俺が死ぬわけないだろ、ばか……」

安心させてあげたいが、力の入らない声であつたため説得力はなかった。

目を覚ましてから時間が経つにつれ、体の感覚が鮮明になってくる。そうして感じるのは、左腕の激痛だった。

捻りつぶされるような痛みが左腕を襲う。しかし目をやると、肩から先には何もない。幻肢痛というものであつた。

幻肢痛は体の一部を失ったことを脳がちゃんと認識出来ていないことで起こると言われている。だが「ないこと」を認識するのは難しい。

ドラゴスもそうであつた。ないはずなのに、目を閉じればそこに痛む左腕があるかのように思えてならなかった。

ドラゴスは右手で無意識にさするうとした。すると気が付いた。

……これは！

わずかだが、自然と魔力が左腕の位置に発現していたのだ。そこでドラゴスは目をつぶったまま、より左腕に意識を集中させてみた。すると、ある程度の硬さを持った見えない左腕が形成されていた。そうか、常に左腕を強くイメージしている状態なのか……それならば……

「テナ……」

「なに？ どうしたの？ お姉さんがなんでもしてあげるよ！」

テナは深刻そうにたずねる。

「そのうち手袋を縫ってくれないか……肩まですっぽり入るやつだ。生地は革がいい……大きさは右手を参考にして……」

「え？ う、うん！ わかった！」

見えない左手も手袋を付ければよりイメージしやすくなり、発現させやすくなるだろうとドラゴスは思った。荷馬車には裁縫用具一式を積んでおり、テナは近いうちに作ってくれるだろう。確か、なめし革も十分にあつたはずだ。

思い付きをテナに告げると、ドラゴスは再び目を閉じた。まだ体力が回復しておらず、もう少し休む必要があつたからだ。それに起きていると意識しなくても見えない左手が発現してしまい、魔力を消費し続けている。意識すればなおさらで、何もしていなくても疲労が蓄積していく。

「また少し……寝るよ……」

ドラゴスはそう言って眠り始めた。

それから一時間ほど寝て目を覚ますと、今度は意識も先ほどより幾分か明瞭となつていた。室内は暗く、ろうそく蠟燭の灯りしかなかった。ドラゴスはそこであろうやく夜であると知った。

「大丈夫ですか？」

ドラゴスが体を起こすと、リイラが声を掛けた。

「ああ、だいぶ良くなったよ」

椅子に座ったまま眠っていたチトクも、すぐに目を覚ました。

「今、夜中なのか？」

「はい」

目をこすりながらチトクが説明した。

「ドラゴスさんは銀竜を倒した後すぐにここへ運びこまれて、それから丸一日以上眠っていましたから」

「そんなに寝ていたのか……」

ドラゴスは銀竜との戦いが過酷なものだったことを改めて思い知る。勝敗は分けたのはわずかな差だった。

ドラゴスの力は明らかに銀竜より劣っていた。ドラゴスは銀竜の力を上手く利用して生き延びたにすぎない。「勝った」と言うには程遠い勝利であった。

くそっ！

悔しさが込み上げる。自分の弱さに腹が立つ。

「ドラゴスさん」

思いつめた顔をしているドラゴスに、チトクが話しかける。

「あの、ごめんなさい……」

ドラゴスには何のことだかわからなかった。

「僕、全然役に立てなくて……ドラゴスさんが祭壇へ向かった時も追いかけたんですが、ドラゴスさんをここへ運んだのも祭壇にいた村の大人たちですし……僕はそれを見てることしか出来なくて……」

チトクは沈痛な面持ちであった。

「そんなこと気にするなよ……」

以前のドラゴスならそこで笑ってみせて背中を叩いただろう。しかし、今のドラゴスにはそれが出来なかった。チトクが自分の力のなさを嘆く気持ちがよくわかったのだ。

力のない者の気持ちはわからない。今までそう思っていたのは所詮、傲慢であつたのだ。今ドラゴスの中に渦巻く感情はチトクのものとは何ら変わらない。ただ力のないことが悔しいのだ。だから何を言うべきかもわからなかった。

「そついえば、テナは？」

ドラゴスは逃げるように、話を変えた。

「姉ちゃんはさっきドラゴスさんの右手を測ってましたし、最初に借りた方の一軒でさっそく革手袋を縫ってると思います」

依然として暗い調子でチトクは話す。

「そんなに急がなくてもいいんだけどな……今日はもう遅いし、寝るように言っと思ってくれないか？ お前たちも寝ていいよ。俺はもう大丈夫だから」

ドラゴスがそう告げると、チトクは「わかりました」と言ってその場を後にした。残ったリイラは「私はもう少し」とだけ言って、ドラゴスの傍らに残った。

それからしばらくすると、チトクが静かに戻ってきた。

「どうした」

チトクは俯いたまま、唇を噛み締める。そして拳を強く握ってから言った。

「ごめんなさい、出来ませんでした……」

「出来ない？」

ドラゴスは不思議に思った。

「出来なかったんです、僕には」

チトクの頬を涙が伝う。

「きつと姉ちゃんにとってのドラゴスさんは、僕らが思っている以上に特別で……それなのにこんなに傷ついて帰ってきて……心の支えが揺らいで、不安で、どうしたらいいかわからなくなって……震える手で！ 泣きながら！ がむしゃらに縫ってたんです！ ……僕には、無力な僕には！ 止めることが出来ませんでした！」

チトクが嗚咽混じりに叫ぶ。

「一体僕はどこまで無力なんでしょうか！ どうしてこんなに無力なんでしょうか！」

「そんなに気負うことじゃないよ……」

ドラゴスはすべて自分の弱さが招いてしまった結果だと思った。

「ドラゴスさんには力があるからそう言えるんです！」

興奮したチトクはそこまで言ってから、我に返った。

「ごめんなさい……」

沈黙が流れる。

「違うよ」

ドラゴスは静かな声で言った。

「力があつたら、こんな有様にはなつてないさ」

ドラゴスはしばし考える。これはチトクの問題であるが、ドラゴスの問題でもあった。

「そもそも力は……『あるかないか』で考えていいものなのかな。力のない奴なんていない。誰もが同じ道の上にいるんだ。ただ前に進めばより強くなる。きつとそれだけだ。だからチトク、進もう。これから、俺もお前もたくさん進んで……強くなるう」

それがドラゴスがチトクに向けた、いや、自分自身に向けた答えであつた。進むしかないのだ。

「……はい」

かすれた声だったが、チトクはしっかりと目でドラゴスを見据え、噛み締めるように返事をした。

「今日はもう寝とけ。テナにも休んで欲しいけど……今はテナのしたいようにさせるしかないかな」

ドラゴスに言われ、チトクは今度こそ寝に行った。

残るリイラと二人だけになった。傍らにリイラがいるのはごく自然なことなので、ドラゴスはそのままにしていた。しかし、リイラだつてずっとここにいない必要はない。こうして甘えている訳にはいかない。

ドラゴスがそう思った時、リイラが問う。

「もういいんですか？」

体のことだろうとドラゴスは思った。

「ああ、もう大丈夫だ」

しかし、リイラは再び問う。

「本当ですか？」

なんだろう。ドラゴスは不思議に思った。

「ああ本当だ」

リイラはドラゴスの目を見つめた。その眼差しには力がこもっている。

「嘘はいけませんよ？」

リイラがドラゴスの手を強く握る。

「わかるんですから、ドラゴスさんが全然大丈夫じゃないことくらい。何か強い感情を抑えつけて、無理をして穏やかに振舞っているように見えます。……前を向いているドラゴスさんはカッコいいです。でも、心に蓋をしてたらドラゴスさんじゃあないですよ。無理はしないでください」

「そんなこと」

リイラはドラゴスの言葉を遮って続ける。

「私もドラゴスさんに抱えてもらってばかりじゃ駄目なんです。このままずっとドラゴスさんのお荷物じゃ駄目なんです。私は『物』じゃない。ドラゴスさんが私を『人』にしてくれたから……」

リイラの声に熱がこもる。

「私は同じ『人』として、ドラゴスさんと対等でありたいと思います。戦いでは同じ場所には立てないかもしれませんが……せめて心は！ ドラゴスさんとともにありたいんです！ あなたを支える『人』でありたいんです！」

リイラの手は暖かかった。だが伝わってくるのは熱だけでなく、強い気持ちもドラゴスに届いていた。リイラの心は今、しっかりと自分の足で立ち始めていた。

それに触れて、ドラゴスは気付いた。自分は強がっていたのだ。力だけでなく、自分の心ももっと強いものだと思信していた。

だけど、そうじゃなかった。

「リイラの言う通り、やっぱり無理してたかもな。これからもっと強くなるっていう前向きな気持ちは嘘じゃないよ。でも本当は銀竜が自分より強かったことが、悔しくて……」

ドラゴスはリイラの心を前にしてようやく、自分の心が傷ついて潰れかけているのを知った。

「悔しくて悔しくて……」

ドラゴスは悔しさに歯を食いしばる。気づけば涙を流していた。こつこつという時は、リイラの心に寄りかかってもいいのかもしれないと思った。

リイラは腰をベッドに移し、ドラゴスの手をぎゅっと握ってみせた。

「悔しくて……くそっ！ くそっ！ くそっ！」

リイラはドラゴスの頭をそつと抱き寄せた。

「くそっ……くそっ……」

ドラゴスは泣いた。リイラの胸の中で思い切り泣いた。

「大丈夫、あなたはきっと強くなる。もっともっと強くなる。だから大丈夫、大丈夫」

リイラはドラゴスを強く抱きしめる。そうするほどに心の蓋が取れ、ドラゴスはむせび泣く。

静かな夜に、心が触れ合う。

彼は上を見たから、自分の低さを知ったのだ。見上げた世界では自分という存在はいつだって一番下であり、敗北者となる。

しかしそれでも上を見続ける敗北者こそ、強くなる。

第三章 山麓の村 3の3（後書き）

竜の目のクエスト 第三章 完

第四章「西部首都」へ続く……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0021n/>

竜の目のクエスト 【少年漫画的王道ファンタジー小説】

2011年5月5日22時50分発行